

寂譽衣不  
具依リ  
局マデ  
候祇

土産ノ物  
ヲ獻ズ

肥前五島  
ヨリ上洛

出家以後  
始メテ參  
内ノ事等  
奏上  
寂譽三條  
西實隆ヲ  
訪フ  
美濃ニ下  
ル

金春金剛  
寶生三座  
參勤ス

文明十八年二月五日

一五八

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫記録甲二十七所收

正月廿八日、中おうかん院とち

のものうとりきこしめすへきとてめすよころもふくあるよよりつね  
まてまこうよて、かつくとして御すこちやうらら。

二月五日、寂譽らくはうめして御あいめん、御うらら考此物三色一うらら、御う  
くもん所よて三てうしねまこう、御さう月とふ、縁うさうとちまこうの  
人もあり、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫記録甲二十八所收

文明十九年正月廿一日、中うら

かんぬんさうの御宮とて、ちらいと、御ちやうらら、御さうしうとていらす  
る、御といめんありて、御さう月とふ、

〔親長卿記〕

十七 正月廿五日、晴陰、中

今日江南自九州上洛、就歸朝之儀、  
依有注進之子細也、

〔十輪院内府記〕

中 正月廿九日、略江南院自五嶋去廿五日京著云々、

〔實隆公記〕

九 正月廿六日、癸酉、晴、無事、自江南院墨被送之、無爲歸朝、珍重  
々々、

二月五日、辛巳、晴、於小御所有御一獻予又進上御兆子了、中抑寂譽法師細素

衣重帷、參内、出家以後始而參内也、異朝事等申入之、於御學問所前庇被下御  
香袈裟、參内、出家以後始而參内也、異朝事等申入之、於御學問所前庇被下御  
盃了、今度魚食云々、

三月一日、丁未、天顔快晴、朔日幸甚々々、早朝行水、午後江南院來、歸朝以後

〔親長卿記〕

十七 六月五日、晴、江南今日下向濃州、

八月廿日、晴、下親繼於境、江南院荷物可渡之、由客衆等申之故也、

○春房、伊勢貞親ト共ニ官ヲ棄テ、逃レ、尋テ、薙髮スルコト、三年四月  
二十八日ノ條ニ見ユ、

六日、壬午興福寺薪猿樂、

〔大乘院寺社雜事記〕

百二 正月十六日、夕方雨雪、

一今日衆中新坊別所集會初、薪猿樂事下知之、

二月六日、

一薪猿樂初之、金晴、金剛、寶生參申、

七日、

一金晴大夫參、見參、扇一本給之、

八日、

文明十八年二月六日

一五九



金春藝能  
古市澄胤  
等見物

觀世遲參

松殿忠顯  
見物

大門ニテ  
四座參勤  
寶生藝能

文明十八年二月六日

一六〇

一金晴參勤社頭藝能神妙云々(澄胤)古市以下衆中於社頭見物云々當時又四座之内可然云々

九日、雨下、

一〇中略 難波新左衛門串田右京今日參申爲見物云々觀世今日下向云々、十日、

一觀世於社頭藝能昨夕罷下遲參條不可然旨衆中加下知云々公方御用之間自然ニ延引非緩怠云々、

一松殿(忠顯)中將爲見物下向粟井同道了、

十二日、時正也、

一大門能四座參勤云々寶生參社頭了昨日ハ依雨下無之

十三日、

一大門四座皆參、

十四日、

一大門觀世一座遲參分也云々合八ヶ日在之、

十五日、

手猿樂ノ  
七郎

上卿無キ  
引ニ依リ延

社家ニ付  
セラレン  
トス

追行  
上卿正親  
町公兼

奉行坊城  
俊名

一手猿樂之七郎夜前參申今日觀世以下同道上洛云々、

〔大乘院日記目錄〕

四 二月六日、薪猿樂初之、三座云々、

十日、觀世下向十一日、參社頭了、至十四日八ヶ日在之、

八日、申春日祭ヲ延引ス、尋デ、之ヲ追行ス、

〔御湯殿上日記〕

〇京都御所東山御文 二月八日、春日まつり上卿まじりより、志や夢いふよつきてゑんよむちり、庫記錄甲二十七所收

〔親長卿記〕二月八日、晴、今日春日祭依無上卿領狀被付社家、仍被付社家之時、可有御神事否之由被尋仰、被付社家之時、不及御神事之沙汰之由申入了

〔實際公記〕

九 三月二日、戊申、晴、今日春日祭、權中納言公兼卿參行云々、

三月二日、晴、今日春日祭云々、上卿權中納言、公兼、辨不參、奉行藏人辨俊名如連年予且遙拜、

〔大乗院寺社雜事記〕

百二 三月三日、

〔春日祭歷名部類〕

同十八年三月二日、戊申、(文明)祭、式月延引、

〔春日社記錄〕

〇三 大和 春日祭上卿已下參行歷名部類

〔春日祭歷名部類〕

上卿權中納言公兼、辨不參、奉行藏人左少辨俊名、

〔春日社記錄〕

〇三 大和 春日祭上卿已下參行歷名部類

文明十八年二月八日

一六一



文明十八年二月八日

一六二

同十八年二月八日、被附社家、但延引歟、  
同年三月二日、申、上卿權中納言公兼、辨不參、

御方違行幸、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文 庫記 二月八日、略、中別てんよくろとへ

ある、御さう月三こんら、六日の日あるよ、わとくしともわをれまいらさ  
て、御やうのうとよとつねられてよよひある、  
(土御門有宗)

〔親長卿記〕

十七 二月八日、晴、略、中又別殿行幸爲一昨日、依御忘却無出御、  
今日可有出御可爲何様哉、可尋陰陽頭之由、可仰頭辨云々、今日可然之由有

宗朝臣申之、奏聞、先規如何、  
○コノ後ノ御方違行幸ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文 庫記 三月廿日、へち殿くろとへある、こ  
とちら御さう月ら、ふしととの御ミやけよこもし三ら、

五月六日、へち殿くろとへある、源大納言より三色御とる一うまいりて、御  
ひし〜とら、まん大をけ殿けさより御をらいとらりて御さふらひさ  
し、ひるまう宮此御方、いゝまう宮の御うとある、

黒戸ニ行 六日ナル 失宮女忘 土御門有 宗ニ尋ネ 御方違 四十五夜

三月二十 日黒戸ニ行 幸 五月六日 庭田雅行 酒饌ヲ獻 皇太子御 内

九月十八 日長橋局ニ 行幸

祇候ノ人 日連歌

十一月二 日勾當局ニ 行幸

十二月十 五日

六角高頼 申沙汰

八日、略、中いままう宮の御うとくまんきよなる、

九月十八日、略、中あよひハ別てんよさうハしへなる、御とる三、代よても  
とせらるゝ、

〔實隆公記〕

十 九月十八日、庚申、晴、行水、入夜參内、今夜別殿幸勾當局、獻及

數巡、源大納言、兵部卿、右衛門督、下官、源宰相、以量等候之、日連歌五十句計被  
遊之、予執筆候、月十九日、連歌ノコト、十二還幸、及曉天傾數盃沈醉、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文 庫記 十一月二日、略、中へちてんこうと  
うつ不参へある、

十二月十五日、略、中あよひへりてんさうハしつ不参へある、

〔實隆公記〕

十 十二月十五日、丙戌、晴、略、中今夜別殿幸勾當内侍局、則還御

十日、丙、義尚、近江石山寺ニ參詣セントス、

〔大乘院寺社雜事記〕

百二 二月八日、

一石左衛門下向、室町殿來十日、石山御參詣云々、御日中六角可申沙汰云々、  
○參詣ノコト、他ニ所見ナケレドモ、姑ク掲記ス、

十一日、丁、曲舞アリ、

文明十八年二月十日、十一日

一六三



奈良松ノ  
舞  
大黒黨ノ  
執奏

太刀ヲ賜  
フ

海老

鯉

濱炙

雁海老  
貝鮑

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文 庫記録甲二十七所收 二月十一日、雨ふる、略中、○中 さら松といふく  
さま持一せん申とたよし、大こく申、ろとまじせらるゝ、とひ物もさくてく  
こんはうりさふ、  
(前書)  
くさま持よ御さちさふ、

伏見宮邦高親王、三條西實隆ニ物ヲ賜フ、

〔實隆公記〕九 二月十一日、丁亥、雨降、○中 自伏見殿海老一折被下之、

○コノ後、邦高親王、實隆ニ物ヲ賜フコト、便宜左ニ合致ス、

〔實隆公記〕九 三月廿三日、己巳、晴、自伏見殿鯉魚一被下之、晚頭江南院入

來之間、相共賞翫之、

五月七日、辛亥、霽、及晚雨降、○中 自伏見殿濱炙賜之、

十二日、子、戌 義政夫人日野氏、近衛政家ニ物ヲ贈ル、

〔後法興院政家記〕十一 二月十二日、子、戌 晴、風吹、○中 自御臺給美物、雁一、海一、折

十三日、丑、己 丑ノ日御祝、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文 庫記録甲二十七所收 二月十三日、きふの御うし御あち

やゝよりらり、

○コノ後、丑ノ日御祝ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文 庫記録甲二十七所收 三月十九日、おふし、雨ふる 志んさいより御うし

のちちんらり、

四月二日、雨ふる、略中、御うし、御ちの人よりらり、

廿六日、○中 御うし、こんきのふのせんよてらり、

五月九日、おなし、はるし 御うし、のちちん、志んすけ殿よりらり、

六月三日、てらし、 御うし、上らぬよりらり、

十五日、御うし、權よりらり、

廿七日、○中 御うし、新せけよりらり、

七月十日、略中 御うし、いよ殿、

廿二日、へるし、 御うし、御あちやゝよりらり、

八月十七日、ちとふる、 御うし、新せき殿よりらり、

廿九日、雨ふる、略中、御うし、新内侍殿、

九月十一日、略中 御うし、のちちん、御ちの人よりらるゝ、



文明十八年二月十三日

一六六

廿三日、略中 御うし、ず孝殿よりらる。  
十月五日、御うしのうちん、新大をけよりらる。  
十七日、御うし、いよ殿、  
十一月十二日、略中 御うし、上らぬよりらる。  
廿四日、御うし、こんをけ殿、  
十二月六日、御うしのかちん、まんをいよりらる。  
卅日、略中 御うし、上らぬよりらる。

周防興隆寺妙見社下宮遷宮、同國守護大内政弘、子龜童丸義ト之ニ臨ム、

〔興隆寺文書〕四周防

遷宮次第

〔編纂者〕  
〔大内殿御代、下宮遷宮之次第〕

周防國吉敷郡氷上山下宮御遷宮次第

御出社

大殿様 眞、

殿様 義、

當山奉行問田大藏少輔弘胤

奉行問田  
弘胤

行事順序

本社遷幸

神殿行導 音樂千秋樂

御案 法花堂宥什、  
惣持坊晤禱、

次神體御安座

次著座讚

次開眼

次御供 傳供四智讚、

次上宮御供三膳、則御戸開之、

次幣帛

次祝言

次幣御頂戴次千秋樂、次惣禮、

次樂 此時、登高座、  
白柱、

次著座讚

次行法 先方便等、

次唄師

文明十八年二月十三日

一六七



文明十八年二月十三日

一六八

勤行衆  
導師

- 次散華師
- 次表白 行法次第如常、
- 次諸天讚 除撥遣段、
- 次甲四智讚
- 次佛布施
- 次廻向方便
- 次樂 蘇香急、
- 次伽陀 和光同塵、
- 次樂 青海波、
- 次法施 九條錫杖、十如是、自我偈、心經、
- 次樂 越殿樂、
- 次伽陀 願以此功德、
- 次退散樂 太平樂、
- 勤行衆
- 權大僧都法印祐増

權少僧都有澄

唄師  
鉢  
灑水  
讚頭  
伽陀

上宮社參  
次第

- 解除
- 權少僧都精俊
- 唄師
- 權大僧都法印豪祐
- 權律師
- 善滿坊源親
- 東琳院宥勝
- 灑水同
- 佛眼院源増
- 讚頭
- 宮内卿寃海
- 伽陀
- 心蓮坊重藝
- 樂者
- 權少僧都源俊
- 權少僧都法施
- 成就坊宥觀
- 同鉢
- 金山坊豪猷
- 同
- 理藏坊源裔
- 同
- 隆賢坊源恕
- 寶淨坊宥教

(附表)  
「上宮御社參記録」文明十三年午

上宮御社參之目錄

多々良朝臣龜童丸于時御行年十丁酉  
 當寺別當權大僧都法印乘海、行年六十五歲、壬寅

文明十八年 丙二月一日未時ヨリ、前々爲御精進東圓坊江御登山アリ、  
 文明十八年二月十三日

一六九



供衆

文明十八年二月十三日

一御供衆

右田右馬助弘量

鷺頭四郎護豐

仁保太郎護郷

杉兵庫助弘隆

飯田大炊助弘秀

伴田大炊助弘興

相良遠江守正任

弘中新四郎武長

伴田彦四郎弘興

岡部十郎武景

政弘龜童  
丸興隆寺  
ニ入ル

式精進

一同七日、御屋形様午刻如例年自山口當坊江有御出、式三獻已後、東圓坊ヨ  
リ若子様當坊へ御移アリ、上之坊奥於御座敷式三獻アリ、別當御相伴ニ  
被參、御給仕人者、御内方御祝言已後、若子様下之坊御屋形様御座所へ出  
御アリ、今日ヨリ、式御精進、

一七〇

祈禱  
百座妙見  
供

一同十三日、爲御祈禱寅一於上宮九間十坊令參勤、百座妙見供修之、

大坊 權大僧都法印乘海

修禪坊 權大僧都源孝

十乘坊 權少僧都源貞

寶淨坊 權少僧都源淳

佛乘坊 權少僧都源俊

圓乘坊 權少僧都重祐

淨林坊 權少僧都豪海

理藏坊 金剛佛子源尙

一乘坊 金剛佛子忍海

眞如坊代越中公 金剛佛子祐海

護法所社  
參

一同日辰之時、上之坊ノ御裝束候て、下之坊自御門先、護法所江御社參、御幣  
御子之手ヨリ東圓坊請取之、右田右馬助ニ渡之、御頂戴云々、

一先達東圓坊權少僧都豪祐、行年四、十、七、

次御供衆

文明十八年二月十三日

一七一

先達  
供衆



文明十八年二月十三日

傳庭

安樂坊宥澄

仁保

侍從公增海

御劍役

杉歲千代

御香箱役

伴田岩才

伴田大炊助息

青景鶴一

青景小太郎息

右田右馬助弘量

以下護法所庭祇候也、何モ裏打ニテ、

杉平左衛門尉武明

弘中四郎武宗

一於上宮御幣當法花堂興禪坊豪精、御殿ヨリ持下、乘海江渡之、若子様御頂戴云々、

一御社參之次第、上宮ヨリ五社、五社ヨリ本堂、々々ヨリ八幡、々々ヨリ卅番神、以上十ヶ所云々、彼神前銘々江香爐置之、其後如下之坊御歸アリ、於廿一間御一獻アリ、御贄殿方ヨリ取沙汰候、

御屋形様

若子様

一七二

宇野

圓光坊豪實

公藤

中將公祐惠

杉兵庫助弘隆

杉次郎武益

飯田大炊助弘秀

社參次第

裝束

軾

神樂錢

施物

神馬

別當乘海

一御供若徒衆組卷、一腰宛給之、

一御裝束、長絹大口御袷并御下重、白御小袖、五明御帶、御湯帷、御サケ基、白、別當江給之、御使伴田大炊助、

一上宮江御持候金紫花香筥同盆、別當給之、御使相良遠江守、

一於下之坊御一獻之時、御太刀一腰、別當進上候、其外祇候御家人衆、多分御太刀進上候云々、

一御軾千疋、別當給之、

一御神樂錢五連、宮守渡之、

一上宮行法之施物千疋、配當之、

一御神馬、月毛、別當給之、

右御社參之日天晴、誠以相叶神慮相見タリ、次御社參之時、請遣方以下、并神事儀、宮内卿公鏡海取沙汰仕候了、

文明十八年二月十三日

爲後龜注之了、

文明十八年二月十三日

一七三



山城ノ住民、宇治平等院ニ會シテ、國中ノ掟ヲ定メントス、

〔大乘院寺社雜事記〕 百二 二月十三日、

一今日山城國人於平等院會合、國中掟法猶以可定之云々、凡神妙、但令興城者爲天下不可然事哉、

十四日、庚寅義尙、參内遲ル、ニ依リ、先ヅ物ヲ獻ズ、

〔御湯殿上日記〕 ○京都御所東山御文庫記 甲二十六所收 文明十七年十二月廿三日、○中む

ろまち殿より御さんといあるへなれとも、御らんらくのよし御申、

〔御湯殿上日記〕 ○京都御所東山御文庫記 甲二十七所收 二月十四日、むろまち殿より御さん

んと持ち、とるよより、まのひらさやの代り、この御所よりも、とる御さちゐいらさる、てんろうの御ふとまり、むろまち殿より此きくの枝ととるるり、

○義尙ヲシテ、右近衛大將ヲ兼ネシムルコト、十七年八月二十八日ノ條ニ見ユ、

楠葉西忍歿ス、

〔大乘院日記目録〕 四 二月十四日、夜西忍入道入滅、九十

〔大乘院寺社雜事記〕 百二 正月廿五日、

一西忍入道來、自昨日在奈良云々、九十

二月十五日、

一西忍入道昨日十四日、於古市令入滅云々、九十不便々々、嘉吉元年辛酉歲よ

り見初、（行方）至去月廿五日、四十六年也、此內在唐一年在之、天竺人（足利義持）ヒシ號唐

人、倉在二條殿之御地之内、三條坊門（辰巳角）カス丸也、彼ヒシリ之子也、勝定院殿

背上意、被召籠被預一色了、父之ヒシリ入滅後御免、父之跡ハ西忍之舍弟

民部卿入道相續之了、文安比入滅了、無子孫云々、西忍ハ勝定院御代和州

ニ下向、自奈良至曲川令住立野了、仍田地共典川與立野ニ在之、私相傳之、

其後奈良之押上ニ居、又歸立野、其後古市之北口ニ居住、今度入滅了、九十

三歳也、後五大院殿立野ニ御座之時、於御前令入道、依爲天竺人の子、被付

西忍了、御同年也、御弟子分也、少人之時名ムスル、俗名天次、子息長子ハ新

衛門尉元次、次男四郎、（渡唐）時召具、三男陽禪房大定舜、（東金堂）息女二人在之、立野

之戊亥ハマ、子也、其子孫于今號戊亥也、西忍之妻女元次等之母ハ、本之

戊亥之女子也、東轉經院之坊主、宗信實禪房僧都之妹也、宗信ハ予同學也、

古市ニテ 歿ス 一年 天竺人ノ 父ハ足利 義持ノ勸 氣ヲ蒙ル 西忍ノ弟 文安頃 立野大和 古市北口 經覺ニ就 キテ出家 ス 幼名ムス ル俗名天 次子 妻ハ戊亥 ノ女子



文明十八年二月十四日

一七六

楠葉ハ母方ノ名字平姓ヲ稱ス

中津ノ執成ニテ義滿ノ扶持ヲ受ク

三回忌

十三回忌

兩度渡明

名字號楠葉事ハ、西忍之母儀楠葉之者也、八幡領云々、仍母方之名字也、元次以下成平姓ハ、立野衆悉以平氏故也、母平家也、立野ハ此門跡坊人也、依之各奉公分也、無殊儀者也、  
(尾羽義德) 鹿藪院御代自天竺來、仍每月御恩被下之、相國寺之絶海國師之申沙汰也、凡希有子孫相殘了、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 長享二年二月十四日、

一天竺人西忍第三年也、不便々々、

〔大乘院寺社雜事記〕百十四 明應六年二月十四日、小雨

一西忍入道、西方院法印正忌日也、

〔大乘院寺社雜事記〕百十五 明應七年二月十四日、

一楠葉入道西忍正忌日也、十三廻也、

〔尋尊大僧正記〕四 文明五年六月十七日、

一渡唐船巡風様、天竺人西忍入道說者、兩度渡唐之間、互細存知云々、○下略、全交ハ略

八年四月十一日ノ條ニ收ム、

〔大乘院寺社雜事記〕九十 文明十七年九月十日、

寸白持病尋尊十一歳ノ時ヨリ大乘院ニ出入ス

寶徳度ノ渡唐船入目日記八日

一西忍入道昨日風呂入、寸白持病指出之間祇候了、今日退出、無殊儀、予十一歳之時より參申、今年既以成四十五年、大略日々參申、入道滿九十歳也、昔事人々進退等相語之、成才學事共多之、

〔大乘院寺社雜事記〕九十 文明十七年八月三日、雨下、

一西忍入道十歳九一昨日渡唐般入目日記持來、寶徳度、

十貫文安藝國高崎ニ船借用ニ下向糧物

三百貫船賃 三百貫船作事 四百貫船方四十人別

五十貫船トウ、カチトリ、 四百貫ユソウ此内三百貫ハ船チン、

百貫四月ヨリ八月マテ毎月十五貫文ツ、船方御丁間水、人別百人分、

船方マテ、

百貫渡糧米百石、人百人分、船方マテ、

百貫スミ、木、油、水榼、糲、ラウソク、茶、色々事、ミノ、シホ、

六十貫通事二人給分

合千八百二十貫文此内四百貫文ユワウノ方ハ普廣院殿御代ハ不可入近年雅意故ニ入云々、

都玉宮、每度之下物注文、

文明十八年二月十四日

一七七

下行注文



文明十八年二月十四日

一七八

每日米一升 白米、 酒瓶半

麥コ

燒餅四

茶子ノ菓子

シホ

ミソ

クキ

カウノ物

ス

カ

ニワトリ

ヤキ

生カ

サン小

薪

スミ

五ケ日一度ニ毎日ノ分下行之、

唐ハ景泰四年四月廿三日ニニンホウ府ニ入、八月六日都ニ上、九月廿

三日、十月三日、八日、三度ニ都ヘ入、

同五年二月廿八日、都ヲ下南キン、南キン四月九日ニ入、同五月三日、

南キンヲ出テ、同十三日、ワウ州ニツク、同廿六日、ニンホウ府ニツク、

衣裳日記十一月十二日ニ給之、

進ス、フス、從僧、コサ、以上僧ノ衣裳三ツ、

外官ニハロノ金織タル三ツ、

人凡ニハ北絹衣裳三ツ、又冬衣裳一ツ、今度初也云々、外官ニハ不給之、

物 歸朝ニ引出物

衣裝

入目日記 殘記

下行物

進ス、外官以下ニ、人別北絹四反、ロー反、沙一反、シユス一反、

以上七反ツ、進ス、錢十貫、コサ、外官ニ八貫ツ、

人凡ニハ北絹一反、木綿一反、三百五十人計也、

七日、時正、

一西忍來、先日進上渡唐相殘記持來、明州ウニ、ホ外官一人、前ノ記下行物、每

日下行分也、

柴四百五十斤 斤別百六十文目、十六兩也、

炭百五十斤 二十四貫目、

花サシ枿十五兩 一兩別十文、

茶廿五兩 二百五十目、

鹽三斤十二兩 六百目、

糊子百五十丁 フシク

酒一瓶 茶七斤計入ホトノ壺也、

油三斤十二兩 六百目、

魚一斤半 二百四十目、

文明十八年二月十四日

一七九



文明十八年二月十四日

一八〇

菜三斤 四百八十目、  
白米五升 六合餘、七合計器也、日本、

以上外官方、

入凡ニハ黒米二升宛、

假令寶德渡唐ニ多武峯、長谷寺兩寺ヨリ船一艘沙汰立ノ時ニ、外官三人藥師院、楠葉也、此下ニ商人以下百人分、人凡ニテ召具之、百人ハ外官三人之下人分也、一人ノ下ニ三十人餘也、此分ヲ毎日外官人下行物ニテ事ヲ成也、餘分ハ外官德分也、外官一人ノ下ニ人ノスクナキハ外官ノ德分也、米ハ人別ニ被下行之、何十日ナリ共明州ニ在國中ハ、毎日此分下行也、船方四十人計在之、明州河ハタニ木屋ヲ造テ候ニ、船方ヘ下行物又在之、數百人船人也、西忍之船分四十人船方也、每日下行物色々在之云々、凡希代善政國也、

希代善政ノ國

〔大乘院寺社雜事記〕

百六十七 永正二年五月四日、

楠葉入道西忍ハ渡唐兩度、一兩ハ人凡、二兩ハ外官、自京都至筑前タハカ道間百八十里、

自肥前國大嶋小立春船ハ進發、秋船ハ同國後唐ナルトヨリ進發、其間南北五十里也、春ハ南、秋ハ北ヨリ也、

至大唐明州茶山津日本唐土之間、三百五十里也、

合五百三十里五十三日歟

自明州至南都、其間四百里、

自南都至北都、其間五百里、唐土ノ三千六百里也、

合九百里、九十都合千四百三十里也、

自南都至長安城、其間四百里云々、長安城ハ南也、

一於唐土銀代事、北都玉城ニテ十文目ヲ一貫ニ取之、於南都二貫ニウル、於明州三貫ニウル也、此三貫ニテ糸ヲ取テ、於日本取之ニ理在之、假令一貫物ニ十文目替之事也、料足ハ不用之、

○畑經胤、興福寺領越前坪江郷ノ莊務ノコトニツキ、楠葉元次ヲ除キ、其父西忍ヲ非人ニ付セント謀ルコト、二年六月二十五日ノ條ニ、西忍、近衛政家ノ連歌會ニ參加スルコト、四年年末雜載、學藝遊戲ノ條ニ、一條兼良ノ七夕百首和歌會ニ參加スルコト、七年七月七日ノ條ニ見ユ、

文明十八年二月十四日

一八一







文明十八年二月十六日

一八四

給仕慈藤  
喝食

十日、自昨暮天降雨、曉來快晴、○中自等持寺以景雪首座、來十六日御成、御相伴衆今日可報否、愚云、然也、  
十一日、不參、天降雨、○中慈藤喝食、來十六日等持寺御成給仕報之、  
十五日、天氣快晴、○中齋罷、東相府奉報來日等持寺御成事、先於殿中御燒香、還御后鹿苑寺維馨、東堂御對面事白之、御成者不可白案内、五鼓刻可有御成、由白之、左京大夫殿御白次也、○中遂往等持寺、歷覽佛殿并御座敷、有宴、相伴住持、春嶺、景雪、梅雲也、

客殿飾付

義政ノ與  
等持寺ニ  
著ス

齋會

十六日、天氣快晴、寅刻勤日課、日課了行事如恒、東白則謁東府、奉報今日等持寺御成事、左京大夫殿御白次、時東府南面庭前之山有鹿八頭出遊、實壯觀也、遂往等持自南門入、歷覽佛殿、御座敷、御所間、御後架等、客殿本尊觀音月潭筆、脇松文都管筆、瓶立松梅紅白黃草花、御壽牌不置之、鹿苑并方丈亦不置之云、云、三番奔來時、方丈南築地傍東面奉待台輿、卸台輿則愚前引自佛殿正面入、相公亦同入、佛前、土地、祖師、開山、御先祖蓋、御先祖老開山之左右畫像掛之、左邊者等持院殿、鹿苑、普廣、右邊者寶篋院殿、勝定相公、五幅掛之也、自正面出入方丈、鹿苑院惟明奉迎、御相伴衆著座、愚點檢御前大小膳著座、揖座具、御齋如

集證ノ禮  
謝

件ノ人々

景集證  
ニ禮謝ス  
ニ等持寺ノ  
引物ヲ相  
進國寺ニ  
寄ス

恒、冷麪再進一度、先汁菓子等如恒、湯瓶以前御引物置左邊、扇昏如恒、御相伴引物亦如恒、茶菓了起、則愚先入、住持奉送禮、御成御所間、次御后架、御手水壽繁、喝食勤之、○中乃還御、愚自西門出、先台輿謁東府、還御乃御對面于維馨和尚、御障子開闔如恒、其后杉原伊賀(宗伊)入道家督十二三許、小士御對面、今日御伴衆、畠山中務少輔殿、見持御劍、山名小次郎殿、伊勢因州(貞盛)、同八郎殿、周阿、藤民部、駿河守、後藤佐渡守也、○中午後等持寺住持春陽、西堂爲御成禮謝、見來于當軒、有小宴、○中等持寺御引物、扇昏、御寄進于相國、如恒請取乃到來、廿四日、天氣快晴、○中謁東府、○中等持寺御引物相國之請取、○中以春日殿奉供台覽、

山城安樂院、冷泉家人、同院領越中油田ヲ押領スルヲ義政ニ訴フ、

〔蔭涼軒日録〕文明十七年十一月五日、○中齋罷、太秦安樂院領越中國油田

村支證并目安、梅藏主持來、一覽了、

七日、○中太秦安樂院支證數十通一覽、返之梅藏主、

十一日、○中太秦寺安樂院房主來、對面以還之、

十四日、○中昨晚自搵持寺殿以御文、安樂院領越中油田事不可伺之由承之、

文明十八年二月十六日

一八五



文明十八年二月十七日

一八六

義政安樂院ノ足利家代々判物奉書寄進狀等ヲ見ル  
飯尾爲規ヲ爲ス

文明十八年二月十六日、天氣快晴、○中略、義政、等持寺、御手水了、脱帽近前謹白、太秦安樂院領有不知行在所、開山者香山和尚、(卷之七)開山國師第七番之小師也、檀那町埜加賀守也、彼院領會所々有之、今皆不知行、只一所有之、越中國油田村是也、仍開箱、等持院殿、鹿苑勝定、當御代御判、細川武州、(新義)勘解由小路棄破御教書等數通、又御奉書數通、町埜顯行法師諱善照、寺家寄附狀等悉供台覽、其中簡要之文書皆讀進之、冷泉家押領也、文書爲邦朝臣有之、相公御覽、是冷泉家之先祖也、云云、院奉行雖爲飯尾三郎左衛門尉、斟酌之故、其弟左衛門大夫自寺家以書立望之、御領掌、彼支證等自面向以左衛門大夫可披露之、由可命云云、相公御領掌、彼住持周岱首座白狀一番供台覽、○中就安樂院領油田村披露之事并別奉行事、遣愚書兩通於飯尾左衛門大夫方、

〔長祿二年以來申次記〕

一連々被召加入數事、

安藤右馬助政藤、文明十八年二月十七日、被召加之、薩摩守親泰息也、申次以前ハ御方衆并上様御供衆也、

伊勢貞宗書狀

一常徳院殿様御代御親父右馬助、政藤申次御參事、

被召加度被思召候間、此等之趣伊勢貞宗ト爲御談合、以尙氏書狀可尋遣之、由被仰出之間、上意之旨貞宗ニ申通候處ニ、如此御返事被申候條、備上覽者也、仍而可有御參之由被仰出候以來、至永正三年、丙寅春、被勤申畢、然時者云上意、云先規、御參例旁以御理運哉、一旦被叶上意、被召加入數之類ニハ、大相違申候歟、此旨兩宮八幡も照覽淵底尙氏存知仕候間、具ニ注申者也、

御札委細拜見仕候、仍安東(應)右馬助申次之事被尋下候、同名遠江守東山殿様御代始參勤之義勿論候、いゝふを可爲上意之由、可得御意候、恐々謹言、

二月十七日

貞宗在判

彈正少弼殿 貴報

右文明十八年、丙午二月十七日、伊勢守貞宗朝臣如此被申上候也、

尙氏存知之、在判

〔蔭涼軒日録〕

長享元年十二月十四日、不參、天晴、○中靈泉正宗和尙來、○中

文明十八年二月十七日

一八七



文明十八年二月十九日

一八八

政藤公儀  
申次トメテ  
ル

愚話正宗云、室町殿白次安東右馬助勤之、桃井殿□□之云云、如何、正宗云、我族東也、與千葉同氏、平氏也、爲伊勢守爲嫡流、以故於高倉御所、古伊勢眞蓮入道擇東爲白次、時法體也、其子幼稚也、雖固辭不允、不能免、其弟爲代爲白次、其人曾爲安東被養、安東者藤氏也、名字姓氏與東格別者也、爲養子謂者、昔安東某爲赤松伊豫守被害、無正體之故、不被立御子孫、九畹者其弟也、以故還俗而可續其家之由、雖督之、九畹峻拒而不就也、其後九畹云、我一家已斷絕了、願賜東之舍弟爲我養子、可興安東家、於爰東之舍弟爲安東、其人爲東之代爲白次、與安東□各別也、然於安東右馬助、掠公儀相話、伊勢守爲白次、天下曲事也、雜話移尅、

十九日、之甘露寺親長、源氏物語ヲ新寫シ、供養和歌會ヲ行フ、是日、御製ヲ賜フ、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文  
庫記錄甲二十七所收

二月十九日、および大雨ふる、略

中かんろしきんし

御詠草  
飛鳥井雅  
親ニ見セ

うきとてられて、あうちやくとて、くやうよもく六のと拵よて、人そあまよ  
よてちやうさやう、おあしくハ御を井をも申いとしきさよし申されて  
いる、御念いさう（飛鳥井雅親）木よみせられて、御とむしやくつうハさるゝ宮の

シメヲ  
勝仁親王  
賜フ御歌ヲ

御うともあそハセ、

〔親長卿記〕

十七

二月十三日、晴、詣飛鳥井大納言入道榮雅、俗名雅親許對面、予先

亂前書寫  
ノ分紛失  
親長供養  
和歌會ノ  
親ニ問フ

年前也、源氏物語一部予令書寫之處、亂中紛失了、無念之間、今度又令終書寫之功之間、即准供養可張行一座、以源氏名爲題、可分四季戀雜之條如何、返答云、先規不聞、此題四季戀雜尤可面白、予可出題云々、斟酌之由、返答、然者可書進之由、入道命之、來十七日可用朝飯之由、諾了、歸路之次、詣勸修寺大納言、（榮雅）樂院等同啓案内、各領狀、

延引

十四日、晴、自大納言入道許書送題、來十七日分雖定約諾、時正中之間可延引云々、申遣十九日分了、  
十七日、雨下、今日會延引、

題  
勾當内侍  
ルモ歌ヲ贈  
々會ノ人  
通秀  
讀師中院

十九日、晴、今日予書寫源氏物語先年寬正之比一本書寫、亂爲供養、和歌張行、中紛失、今度又一筆書寫了源氏名五十五首加雲分四季戀雜源氏名分四季戀、探之申出、御製、親王御方、雜事無先規云々、西園寺中院勾當等邇近之事候間、申入勅許、來臨人々、左府前内府、飛鳥井大納言入道、榮雅、勸修寺大納言、中御門中納言、侍從中納言、姉小路宰相、右衛門督、中山宰相、中將等也、江南院、元長朝臣、予等相加十二人也、事終有披講、讀師中院前内

文明十八年二月十九日

一八九



文明十八年二月十九日

府、講師元長朝臣也、

〔十輪院內府記〕

中

二月十九日、於按察卿第有歌會、一筆書寫之源氏供養

之志云々、以目六爲題、賦春秋戀雜等、桐壺卽春也、余探得四首、末摘花、胡蝶、

乙ふえ雜かけるふ等也、御製被出之、親王御方同御結縁也、來向衆、左大臣、前內

大臣、飛鳥井大納言入道、勸修寺大納言、第主、按察、甘露寺、中御門中納言、高倉中納

言入道、侍從中納言、三西、姉小路宰相、右衛門督、中山宰相中將、左大辨宰相入

道、號江南院、頭辨息男等也、余勤讀師、講師頭辨也、被出御製、大臣讀師無相違

歟、猶可思量事也、兩五反、自餘三反以之、可按量而已、先有朝飯、後又有三獻披

講了卽分散、千載之一遇也、數寄之至、誰人有此志哉、可感歎也、

〔實隆公記〕九 二月十九日、乙未、晴、於都護亭、爲源氏物語供養、有和歌會、各

以卷名爲題、分四季者也、

御製、親王御方御詠、勾當內侍歌等申請之、中納言入□送歌不來、其外來會入

數、左大臣前內大臣、讀師、大納言入道、發聲、勸修寺大納言、按察、藤中納言入道、

中御門中納言、予、姉小路宰相、右衛門督、講大納言、中山宰相中將、江南院、元長

朝臣、講師、





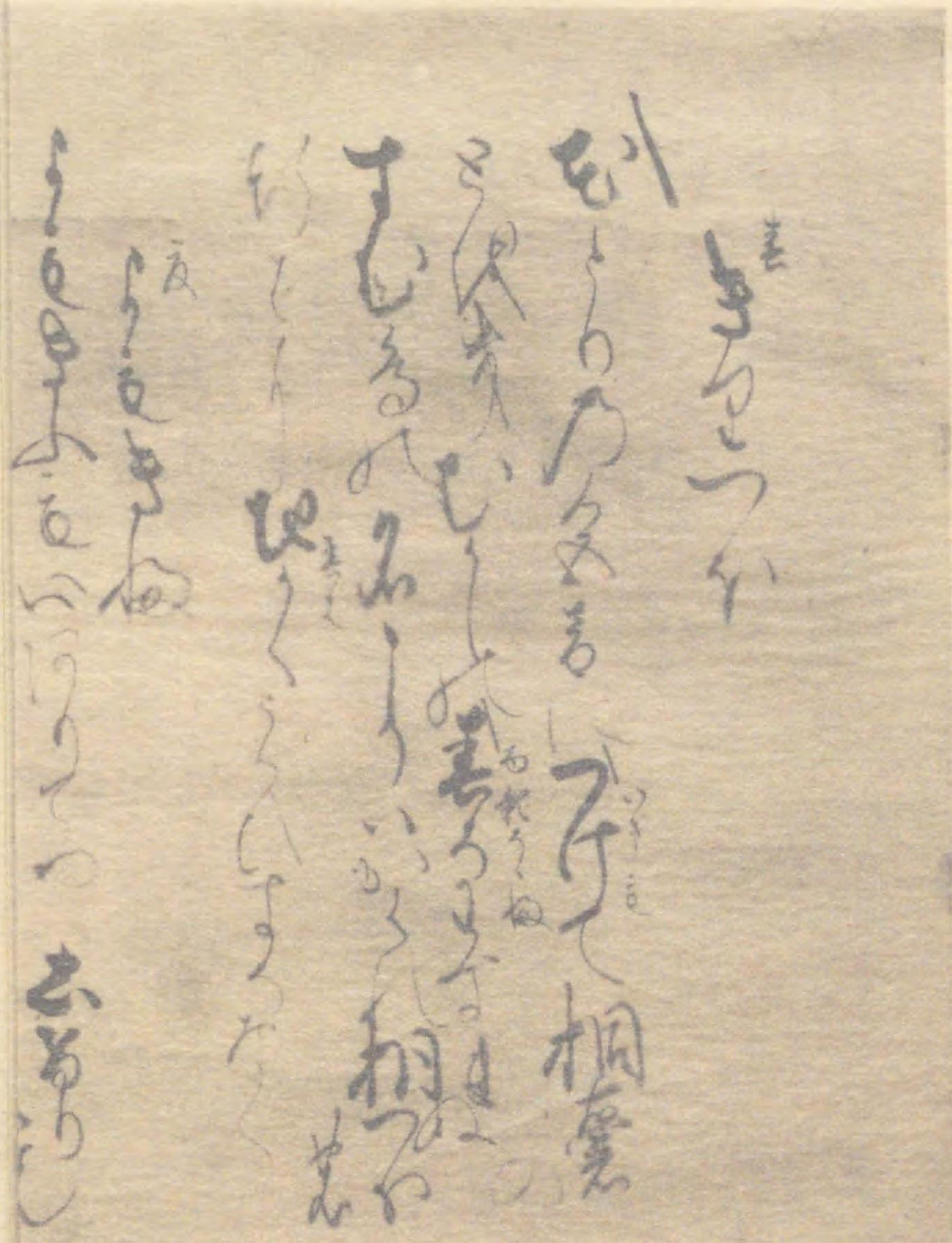






後土御門天皇宸翰御詠草 京都市寶鏡寺所藏

原寸 縱〇・三四五 横〇・九〇〇



及黄昏歸宅邂逅佳會珍重々々

〔後土御門天皇宸翰御詠草〕〇山城寶鏡寺所藏

春 さ里つ不

花とり乃色音につけて桐壺のいほをと袂發むうし面影うゝぬ此春春をろすさぬ  
すむ鳥此名ころハかかれ桐つ不軒をまちうくうくひすろなく

夏 よをさぬ

よをさふを心つりてや去りきんあえて得ときる戀のかよひ路  
をく露をいらぬとすれハあるそしき猶又命りろふるよもさ生のやと  
あり去もあは花さちハれを過さても又目よかは松の藤なえ

雜 盆とり木

山命ろミ松をかけともやとり木のかり糸よかよふ風のさてひしさ  
とひ糸をる夢よはあらてのこりさく人いむろし袂さしあをささ

〔長親長卿申之〕  
文明十八二十九榮雅點申之

二十日丙和漢聯句御會

〔御湯殿上日記〕〇京都御所東山七所收 二月廿日、之御所よて御まうん御

文明十八年二月二十日

桐御製

蓬生

宿木



勝仁親王  
邦高親王  
永崇等貴  
等御參會  
安禪寺宮  
美物ヲ獻  
ゼラル

人數

さ、宮の御方、ふしととの、きんき、せんきう、おとこさち、いつもの人そまこ  
う、御程つけはてし、あふとよて一こんらり、あんせん寺殿よりきやもしさ  
る御うらけの物ともりりて、又御あう月らり、七時よてさします、

〔實隆公記〕

九

二月廿日、丙申、晴、今日當番也、兼日可早參之由、有其催之間、

參候於小御所、有和漢御會、御人數、

親王御方、伏見殿、聯輝軒、萬松軒、帥、勸修寺大納言、按察、下官、姉小路宰相、中山  
宰相中將、和長、執筆、等也、如法早速被終功、御盃二獻有之、時宜快然、珍重々々、  
御製

御發句

かすまほい庭にみるへき野山哉

并木弄春光、勸修寺大納言、

さえあへぬ雪の下より年ふえて親王御方、

○コノ後ノ和漢聯句御會ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔御湯殿上日記〕

庫○京都御所東山御文  
庫記錄甲二十七所收

四月十六日、れんき、せんせう御あ

いり、御庭御らんをらる、御わらん、御ささくろとよて御さう月ろと

くらり、

四月十六日  
永崇等貴  
御參會

同月二十  
八日  
景莖參内

人數

雨ふる、  
廿八日、○中御わらんあり、とく大寺、らんそ、そのなういつもの人そ、中不と  
よ御てんしんそてし、おりよてくこんらり、

〔實隆公記〕

九

四月廿八日、癸卯、晴、朝膳之後參内、被召南禪寺、有和漢御會、

親王御方、徳大寺前内大臣、蘭坡、下官、姉小路宰相、和長、執筆、宵柏、正彝、卜部兼  
致等也、晚刻事了退出、

人依てはらら糸やましぬ郭公

帶雨橋將花、蘭坡、

〔御湯殿上日記〕

庫○京都御所東山御文  
庫記錄甲二十七所收

五月十三日、きんき、せんきう御あ

いり、宮の御方もましりいられて、御まらんあり、そてさせおハしまして、よ  
まやあそそせ、中ぬんの少將(通世)せんよま、こうあるをめしてとせらる、ハて  
しくこんあり、

〔實隆公記〕

九

五月十六日、庚申、霽、入夜雨降、○中及昏參内、○中抑和漢

張行、御懷昏、漢點蘭坡、和點左府相分進、云々、邂逅之儀有興々々、

〔御湯殿上日記〕

庫○京都御所東山御文  
庫記錄甲二十七所收

十一月卅日、御まらん、きんき、せん

きうも御あいり、ま、うの中納言、あんき、かんま、う、きよくらぬ御人そま

漢點景隆  
和點西園  
寺實遠  
十一日  
三  
人數



り、御ウゆよてくこんあり、

〔實隆公記〕

十一月卅日、辛未晴、當番第一請取也、雖然和漢御會□可有御

張行之間、朝食之後可祇候之由、昨日被仰下之間、存其旨參候、就山、宗山、和長

執筆、等參候、和漢百句入夜終功、

御製雪をろし都は春の花もろさ

寒勒臘梅齋、和長

影うつせ月の下水氷ゐて、實隆

○諸家和漢聯句ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔實隆公記〕

正月廿九日、丙子、晴、參入江殿、向二樂軒、勸修寺、甘露寺、白川忠宣民部

卿、和漢興行、仍罷向、日野一品、帥卿、中御門、姉小路、時顯、朝臣、在數、東坊城和長、執筆、五辻源

富仲、卜部兼致、宗巧、宗旦、師著道也、入建仁寺僧三人、建詔藏主、宗、中原盛富等在席、

入夜終百句功、盃酌數巡有興、

〔後法興院政家記〕 十一月十八日、壬戌降雨、申刻止、有和漢興、五十句、晚景

實門令歸給、

三千院堯胤法親王ニ預ケラレタル御櫃ノ中ヨリ、和歌及ビ源氏物語ノ

近衛政家  
和漢聯句

飛鳥井雅  
康第和漢  
聯句

御製

抄物ヲ取寄セラル、

〔御湯殿上日記〕 京都御所東山御文 二月廿日、略 中うち拵とのへあつ

夢まいらせられし御日つのうち、夏うのさうもり三かう、をんしのさうも

り一かうとりよせらるし、

宮女等ヲ召シテ、御宴アリ、

〔御湯殿上日記〕 京都御所東山御文 二月廿日、略 中略、和漢聯句御、おと

こさちといまゆつのもち、縁うさうさち御、いりあるへきよしお海せよ

て、ミまゝ御、いり、せんさうより二かう一かうら、それを御しやうく

んあり、まことふとありて御さ、これも御つゐてよとて御さ、月ら、

〔實隆公記〕 二月廿日、丙申、晴、略 中略、和漢聯句御、御會事了各分散之後、

又於小御所、女中等盃酌及數獻美聲等有興、入夜還御御本殿、

二十二日、戊戌御樂始、

〔御湯殿上日記〕 京都御所東山御文 正月廿九日、略 中略、豊原秋めして、御

樂御けいこよあそそす、めてとし、

二月六日、略 中略、秋ら、

文明十八年二月二十五日

三條西實  
隆モ召サ  
セラル

豊原繁秋  
ヲ召シテ  
御稽古ア  
ラセラル



御琴ヲ拭  
ハセラル

邦高親王  
御不參  
外様番衆  
賜フ酒饌ヲ

五常樂急

八日、  
(通書) 志け秋らり、  
雨ふる、 十一日、略、中、志け秋らり、  
 十六日、略、中、志秋らり、とためして御きんのこませらるゝ、  
 十七日、志けあたらり、  
雨ふる、 廿一日、略、中、ひる志け秋らり、  
はるゝ、 廿二日、御樂ハしめあり、ふしと殿にまうし御りいりあし、はてゝつもの御  
 所よて御さう月らり、とさぬへいつものどく大あり二うう、御さる一うい  
 てゝ、およのまよてみまゝくゝらり、ちけへもろの御さるいつる、夕うとあん  
 ぎん寺とのある、

〔十輪院内府記〕中 二月十三日、中御門兵部 以一通催、來廿三日、禁裏御樂、

十七日、招峰秋、五常樂急、只拍子習之、久不聞及事也云々、  
 廿二日、禁裏御樂也、仍著直衣參内、五常樂急、只拍子、經所作入見證也、伏見宮  
 四絃御所作、依無御傳習、無御參、巨細御譜等不載、此事頗有御不審之氣歟、此  
 人々若以推量致所作歟、繁秋張行尤不審云々、御目六兼日可爲老君子之處、

樂目錄

參仕ノ人々

被取替林歌云々、仍由斷之處、宮御方管御所作之間、殘樂等相違也、仍余殘老  
 君子此間不稽古、然而無爲無事也、可謂幸運、御目六、

五常樂急、殘樂御所作 三臺急、萬歲樂、泫州、裏頭樂、親王御方 太平樂急、余 老君子、

參仕愚老、比 內大臣、園中納言、比 中御門、中納言、比 四辻前、中納言、比 新中納言、比 中山宰相  
 中將、源宰相、比 山科三位、頭辨元長朝臣、資氏朝臣、重治朝臣、重經等也、地下景康  
 朝臣、慶秋朝臣、景兼、繁秋、景益、統秋、朝秋、景熙、豐原持秋、豐原益秋、安倍季音等  
 也、

大神景朝裏頭樂、五常樂急傳習、仍丁聞云々、彼只拍子、後堀川院御代有之歟  
 云々、頗邂逅事也、散狀普通私物次第也、

〔實隆公記〕九 二月廿二日、戊戌、晴、中 今日禁裏御樂、五常樂急、只拍 三臺

急、殘 萬歲樂、裏頭樂、甘州、太平樂急、殘 老君子、云々、抑五常樂急、只拍子、於絃  
 者其說未決之間、各

幕府水無瀨宮法樂和歌會

〔常徳院集〕二月廿二日、水無瀨殿法樂とて、(三階堂) 藤原政行を、め侍しに、立春  
 春さより春色わくほとみ日うけさは岡へ乃松よ春ハさよをり、

二階堂政  
行ノ勸メ  
義尚和歌  
立春



文明十八年二月二十二日

一九八

〔爲廣詠草〕<sup>(三)</sup>廿三日、夜半その利み、大樹御堂座、後鳥羽院御法樂とあん、

梅風

六十あま利とあせの春の跡とへそよ不ひそこよふ梅の下風

右心も、彼院六十三よて崩御お利をれそつくあん、水無瀬ニ御廟あり

をり、

寄忘草戀

よしちらそうね身よまなれ忘草かよふ心の道とゆるるて

橋

袖ぬらそうね世の波よりけてをり行衛もまらぬ夢のうき橋

○義尙、水無瀬宮法樂和歌ノ題ヲ三條西實隆ニ與ヘテ、詠進セシムル

コト、便宜左ニ合斂ス、

〔實隆公記〕

九

六月廿二日、丙申、晴、<sup>○</sup>抑自室町殿水無瀬殿御法樂題被

下之、御使無左<sup>□</sup>入來之間、愚亭丙穢也、<sup>○</sup>義尙ノ女子誕生シ、即日天ス、其子

細付戸部卿申入了、

義尙、三條西實隆ヲシテ、撰歌合ヲ書寫セシム、

〔實隆公記〕

九

二月廿二日、戊戌、晴、<sup>○</sup>中自室町殿撰歌合可書進上之由被

仰下□、

三月六日、壬子、陰、時々雨、自室町殿被仰下之撰歌合書寫之、則終功、入夜一校、

七日、癸丑、雨降、撰歌合付二階堂進上之、<sup>(政行)</sup>

十七日、癸亥、<sup>○</sup>中自室町殿撰歌合被下之、作者事<sup>保秀朝臣、保有御不審進藤</sup>

筑後來、

○コノ後、義尙、實隆ヲシテ、打聞五十首ヲ書寫セシムルコト、便宜左ニ

合斂ス、

〔實隆公記〕

九

三月十五日、辛酉、雨降、持齋也、自室町殿打聞五十首御詠、<sup>自</sup>

筆、加清書可進上之由也、則令清書進上、御名字殘一字進上之處、重而可書進

上之由、被仰之間書加了、<sup>○</sup>義尙ノ打聞ヲ編スルコト、<sup>十五年二月一日ノ條ニ見ユ、</sup>

二十三日、<sup>己</sup>安藝小早川弘平ヲ中務少輔ニ任ズ、

〔小早川家文書〕

<sup>(端裏書)</sup>  
口宣案

上卿中御門中納言  
文明十八年二月廿三日 宣旨

文明十八年二月二十三日

一九九

實隆二階  
堂政行ニ  
付シテ義  
尙ニ進ム

打聞五十  
首ヲ書寫  
セシム



文明十八年二月二十三日

二〇〇

平弘平

宜任中務少輔

藏人頭左中辨藤原元長奉

〔小早川家文書〕

二 竹原小早川家系圖

弘平道祖德、又四郎、中務少輔、安藝守

文明十八年

二月廿三日、任中務少輔

○幕府、小早川弘景ノ大内政弘ニ黨セルニ依リ、其所領ヲ奪ヒテ、其子弘平ニ與フルコト、應仁元年十月二日ノ條ニ見ユ、マタ、弘平赦免ノコト、姑ク左ニ合敘ス、

〔小早川家文書〕

二

御進退事、御赦免尤目出候、仍兩御所様へ、御太刀、金、鶯眼千疋御進上之間、致披露候畢、珍重候、次太刀一腰、持、并鳥目五百疋贈給候、祝著至候、爲太刀一振、持、進之候、表祝儀計候、恐々謹言、

十二月卅日

貞宗伊勢花押

小早川又四郎殿御報

御嗅茶アリ、

弘平赦免

道永法親王御參内

コノ後ノ御嗅茶

邦高親王御參内

等貴

永崇

覺胤法親王

十種茶

轉法輪三條冬子

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫記録甲二十七所收

二月廿三日、御さひしたとて、御むろさしをいらせらるゝ、御ちや御うたあり、

○コノ後、御嗅茶ヲ行ハセラル、コト、便宜左ニ合敘ス、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫記録甲二十七所收

二月廿九日、御ちや御うたあり、ふしと殿入をいらるゝ、萬松もいまと御しこう、

三月七日、御ちや御うたあり、

八日、○中略、御ちや御うたあり、

十一日、御むろ、きんき御をいり、御ちや御うたあり、

廿一日、御ちや御うたあり、とる事なし、めうなう院との御をいり、

四月四日、○中略、ふしと殿御をいり、

御ちや御うたあり、御さう月ら、

九日、十まゆちやあり、

十八日、よる御ちや御うたあり、御むろ御をいりあり、

五月二日、○中略、さう上らぬいまと御さふらひありて、御ちや花巻の御所此御ひさしよて御うたあり、小御所よて御うたありて御さう月ら、

文明十八年二月二十三日

二〇一



山科言國  
酒饌ヲ獻

文明十八年二月二十四日

二〇二

十二日、御ちや御うたあり、山言國しを御てうしりいらるゝ、  
夜雨ふる、とるゝ、  
七月十六日、きんき御りいり、御ちや御うたあり、  
雨ふる、  
八月廿九日、御ちや御うたあり、

三條西實隆、遺教經ニ眞名ヲ付シテ獻ズ、

〔實隆公記〕九 二月廿三日、己亥、晴、略○中遺教經御本付眞名進上□、

義政室日野氏第猿樂アリ、

〔親郷日記〕二月廿三日、己亥、

一上様御方御能あり、小猿樂、兵庫殿より御盃臺一まいり、  
いりまてう野へよ心のあくうきん花しちらそハ千代もるぬへし

二十四日、庚子宮門跡、尼宮等、酒饌ヲ獻ゼラル、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記録甲二十七所收 二月廿四日、布しと殿、仁和寺の宮、

めう不う院殿、さけのうち殿、せんせうきん、あんせん寺殿、あうとの、大しやうし殿、花山との御申さよて、もり山めしてうとせらるゝ、大しやう寺殿よりハ三色よ一うらり、その不うさいつものどく、代よそあうハしへつうハさるゝ、めうきん寺も、としハしめてまいらるゝ、大おり二うう二う

御參内ノ  
宮々々

伊勢貞陸  
孟ノ臺ヲ  
進ム

守山手猿  
樂アリ

香聞アリ

甘露寺親  
長祇候  
三條西實  
隆ヲ召サ  
ル、モ不  
參

中院通秀  
鯉魚ヲ携  
ヘテ參會

り、御さう月五こんの不うまさらり、夜よ入ていりそとまふ、御あふきともあふ、くろ御所くハ御をひと御とたあり、おもしろさうきりなし、めう御所、さのうち殿ハ御さしあひとて御りいりなし、御さう月よりさねよ御うう御かきあり、

〔十輪院内府記〕中 二月廿四日、○中略禁裏近臣等各參内之儀有之、内々又被御覽小猿樂云々、侍從中納言一人申、(マ)平故障罷出之由被談、重兩道之師範之謂也、

〔親長卿記〕十七 二月廿四日、晴、依召參内、有一獻、守山小猿樂、依召祇候、

〔實隆公記〕九 二月廿四日、庚子、晴、今日自禁裏雖有召、弔徳大寺之間故、不

可參内之間、其趣内々申入了、○徳大寺公有慈ズルコト、正月二十六日ノ條ニ見ユ、

飛鳥井雅親、廷臣ヲ會シテ、當座和歌會ヲ張行ス、

〔十輪院内府記〕中 二月廿四日、向朝飯之間、自姉小路宰相許有書狀、披見

之處、今日人々會合飛鳥亞相入道之處也、如此之次、出現定可爲本意、各銚子事也、然而初度之間、柳一荷風情可事足之由入魂也、頗本望之間、可罷向之由返答、鯉魚二、一荷等隨身、晝過罷向、一座興行、朝見花、暮山花二首通題、當座懷

文明十八年二月二十四日

二〇三



文明十八年二月二十四日

二〇四

二首題  
讀師勸修  
寺教秀

内藤七郎  
大夫音曲

參會ノ人  
々々

紙也、予各詠兩首、談合隨合點了、歌書詠草會合衆廿八人計也、中未執燭之前、講頌了、講諸師大夫入道名可也、歌等不讀、彼頗無興也、讀師勸修寺大納言被勤之歌書樣或詠二首和歌、或詠朝見花和歌等也、亭主詠二首云々、余同二首之由書之、酒宴續燭歌舞入興、内藤七郎等音曲、又十歲之兒舞天鼓等、春遊何事如之、慰老懷了、抑冷泉大納言詠歌被書二行、自餘各二行七字如恒也、會合衆多以忘却了、記其大略、左大臣、前内大臣、余事冷泉大納言、勸修寺大納言、海住山大納言、中御門中納言、侍從中納言、高倉中納言、入道、姉小路宰相、中山宰相、中將、右衛門督、基春朝臣、和長、長興、宿禰、俊通、僧空、又、亭主三人、二樂軒、少將、雅通等也、余傾數盃、歸宅無正體、

廿五日、無事、以狀謝昨日儀於姉小路許、留守、

〔實隆公記〕

九

二月廿四日、庚子、晴、中向飛鳥井大納言入道亭、今日銚子

事也、仍一荷兩種送之、二首當座懷昏在之、來會人々、左府、前内府、冷泉前亞相、勸修寺亞相、海住山亞相、藤黃禪門、中御門黃門、二樂軒、予、姉小路相公、右金吾、中山相公、羽林、持明院羽林、基春、菅拾遺、和長、長興、宿禰、俊通等也、講頌等如例、及夜更傾數盃歸宅、

懷紙書樣

冷泉爲廣  
和歌  
朝見花

暮山花

抑今日爲富卿懷昏二行書之云々、長興宿禰懷昏署書樣、前治部卿、一書之、未見及之事也、如何、

〔爲廣詠草〕

廿四日

飛鳥井大納言入道、榮雅亭當座、朝見花、

おわいて、雪ろと向ふ朝戸あけよ句ひ明さへこそ春風

暮山花

かへほさやちれも志とひて暮添日残光よのこそ花の山うけ

○諸家和歌會ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔十輪院内府記〕

中

正月四日、中和歌始、肖柏來、題梅花遠薰也、常福寺贈

聖天團和歌談合、

〔爲廣詠草〕

九日

中山宰相中將亭よての會始よ、松樹契久といへるとをよ

と侍々る、

君と臣とあい生の松比綠子よはとへん家の風ハいく代そ

右心、去年愛子いてを侍れを表祝詞計也、

十二日、長忠卿亭會始よ、對鶴爭齡

仙人も住へき宿ハ老らくのこん門さして鶴やつらへん

文明十八年二月二十四日

二〇五

中山宣親  
始和歌會

中院通秀  
第和歌始



冷泉爲廣  
第會始

文明十八年二月二十四日

同日、愚亭會始、池水久澄

幾千世そさうれも清和和歌の浦を池の心よきしぬみたりハ

〔後法興院政家記〕十一 正月十三日、巳刻以後屬晴、冷泉右衛門督勸會

始歌、題云、池、詠遣之、懷番女房分調之、

仲縁第會  
始

〔爲廣詠草〕廿二日、仲縁所よての會始、柳絲綠新

青柳の糸くりかへし此宿よ千とせ、我ゆらく玉のをよきん

當座

當座 岡霞

人はいさくれを往來の岡のへよ袖ぬりそへそ立霞哉外顯戀ノ

谷水ノ題ニテ二  
首アレドモ略ス、

同第月次

廿日、仲縁所月次、杜新樹

茂りあふ杜の名高をかしハ木ハ葉守の神やすとさらそへき

初尋縁戀

いもあ嶋いうある波の心ともろの浦うせよ今日やとハまし

當座

當座 仲春

春よそむ心の花乃おりしもあれみとりまけみひく青柳外初夏ノ

太平國雄  
第會始

仲秋ノ題ニテ二  
首アレドモ略ス、

〔爲廣詠草〕廿一日、國雄、許月次會始、竹契遐年

代々かけてこゝ、淫契らん々、終竹のゑとの絲はしの宿のこと此、有繼

右心を代々門弟也、

當座

當座 鶯

心くらに心の花もみやひあの色ようつろふ鶯乃聲外思流

水ノ題ニテ二首  
アレドモ略ス、

同第和歌  
會

廿六日、國雄許會、浦花

咲うゝは波もひとつよ色そへて花乃上行まゐ此浦舟外惜春ノ

占戀ノ題ニテ二  
首アレドモ略ス、

當座

當座 春風

吹あへそ秋ハやふれし芭蕉葉もうこのぬ程の庭の春風外夏窓ノ

秋菅、秋、題ニテ  
三首アレドモ略ス、

爲廣國雄  
遺ル

十八日、國雄方へ草花よつけてつうハしなる、

杳冠歌 俄こ任筆者也、

文明十八年二月二十四日



持明院基  
春第和歌  
會

〔言國卿詠草〕

寮○圖書  
藏

三月  
同廿二持明院興行一續

雨中惜花おしと思ふ袖もぬき参りふる雨もちりぬる花乃木すゑのころハ

社頭水 春日山よるへ此水にかきとめて藤さくとなと茂まもる此神

〔爲廣詠草〕

基三月春朝臣張行せしし幽栖竹鶯

人ハいさなれのと竹の下庵あひやとりせる鶯の聲

經年戀

うれをしれ心なくさの月とにも積れそ老の年からぬるハ

五月  
十七日秀直所會と霖

降雨ハ不す日もなしや夏引の千引の糸乃ちろくしくも外扇ノ

ノ題ニテ二首  
アレドモ略ス

當座 對花語昔

それをとし昔をとへそ花ひとり名のりて匂ふを漏の山風

見書恨戀

さりともと頼む契りもあさそのみなとかねなるす水くさ乃跡

當座

丹波秀直  
第和歌會

半井明重  
第月次和  
歌會

當座

甘露寺親  
長第二十  
首續歌

讀師親長  
講師薄以  
量數

半井  
明重所よての月次夏地儀

里ハらやてる日ちうらも山ぬみ木のあつくや五月雨の跡外夏居ノ  
所夏動物ノ題ニテ  
二首アレドモ略ス

當座 二首 柱

老のし漏ん心ちりせそ松の垣竹の柱もさもあらそあれ

蘋

あとし身乃姿の池よみるもうしまよふ心の波比うさ草

〔親長卿記〕

十七 九月十一日晴有鞠略中有二十首續歌入來人々藤中納

言入道中納言飛鳥井中納言入道侍從中納言永康朝臣等也

〔實隆公記〕

十 九月十一日癸丑晴早且退出行水今日依兼日招向甘露寺

有朝食二十首續歌有披講讀師亭主講師以量朝臣也人數藤中納言入道中

御門中納言飛鳥井中納言入道亭主父子取龍首座永康空濟法眼清房久

重久等等也

義政天龍寺住持周薰澤臨川寺住持英珍秀等ニ掛絡ヲ與フ

〔蔭涼軒日錄〕

正月五行事如恒齋罷自調阿方以折簡相公御道服并御袴



義政ノ道  
服ヲ掛  
以テ掛  
及ビ七  
衣ヲ作  
ル

掛七條  
七條衣  
頂出來  
義政集  
キニ與  
者ヲフ  
問ベ

文明十八年二月二十四日

二一〇

有之、有可進人之命、滿散如恒、修正無爲珍重、晚來遣悰子於調阿宅、御道服一領、御袴二請取之、請取悰子判形、十日遣調阿方、

九日、略中、雲澤月忌營之、澤甫設浴、愚依有差合不赴浴、蓋道榮庵來、解御道服

御袴、七條并掛絡事命之、御道服一領、七條一頂、掛絡一頂可縫之、御袴二六丈、

七條二頂分有之、爲掛絡五頂可有之云云、

十日、齋罷、以悰子奉報、略中、於白河御所、以冷泉殿白之、略中以御道服御袴請

取之、折紙渡調阿云云、

十五日、自三更雨降、朝來雨雪滿天、略中、齋罷謁東相府、略中、愚問堀川殿曰、舊

冬所出御道服一、爲七條一頂、掛絡一、如先規御袴二、爲九條一、爲七條二頂、爲

掛絡六、孰可哉、可見聞相公、堀曰、愚慮如何、愚曰、爲掛絡周賜之可哉、堀曰、然者

不及聞相公、爲掛絡可也、御左子曰、愚袈裟經緯其色如何、織手何者、相公有御

尋云云、愚曰、於三條町屋取之、不知其織手、

二月十五日、天氣快晴、略中、自道榮庵絹七條一頂、絹掛絡一頂來、

廿四日、天氣快晴、略中、謁東府、御掛絡七頂、御七條一頂、略中、等以春日殿奉供

台覽、皆契台慮、相公曰、掛絡可賜誰云云、愚書立白之、附書舜澤和尚天龍寺當住、英

集證周黨  
英珍等七  
人ヲ推舉  
ス如寺等  
眞如寺等  
收

景岱ニ七  
條衣ヲ與  
フ

掛絡ノ請  
取ヲ義政  
ニ進ム

珍西堂臨川寺當住等收西堂眞如寺當住、景般西堂常德院內、明徹西堂大智  
院內、天應和尚寶聚軒、仲璋和尚巢雲軒、上五員者以前未賜、下二員者雖曾賜、  
此二老皆逢夜盜失却諸具、故書立之、可賜此七人云云、又黑色七條可賜誰、愚  
云、景岱侍者可愈乎、去年御得度時侍巾瓶見賞之可乎、諾々、略中、且以七條贈  
東雲、按、去年今日於通玄寺東雲度僧事伺之、今日又賜御七條、機緣不一世也、  
可感、時桃源老、梅雲在座、皆感之、略中、御掛絡二頂、以昌侍者贈一宗西堂、螢窓  
西堂、

廿五日、不參、天快晴、略中、御掛絡舜澤、天應、仲璋各一頂、茂叔方渡之、一宗、螢窓

御掛絡拜受請取持來、伸謝詞、天應和尚同前、

廿六日、不參、天快晴、齋前小補和尚、東雲侍丈、持七條拜受折紙來伸謝、

廿七日、天氣半陰半晴、略中、齋罷謁東府、略中、御掛絡請取七通之內、先五通到

來、七條請取一通供台覽、

廿九日、天半陰半晴、齋罷謁東府、略中、天龍寺舜澤、臨川寺英珍西堂御掛絡拜

受請取供台覽、

○コノ後、義政、萬壽寺永猛、建仁寺光澤庵喜足等ニ掛絡、七條衣ヲ與フ

文明十八年二月二十四日

二一一



ルコト及ビ義尙景三ニ法衣ヲ與フルコト便宜左ニ合敘ス、

掛絡四頂

〔蔭涼軒日録〕四月廿三日、天快晴、略中御道服一領遣之道榮庵、御掛絡四頂

分在之云云、御道服地唐紗紺地也、

縫賃

五月九日、不參、天快晴、略中自道榮庵御掛絡四頂出來、乃縫賃四百文渡之、蓋

御道服一領也、唐無紋紗、紺色也、

十一日、天快晴、略中午時謁東府、御掛絡四頂供台覽、則誰某可賜之、萬壽寺住

持伯進光澤和尙、建仁寺光澤庵住持喜足和尙、寶篋院住持梵密西堂、弘源寺一滴

軒住持等誠西堂、此四老以書立供台覽、相公曰、然也、此內以一頂賜愚、殘三頂

可遣書立之衆、阿茶御白次、懇々伸謝辭、

十二日、不參、天快晴、御掛絡三頂、萬壽伯進和尙、光澤喜足和尙、寶篋院梵密西

堂、各召僧渡之、此內遣幞子於光澤送之、拜受折紙即持來、

十三日、天氣快晴、齋了謁東府、御掛絡拜受折紙三通、供台覽、愚於殿中直賜之、

故不獻拜受之折紙、略中御掛絡拜受爲御禮、伯進和尙、梵密西堂字竺心來于

當軒、喜足以僧伸禮謝、

六月八日、不參、天氣快晴、略中爲御掛絡淺黃小雲紋紗、萌黃中雲紋紗、同御掛

義政道服  
ヲ以テ九  
條衣ヲ作  
ラシム

絡本出、自調阿宅請取之、同唐紅絲相副被出之、又淺黃唐羅無紋御道服一領

出、蓋可被縫九條云云、不足分相問道榮庵、則二尺許不可足云云、其分傳調阿

方、

十一日、不參、天快晴、略中御掛絡地二色、同本掛絡去八日出之、象牙環三ヶ今

日自調阿方來、

十三日、天快晴、齋前御七條之地、同本御掛絡地二色、同本唐紅絲、以本監寺遣

道榮庵、

十九日、天快晴、略中午後謁東相府、略中先日所被出唐羅之御道服水色無其

類之條、七條乎掛絡乎可命之旨被仰出也、

廿九日、天快晴、略中御掛絡二頂自道榮庵來、乃獻之、水色雲紋紗、萌黃雲紋之

紗、本之御掛絡相副獻之、紗之殘三色調阿方渡之、

七月四日、不參、天快晴、略中淺黃唐羅御道服一領、以本監寺遣道榮庵、可縫御

掛絡四頂之由命之、

十一日、天快晴、略中御掛絡四頂自道榮庵出來、地唐羅水色御道服也、

十三日、天快晴、早且謁東府、略中御七條奉懸御目、條絲薄紅梅一扭被出之、御

掛絡二頂

道服ヲ以  
テ掛絡ヲ  
シム



梵靈等德

七條衣一  
頂證衣絡  
集證衣絡  
為メニ龍  
澤及ビ龍  
初ヲ推舉  
梵初ハ子  
璞ノ同宿  
龍澤ニハ  
與ヘン衣  
龍統ハ未  
ダ法衣ヲ  
與ヘラレ

文明十八年二月二十四日

二二四

掛絡四頂地淺黃唐羅供台覽可賜之仁體之書立梵鐸西堂等誠西堂靈洙西  
堂德肖西堂供之台覽○中御掛絡四頂各所江遣之拜受之折紙皆到來  
十一月二日天快晴齋罷謁東府御七條一頂御掛絡一頂供台覽可賜之仁體  
可相計之命有之御七條天隱和尚御掛絡梵初西堂書立之供台覽謹白以前  
以九條可賜天隱東堂之旨有之依有九條先以此七條可被遣乎可為上意梵  
初西堂者正使子璞東堂之同宿拜領公帖以後未賜衣故以此御掛絡可被遣  
乎之由白之相公曰天隱東堂以後可被遣九條此七條可賜之入體可相計梵  
初西堂掛絡事者然也愚云龍統東堂未賜衣此七條可賜否相公曰然也○中  
晚來初心月御掛絡拜受折紙持來伸忱謝也  
三日不參天快晴○中午後以柏公贈御七條於建仁方丈正宗和尚乃調拜受  
折紙賜之  
四日天快晴○中齋罷謁東府正宗和尚御七條拜受折紙心月西堂御掛絡拜  
受之折紙供台覽為御禮皆來于當軒之由白之○中統正宗為七條御禮來于  
當軒相公預白來臨之由也

〔補庵京華新集〕季安號頌有序 走筆

梵鎮袈裟  
ヲ縫フヲ  
以テ業ト  
ナス

義向著用  
ノ衣裳及  
ビ金襴ヲ  
以テ景三  
ノ為メニ  
法衣ヲ縫  
ハシム

芙蓉庵梵鎮書記乃前南禪雲庵和尚之徒而京等持僧也以縫袈裟為業者鎮  
之言曰昔勝定相公當軸之日洛中置縫袈裟僧六人凡無俗無道以其服造三  
衣施十方僧普廣相公亦然六人之中三人者隸于等持鎮其一也鎮今七十七  
歲縫袈裟者五七九條三千餘頂云文明丙午之歲吾大人相公御方賜其所著  
衣裳一具與金襴一端以為予縫法衣之具恩榮之至也乃命鎮縫僧伽梨々々  
々有三品今所造者九條也抑吾徒受法衣者詳于古規靈感傳曰佛每轉法輪  
披僧伽梨是也中阿含曰阿那律三衣龜破告阿難曰與我借僧伽造衣阿難  
徧僧房普倩佛言何不倩吾阿難即倩佛々為裁剪僧眾縫刺云々嗚呼予造法  
衣也佛不可倩得倩鎮斯可矣悲華經曰若有人得袈裟乃至四寸飲食充足又  
龍披一縷金翅不吞海龍王經之說也四寸一縷猶得其益如此況於三千餘頂  
乎鎮縫袈裟功德無量過於十誦四分等所明也遠矣豈不異乎殊勝々々鎮又  
告曰鎮字季安前鹿苑龍崗和尚所命也有二大字亂中失之請係小偈併書為  
賜鎮夕死可也予曰諾既而法衣成書此以代謝詞偈曰  
伯仲叔季遺之以安千秋萬歲置枕泰山

十八年小春吉辰前萬年橫川走筆於崇壽塔下

文明十八年二月二十四日

二二五



大乘院門跡尋尊、興福寺別當政覺卜共ニ上洛ス、尋デ、歸ル、

〔大乘院日記目錄〕<sup>四</sup> 二月廿四日、上洛、寺務同道申、廿九日下向、

〔大乘院寺社雜事記〕<sup>百二</sup> 二月廿四日、

一上洛、寺務同道、御共松殿中將、清圓寺主、粟井孫九郎、宮壽、寬明、宗順、奏九郎、  
難波新左衛門、自木津至伏船也、<sup>(見船方)</sup>船方御問并御童子共沙汰立、入夜間宿法  
性寺了、

廿五日、辛丑、

一早旦三十三間、清水寺、祇園參詣、<sup>(待通)</sup>二條殿、<sup>(冬鳥)</sup>一條殿、<sup>(政平)</sup>鷹司殿ニ參申、各御榼進之、  
了、宿所直志院也、自其參詣北野社、木船越ニ鞍馬寺ニ參詣、令宿圓樂坊了、  
直志院梅津被入、各榼一荷進之、

廿六日、

一於賀茂山參向、松殿、粟井榼料以下色々被致其沙汰了、  
一予寺務同道、向高倉宰相入道亭、榼三荷遣之、他行之間不及見參者也、其後  
被來禮了、見參、父子共也、又寺務之御乳母來、二百疋持來、

廿七日、

一二條殿ニ參申、上様御在所自上被引之、自伯殿也、

廿八日、

一參申安禪寺殿折二合御榼進之、御見參、給一獻了、退出、其後又折五合、榼二  
荷被下之、盃臺同在之、

一折榼等進陽明了、御悅喜云々、

廿九日、

一下向南都了、次參申二條殿、今日上様御在所棟上立柱也、

卅日、

一今度上洛、大綱十貫三百五十三文入之由算用申、

〔後法興院政家記〕<sup>十一</sup> 二月廿八日、<sup>甲辰</sup>晴陰、大乘院近日上洛云々、折五合、

樽二荷給之、令返答祝著之由、

二十五日、<sup>辛丑</sup>伏見宮邦高親王、和歌會ヲ御張行アラセラル、

〔爲廣詠草〕<sup>(三月)</sup>廿五日、竹園殿、<sup>伏見</sup>御張行、<sup>江螢</sup>江螢  
水くらき難波入江乃すて舟よいさりのかゝり火のさき

寄煙戀

尋尊二條  
持通一條  
冬良鷹司  
政平等  
訪フ

尋尊政覺  
下高倉永  
繼ヲ訪フ

近衛政家  
ルニ物ヲ贈

持通第上  
棟立柱歸  
奈良ニ歸

上洛ノ費  
用五十貫  
文百五十

冷泉爲廣  
江詠進

寄煙戀



文明十八年二月二十五日

二一八

うらむそよたのめし暮の煙さへ思ハぬうとよまひく心哉

○コノ後、邦高親王、二十首續歌等御張行ノコト、便宜左ニ合斂ス、

〔實隆公記〕<sup>十</sup> 八月六日、<sup>寅</sup>雨降、參伏見殿、梶井殿等御座、二十首續歌合□

被仰之、當座付墨進上、厚顔至極也、

七日、<sup>巳</sup>竹園二首和歌御張行、詠進之、

細川政元、千句連歌ヲ張行ス、義尙、其發句ヲ詠ズ、

〔蔭涼軒日録〕二月廿六日、不參、天快晴、<sup>○</sup>中河原備前守殿來、昨日於細川第

義尙發句

有千句、公方様御發句云、

文字をゝる錦ウ花比ウ多ほウ

〔二月廿五日御千句御發句御脇第三〕<sup>○</sup>侯爵菊亭

二月廿五日御千句御發句御脇第三 <sup>丙</sup>文明十八

何 御前

文字をゝる錦ウ花ヲ歸る雁 常徳院殿様

月ゑうすミウすしと比うら 政元

春風夕お山を志つうふて 政國

何人

何人 同

春をさしさくらにと蒔き夕うら 政元

花ヲ公とりを鳥比ふく聲 政國

うす□志く嶺外山の奥に見て 宗祇

何水

何水 野州

梢こそ更う都のを百はくら <sup>(冊)</sup>政春

うすみもよふ月おあけ海乃 具忠

かり衣さしす鳴野こあちいて、 慶琳

何木

何木 同

花比香や空ヲ霞乃あさ緑 元平

松も春ふく風の志つけさ 光清

雁うゑる志不ひをるか月涼て 惠俊

何人

何人 攝州

をふる猶木の間をく照し花盛 政國

あらし聲せぬ九重お春 元長 <sup>(經師寺)</sup>

文明十八年二月二十五日

二一九



文明十八年二月二十五日

遠山此のすみの上り月されて

景有

白何

白何 同

春は松こと木計に風をぬし

元長

なひく柳を枝ををく露

通秀

いとあうれ日もそや雨ふくれ初て

彌阿

何人

何人 讃州

むつましき言葉此をぬや花さうり

元家

こゝろハとも□そるり行こ流

世縁

山は今朝おほる月夜り明初て

賢盛

初何

初何 同

遠山もさねより花を都うぬ

頼連

のぞけ空をあらぬ鳥此音

元家

霞よりくれ行色は雨ちちて

憲俊

何木

何木 丹州

以久春そはしき巖不此松の春

元秀

のとけき庭をならぬ友鶴

賢家

なうくさす雲の朝は峯越て

實道

何人

何人 同

夜るを見□□はしきぬ代乃春此花

宗祇

千里此月をむえうなる比

元秀

うくひその聲さく山をあげ初て

賢家

御前御座敷御連衆 同丙午年

政國右馬頭殿

頼連明知兵庫殿

政清小田

元平小早川

利長松住

正茂星野

宗祇

元用

元重秋庭

長祐香西

○細川政國第詩會ノコト便宜左ニ合敘ス、

〔蔭涼軒日録〕五月五日天降雨○中齋了宜竹翁來有小宴翁語曰今日於右

馬頭殿有詩會爲朝東啓執筆設此會也詩題詩律至阿虎朝公自稱阿虎故及

文明十八年二月二十五日

二二一

細川政國  
第詩會

二二〇



宮女ヲ召  
サセラル

御返禮ニ  
宮女申沙

勝仁親王  
モ酒饌ヲ  
獻ゼラル  
清涼殿ニ  
テ御宴ア  
リ  
聞香  
小弓モア  
リ

甘露寺元  
長ヲ召サ  
セラル  
小弓勝負  
元長萬里  
小路賢房  
負態申沙  
汰

安禪寺觀  
心尼大慈  
光院宮等  
藤ヲ見參  
ル  
龜大夫歌  
フ  
十度飲  
三條西實  
隆ヲ召サ  
セラル

御靈社北  
野社御參  
詣

之、

二十六日、壬寅觀櫻御宴アリ、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫記録甲二十七所收

二月廿六日、いとちくらさうりに

て、上らぬ新大せけ殿、中内御いゝるゝいりのこり此御人せへとて御てうしとも御いとしあり、うやうの御あくみとも、うつてまりゝいらせすしてたもしろし、くはうよりもこうを拵あともて御てうしとふ、くれくれ、よハ五よて御さう月ゝいりて、うと拵あともあり、御日んせ拵より大衆あれ、廿八日、○中略大さくらちりよて、おとしひの御日んせい申御人せ、すけ殿新せけ殿、ちうせし、新内侍殿、いよ殿、權を、もん部卿よりも御てうし、ら、まつく、宮の御うとよりもへちして御てうし、ら、をい、やうてんよて、御日し、く、とあり、せんせうも御ゝいり、うといあともて、みま、く、あをさりからぬ御えいともあり、御ううも御うたあり、すゝめこゆゑあるハして、うの、ちまてゝとくしともめつらしくくもしあり、廿九日、○中略昨日の御をゝ御をうぬ、頭辨權のせけ申さ、御日し、くとま拵うといよて三こんら、

〔親長卿記〕

十七

二月廿八日、晴、元長朝臣依召參内、有御花見云々、次有小

弓、

廿九日、晴、元長朝臣、藤中納言入道亭有花見、罷向之處、自内裏有召、仍參内、昨日小弓負一種一桶持參了、賢房同負云々、

〔實隆公記〕

九

二月卅日、丙午、晴、參内、東庭櫻爛熳、驚目、

○コノ後、藤ヲ賞シテ御宴アルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫記録甲二十七所收

三月十六日、あんせんし殿、ちう殿、

女せうとち、藤をけさんよ入らるゝ、御てうしともら、うめとゆゝいりてうとふ、ちこはとうしへよてゝいらせ、をふさき事をうら御日し、くとめてとし、く、十とのゝあり、

〔實隆公記〕

九

三月十六日、壬戌、晴、晚頭有召之間、參内、御懸白藤賞翫、女中

申沙汰也、七條龜大夫美聲有興、十度飲在之、盃酌數巡之間、予沈醉平臥、前後不覺也、不可説々々々、

二十七日、卯癸勝仁親王、山城嵯峨ニ御出遊アリ、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫記録甲二十七所收

二月廿七日、宮北御うと、五里やう、



御供ノ人々

文明十八年二月二十八日

二二四

北野、さうへ御ふいり、御ともよ源大納言、とん部卿、ゆたろすのあそん、權を  
け、かんま、しうま、こう、をり御さる御所よりもとせらる、

〔實隆公記〕<sup>九</sup> 二月廿七日、癸卯、陰、雨降、<sup>○中</sup>抑今日宮御方嵯峨迄御遊山  
云々、

二十八日、<sup>甲辰</sup>幕府和歌會、

〔實隆公記〕<sup>九</sup> 二月廿七日、癸卯、陰、雨降、<sup>○中</sup>曉更自室町殿被下題、則詠進  
之、

〔爲廣詠草〕<sup>(三月)</sup>廿八日、大樹御當座、社頭花

をのつゝあらちらぬ心、袂手向よてめくれぬ花のちくらその宮

雨後花

ちらほくもうか、りし雨ハ夜ハよされて花こそ今朝ハ袖ぬらしなれ

○コノ後、幕府、屢和歌會ヲ張行スルコト、便宜左ニ合致ス、

〔十輪院内府記〕<sup>中</sup> 三月七日、天陰、細雨、自室町殿御使、送給二首御題、即詠  
之、以光任進上了、

〔實隆公記〕<sup>九</sup> 三月七日、癸丑、雨降、撰歌合付二階堂進上之、<sup>○シテ義尙、實隆ヲ</sup>

實隆詠進

中院通秀  
シニ詠進セ

雨後花

社頭花  
詠進  
爲廣  
詠進  
爲廣

三條西實  
隆ニ詠進  
セシム

當座  
爲廣詠進

書寫セシムルコト、本月當座題二首、被下之、則詠進之、  
二十二日ノ條ニ見ユ、

〔爲廣詠草〕<sup>(三月七日)</sup>大樹御當座、春雨

聞るふる袂覺の袖比春雨や心比水のまつく成らん

春虫

あとし世のとまゝの花またはれぬる身をもこ蝶や夢とみるらん

春祝

代々をへそ雲井よそこふ御薪のをもねそ君の宣命ある

〔後法興院政家記〕<sup>十一</sup> 三月廿六日、<sup>壬申</sup>自午刻雨下、晚景止、<sup>○中</sup>御會祇候  
間、<sup>○外様番衆月次和漢御會ノ見ユ、</sup>自大樹給當座題一首也、<sup>坂關、春會使伊勢又七云</sup>

々、退出後令詠進、

〔實隆公記〕<sup>九</sup> 三月廿六日、壬申、陰、雨時々降、<sup>○中</sup>抑今日自室町殿被下題、  
則詠進之、御會之叢中同賜題人々有之、

〔爲廣詠草〕<sup>(三月)</sup>廿六日、大樹當座、志賀花園

咲あらよ浦の波の面影も昔よりへはまゐる此花その

四月一日、大樹當座、籬瞿麥

文明十八年二月二十八日

二二五

實隆詠進

近衛政家  
詠進



暮ぬるもやとりとほへく路のへよ咲や籬のやほとちてしこ

湖雪

さそひぬる木乃葉此沖ハ名のミしてちりうふ雪より風そ吹

閑中灯

あとし身乃影とそむうふ閑ある心の窓よそを灯

〔十輪院内府記〕中 四月十四日、○中 入夜自室町殿給題、御使吉見、以長氏

進上之了、

〔爲廣詠草〕四月 十四日、大樹當座、雲間郭公

水鳥のあはれを此山ののと、さけなれのと雲の波や分らん

都鄙歳暮

都よもかハラてとしやとつう弓きの關守もとめぬあらひと

寄衣戀

せえをくむくミをほくあまの衣の袖よりもうたよ去不志む心とをしれ

〔常德院集〕四月 十六日、四季袂わうちて人々歌よ見侍しよ、

霜う雪かひとりちりちりめてさよ衣打ねとろきは有明の月

義尚ノ歌

通秀詠進

近衛尙通  
詠進

五月十日  
古人ノ名  
ノ題  
山邊赤人

壬生忠岑

源順

源俊頼

藤原爲家

〔後法興院政家記〕十一 四月廿九日、甲辰 朝間小雨、自大樹給短尺、歸雁、亞相

分 荻風、明日可詠進云々、亞相分遣石藏、

五月一日、乙巳 晴陰、○中 昨日之短尺、愚詠并亞相分進大樹、

〔十輪院内府記〕中 四月廿九日、自大樹給題、佐竹御使、明日可詠進云々、

五月一日、○中 愚詠付佐竹進之、

〔常德院集〕五月 十日、古人乃名よて、人々歌よ見侍しよ、山邊

取名 春日山のへ乃さをしう心をよ秋萩さたて露とと露なり

忠岑

取歌 いみしへの有明此月乃別より秋の心此うたををそし露

順

取名 なよそあゝことうら船の名をたらしたらうた中に遠さうるらん

俊頼朝臣

取歌 満さねちるミ色のゆらし此音信をきくけむ人ハ逢よしもふし

爲家卿

同 花乃そらとねをけよしてちりになんその木此もとそ今も戀しな



文明十八年二月二十八日

二二八

頓阿法師

取集 今をな茂袖みうけてそねもひまを草此庵乃言の葉此露

雅世卿

取名 つとらえてまけまむけささうりの山さよ更らと此露にぬれつゝ

〔十輪院内府記〕 中 五月十九日、○中 自大樹題給吉見御使也、對面謝遣之、

廿日、題詠進之、申次安藤云々、

〔實隆公記〕 九 五月十九日、癸亥、○中 自室町殿被下五首題、明日可令詠進

之由也、

〔爲廣詠草〕 十九日、大樹當座、郭公漸稀

郭公まつよまれしや遠さある比も初音と又まよふらん

庭瞿麥

うつしをく庭乃をしへハありとてもとれとそやさんや猫とあてして

山夕立

夕立ハ晴行雲のうとへより聲ぬり出る日くらしの山

未通書戀

おもひ川心乃氷うち解ていつのちあるさん水くさ此跡

朝眺望

人ハさてやのぬま不りのうら風よまひく煙や松の一村

〔十輪院内府記〕 中 九月一日、○中 入夜自武家給題詠以長氏進上之、

〔實隆公記〕 十 九月一日、癸卯、雨降、○中 自室町殿三首題被下之、則詠進之、

〔常德院集〕 九月二日、假名題歌よえ侍しに、ぬちをうぬ

又やこむをそ野のそら此ぬちをうぬまをれよそれる花の盛を

こひむむぬ

人よさていうみはれかくなうらえむ戀むひぬともありてやまをハ

〔實隆公記〕 十 九月十九日、辛酉、晴、○中 自室町殿被下三首題、明後日可詠

進之由也、

〔常德院集〕 廿一日、藤原尙隆人々すしめし、歸雁

わりしはれハをる此ふしきやこれならむ柳さくらの衣うり金

雑々の歌

あきらけを御代の光ををるへよてよもふくもらぬ春ハ來よたり

文明十八年二月二十八日

二二九



一色義直  
第當座和  
歌會

下をもちうつろふ比の山うせ八月此とめともたをハさりし  
ましの山高ね乃花のよほひてろむらけそめたる法此言乃を  
○一色義直細川政元等、和歌會張行ノコト、便宜左ニ合敘ス、  
〔爲廣詠草〕<sup>(二月)</sup>廿九日、一色修理大夫亭當座、栽花  
春ハと、心もち、ようつし栽、野山の花をみる軒を哉

曉更鶏

鳥の音よいうて朝のまされましはうへぬ夜ハもある身成せは

祝言

ためしよや千世もひるあんほはさ弓もとあつ道の宿のをしへを

<sup>(三月九日)</sup>元家安富新兵衛許よて當座、落梅

梅のえ乃花ハ散行木うくれよ色ある笛の聲を殘れる

竹雪深

積る氷やをの姿と松うえよけちめまきとる雪のあよ竹

戀鏡

戀ハさそあもとのまのハ朝とよむうふ鏡もあまの面影

細川政元  
第和歌會

<sup>(四月)</sup>廿八日、政元張行、岡邊早苗

松をきる岡へ乃小田ハミえむうて煙のそよ早苗とる聲

山家水

山陰よ跡とよめきて行水の心をうしやせてハつる身ハ

義政、建仁寺嘉隱軒ニ、同軒領攝津耳原莊代官職ヲ、又十地院ニ、同院領  
三條烏丸ノ地ヲ安堵セシム、

〔蔭涼軒日録〕二月十二日、不參、天氣快晴、<sup>略</sup>中嘉隱軒領攝州耳原代官職、自

寺家契約于奈良、以來及八十年、一亂以來安威爲國列退奈良、彼代官職領之、  
<sup>(細川政元)</sup>九郎殿攝州在國時、自寺家致訴訟退安威、如元任奈良、近日又自桂林寺殿混  
雜本役、可任安威之支度有之、以此旨達台聽、如先規寺家爲進退、可爲大幸由、  
以連署訴訟、

廿七日、天氣半陰半晴、<sup>略</sup>中齋罷謁東府、<sup>略</sup>中嘉隱軒別奉行諏訪信濃守書立

并彼軒領攝州耳原代官職事、桂林寺違亂、自嘉隱以連署訴訟之事、以左京大  
夫伺之、可成奉書之由有命、十地院御領三條烏丸北頰東西十九丈二尺、南北  
十四丈七尺、細川殿被官人押領、以目安御訴訟、以冷泉殿伺之、可成奉書之由

奈良某代  
官職タリ  
應仁亂後  
安威某奈  
良ヲ邵ケ  
押領ス  
桂林寺安  
威ニ與セ  
ントス  
諏訪貞通  
別奉行ト  
爲ス  
細川政元  
被官齋藤  
藤兵衛尉  
三條烏丸  
領ノ地ヲ  
押ス



十地院別  
奉行清貞

大棟倉

幕府政元  
被官增井  
某三條  
烏丸代官  
職トス

集證周鳳  
リノ例ニ依  
周麟ヲ

文明十八年二月二十九日

有命、別奉行清八郎左衛門尉也、

廿八日、天快晴、就十地院領三條烏丸屋地事、可成奉書之旨、寺奉行清八郎左衛門方遣一行白之、又東山嘉隱軒領攝州耳原代官職事、桂林寺違亂、如先規可爲寺家進退之御奉書可成之旨、諏訪信濃守方遣一行、又就別奉行事遣一行也、就十地院領事、自萬松棠首座來、三條烏丸屋地事、委曲尋之、則答曰、彼屋地事、自十地院依有御志、御寄進于嵯峨德行院、其後島山光孝寺殿職時、大棟倉勝藏坊買得之、細川龍安寺殿代及糺決、德行院一代之住持理不盡賣之、買者之卒爾也、如根本十地院御知行可然云云、召放勝藏手見付十地院也、自十地院代官職事、細川殿被官增井被仰付、今致違亂者、亦細川殿被官齋藤藤兵衛尉也云云、

二十九日、乙義政、周麟景ヲ山城景德寺住持ト爲ス、

〔蔭涼軒日録〕二月廿七日、天氣半陰半晴、○中齋罷謁東府、○中相國寺等持寺之住持、自古擇其人才御登庸有之、近來者隨內緣、雖非其人才、以上意領公帖者儘有之、太不可然乎、等持寺事來年夏了、○中當住可退、然者周麟首座理運也、當年四十六歲、去文明十五年結夏勤秉拂、先御代瑞溪和尚四十六歲而自后

景德寺ニ  
住セシメ  
ント諸フ

公帖出ゾ

義政周麟  
ヲ明年等  
持寺ニ住  
トセシメ  
メ

周麟公帖  
ヲ領ス

堂勤舊直、見拜景德寺之公帖、乃入院、以此舊例、先見下景德寺公帖可然也、寺未具體之故、入院事不可有之、彼仁事其才冠衆、其行跡亦過衆人之由白之、命于鹿苑院、早々景德公帖可書上之命有之、乃往鹿苑傳台命、

廿九日、天半陰半晴、齋罷謁東府、周麟首座景德寺公帖御判出、○中往大館刑部大輔殿宅、令一見景德寺公帖、遂往小補同途以往宜竹、蓋持景德寺公帖、東雲侍丈先驅、有宴、移座常喜軒、又有宴、及晚醉歸、○中晚以悰子報景德寺公文事於細川典厩、大館彈正少弼殿、皆謝詞丁寧、

晦日、不參、天快晴、○中自典厩以新見次郎三郎、被伸景德之公帖事、有小宴、○中略夜來景徐翁爲禮謝來、以悰子奉告景德寺公帖事於搃持院殿、有謝詞、

三月四日、天半陰、齋罷、○中橫川同途以謁東相府、○中又景徐景德寺公帖拜領、殊來年等持寺住持事預被相定、○中享元年七月二十八日、○中爲ルコト、長、旁以過當之儀也、年齡尙少、雖可令斟酌、應台命、來六日可開公帖、其以後爲禮謝可令拜謁、愚云、御對面之次有之者、雖爲何時令參謁、有御對面可然之由、以春日殿謹白之、○中又以昌子傳台命於宜竹、蓋參賀御對面事也、

六日、不參、快晴、齋前景徐領景德公帖、此日初出頭、爲禮謝來、春英同途、東府進

文明十八年二月二十九日



周麟佛事  
法語ヲ持  
參

周麟義政  
禮謝ス  
香爐盆杉  
原等ヲ進  
入寺法語

物色々持來、二種留之、令見相阿、若道可然、可被相定云云、  
七日、不參、快晴、招小補齋、時自宜竹見贈樽、食籠、仍招宜竹翁、彥龍來留之、三老  
飯之、

八日、自昨晚天降雨、○中晚來往宜竹、伸景德鈞帖之賀、有小宴、

九日、不參、天快晴、齋罷、等持寺來話、時景徐亦景德寺入寺、諸佛事法語持之來  
降、有小宴、送之出門、

十八日、天降小雨、齋罷、謁東府、○中景徐西堂御對面事、以前雖爲何時御對面

之次、可有御對面、由被仰出、自餘之御對面、近日不可有、以故態、可有御對面之  
命有之、然者來廿日午后、可被參之由、以冷泉殿被仰出、乃傳台命於宜竹、

廿日、天快晴、○中齋罷、謁東相府、景徐西堂御對面、愚引導如恒、胡銅香爐一、堆  
朱花鳥紋中形盆一、杉原十帖、調折番見獻之、

〔翰林葫蘆文集〕二 靈龜山景德禪寺入寺法語

師於文明十八年丙午二月二十七日、就北禪軒受請、指

山門云、三解脫門、八字打開、願視景德一千七百善知識、隨我來也、

佛殿、展手、展五指頭、現五師子、握拳、縱是百千文殊、不出山僧手裡、

土地、撒米拜价、闍梨、貪飯迎王老師、神乎々々、不夢見山僧不來而來、

祖師、直指人心、見性成佛、是名達磨陀羅尼經、即今爲衆翻譯去、類我々々、螺贏  
螟蛉、

據室、這ヶ密庵師祖一生用不盡底竹篋、展轉歸吾祖龍翁掌握、六處七會、佛魔  
共打、山僧不然、歸來坐虛室、夕陽在吾西、

拈帖、山野竊誓、若出世必在五十年後、准三宮俄下筍、曰、景德名山可往、以董、事  
出不虞、無地同避、舉帖、南山可移、此判終無搖動、

拈衣、神秀首座傳不得、道明上座提不起、舉衣、看看、僧伽梨角有藏風地、

拈香云、虔爇寶香、端爲祝延、  
今上皇帝聖躬萬歲々々萬々歲、陛下欽願、日行黃道、輝光七王七佛之出唐、雲  
捧玉皇、度越五季五星之聚宋、

次拈香云、此香爇向寶爐、奉爲大檀越大人相公資陪祿算、伏願、謝太傅居東山、  
撫育蒼生於海內、曹相國朝北闕、開濟朱運於關中、壽考坐閱萬年松結蟠桃、本  
支長齊一株桐生杞梓、

又拈香云、此香奉爲本寺檀那增崇福壽、伏願、磨下定一、齊王討左右譽阿、殿中







加賀萬福寺  
筑前國禪光寺  
周德

大隅正興寺  
德純

信濃西光寺  
出羽金剛寺  
越中現福寺  
相國甄福寺  
頂院再住

五月十九日、天快晴、略中齋了謁東府、略中筑前國聖福寺入院壽闇西堂備後國天寧寺入院梵理西堂、出羽國崇禪寺入院周暉西堂公帖御判被遊、廿日、天快晴、略中齋了謁東府、略中加賀國萬福寺入院圓恕首座、筑前國禪光寺入院周德首座以書立伺之、周德首座、宗鏡和尚當山住院之時、藏主秉拂謝詞依一亂失却云云、

六月六日、不參、天氣快晴、略中周德首座筑前國禪光寺入院圓恕首座加賀國萬福寺入院公帖御判被遊、乃遣鹿苑院、

十一日、不參、天快晴、略中又德純首座大隅正興寺入院書立并謝語軸携之來、留置之、

十三日、天快晴、略中午後謁東相府、略中大隅正興寺入院德純首座以書立伺之、略中堀川殿御白次、

廿四日、天快晴、早旦謁東府、略中德純首座大隅國正興寺入院公文御判被遊、信濃國西光寺入院等訓首座、出羽國金剛寺入院正苟首座、越中國現福寺入院等甄首座以書立伺之、

廿七日、不參、天快晴、略中齋罷當院侍真集樹首座謁東府云、雲頂院塔主集證

細川元政  
飯尾六郎  
右衛門尉  
通シテ持  
寺後住持  
翰旋ハ請  
ハシムル  
後住ハ既  
定マシム  
政元集證  
通シテ麟  
ノ後住コト  
ナリヤシ  
トハシム  
ムトハシ  
義政集證  
フ人惠通  
ノ問

西堂、今月三十六箇月期已滿將退、後住無其仁體、再住之事被仰付者、爲一衆素望、乃可令再住之有命、調阿奉之云云、侍真來告愚、其後往鹿苑院報台命、當院諸老東西皆來賀有宴、略中夜來往小補話再住之命、

廿九日、天快晴、此謁立秋也、早旦謁東府、伸雲頂院再住之禮謝、仙翁花、桔槔一包獻之、乃立命立阿立之、略中正苟首座出羽國金剛寺入院等甄首座越中州現福寺入院等訓首座信濃國西光寺入院御判被遊、乃遣鹿苑院、

七月十四日、天快晴、略中今朝遣襟子於飯尾六郎右衛門宅而曰、惠通西堂等持寺後住之事承去春東相公以周麟首座被定之故、先被下景德之公帖、然間通西堂之事不可及披露、以此旨、（細川政元）右京大夫殿江御披露所希也、六郎右衛門對面襟子曰、麟西堂之事者、已前所承及也、然者麟西堂後之住院之事被達上聞者、京兆可爲歡喜、御披露後承上意趣、以可傳京兆、

十九日、天快晴、略中等持寺後住事、以惠通西堂書立、自細川九郎殿可白沙汰之由、以使者被白、愚曰、等持寺後住事者、以大館周麟首座有御定、以故去春先被領景德寺公帖、然間不及披露云云、自九郎殿重而被白趣者、周麟西堂之後住事可白沙汰云云、以此旨、即今以書立白之、相公曰、惠通西堂者等持寺住持



惠通八政  
元被官  
大田氏ノ  
親類

集證書狀

廣覺寺元  
順

坐公文

文明十八年二月二十九日

二四〇

可然仁體乎、愚云、然也、於天龍寺人才也、九郎殿被官大田親類也、不愧等持之住持者也、然者可爲其分云云、件々以左京大夫殿白之、入夜歸院、廿日、天半陰半晴、齋前遣悰子飯尾六郎右衛門尉宅、惠通西堂等持寺景徐之後住事、昨日以京兆御白旨、達東相公尊聽之、由報之、六郎右衛門尉云、其分一行可承可致披露云云、乃遣一行、其文云、

惠通西堂等持寺住持職事、以蒙仰旨、昨日達台聽候處、後住事者、以周麟西堂被仰定候、其已後者御心得之由候、此分可得御意候、恐々謹言、

七月廿日

集證判

飯尾六郎右衛門尉殿御宿所

十二月十一日、天快晴、○中晚來愚謁東府、○中廣覺寺入院元順西堂等書立、

○中以上三通以堀河殿供台覽、

十五日、不參、天快晴、○中元順西堂廣覺寺入寺公帖、以上四通御判出、堀河殿

御白、蓋昨日愚謁東府白之、相公時御座御持佛堂之故、御判事不及白也、今日

以悰子督堀河殿也、○中公帖四通以悰子贈鹿苑院、

〔蔭涼軒日錄〕二月十二日、不參、天氣快晴、○中萬壽寺模元和尙、同紀綱同途

南禪寺永  
猛

圓覺寺慶  
集

寶幢寺靈  
洙

建長寺統  
仙  
建仁寺光  
嘯

建長寺壽  
盛

寶鏡寺ノ  
推舉

筑前聖福  
寺榮乘

曰、萬壽住持伯進和尙四度再住、除此老無可住持之仁、南禪寺坐公文事有白沙汰者、寺家大幸不可過之、以內義、此由鹿苑院白之、

三月十二日、天晴、○中齋罷謁東相府、○中伯進和尙南禪坐公文、慶集西堂圓

覺寺坐公文、靈洙西堂寶幢寺坐公文、以書立并鹿苑院一行伺之、雖爲堅御禁

法、一々有所謂、故御免之由有命、

十八日、天降小雨、齋罷謁東府、統仙西堂建長寺坐公文、光嘯西堂建仁寺坐公

文、○中御判白之、乃遣鹿苑院、

〔建仁寺住持位次簿〕不入寺二百廿四世 喜足和尙名嘯、嗣伯陵、文明十八年丙午四月賜帖、光澤庵、

〔蔭涼軒日錄〕三月廿一日、天快晴、齋罷謁東相府、伯進和尙南禪寺坐公文、慶

集西堂圓覺寺坐公文、靈洙西堂寶幢寺坐公文御判被遊、

五月十七日、天洒雨、○中午後謁東府、壽盛西堂字次仲建長寺坐公文、○中御

判白之、壽盛西堂字次仲、來廿四日於寶鏡寺有作善、以故自寶鏡寺御白御免

也、

廿日、天快晴、○中齋了謁東府、○中筑前國聖福寺坐公文榮乘西堂、○中以書

立伺之、

文明十八年二月二十九日

二四一



護國院  
寄進ノ分

圓覺寺梵  
密  
景德寺周  
鏡

真如寺光  
松

文明十八年二月二十九日

二四二

六月六日、不參、天氣快晴、○中榮乘西堂筑前國聖福寺坐公文、○中公帖御判被遊、乃遣鹿苑院、榮乘西堂護國院造營時、御寄進內于今相殘分也、蓋御寄進者數年前事也、○中公帖并此二通冷泉殿奉之、悰子請取之、飯矣、

廿四日、天快晴、早旦謁東府、○中梵密西堂圓覺寺坐公文、○中以書立伺之、廿九日、天快晴、○中周鏡首座秉拂請文、

景德寺公帖之事被仰出候、忝畏入候、秉拂之事者、來冬節於萬壽寺可勤之候、若無沙汰仕候者、堅可有御成敗候、

文明十八年六月廿六日

周鏡判

鹿苑院

侍衣禪師

洪恩院

此請文一覽之後、乃以了傳行者返之、宣書記請取之云云、

七月六日、天快晴、○中午後謁東府、○中周鏡首座景德寺坐公文御判被遊、

八日、不參、天快晴、齋前鏡湖隱領景德公帖初出頭、爲禮謝來、不對面、

十一月六日、不參、天快晴、○中松東歸來三聖寺退之事、懇切望之、愚云、雖無疎

義、後々例奈如之、乃歸矣、

七日、天快晴、齋罷謁東府、○中光松西堂真如寺以書立伺之、蓋去九月二日以

三聖寺入寺之書立伺之、其時有御約諾、故以愚私之書立白之、有御領掌、乃以

悰子傳命鹿苑院、○中松東歸一級事、同三聖寺退事、又再住事遣一行報之、

八日、不參、天快晴、齋前晁明遠來、松東歸一級之禮謝也、勸以一盃竹葉、贈以一

枝梅花、

十日、天快晴、○中晚來謁東府、光松西堂真如寺坐公文、○中御判出、自此三通

始飯尾加賀守清房調之、以悰子遣鹿苑院、

十一日、不參、天快晴、○中齋了松東歸爲真如公文禮謝來、有小宴、

十五日、天快晴、行事如恒、齋了謁東府、松東歸真如寺公帖拜領、爲禮謝被參、段

子一端赤地黃紋、圓墨一挺、小高檀紙十帖、調折紙進上供台覽、依御瘞氣無御

對面、松東歸云、今所進上之圓墨類尙有一挺、誤打破之、試磨之、則其色可也、故

進之云、語冷泉殿則乃達台聽也、

〔蔭涼軒日錄〕

二月十日、自昨暮天降雨、曉來快晴、○中謁東府、○中又天龍寺

度僧享安喝食書立并住持舜澤和尚一行相副、渡與堀川殿、相公時晝寢、晝寢

過後、件々可達台聽云云、

十二日、不參、天氣快晴、○中天龍寺御相伴給仕享安喝食度僧書立伺之、御點

文明十八年二月二十九日

二四三

光松公帖  
禮謝ノ爲  
物ヲ義政ニ  
進ム

喝食度僧  
天龍寺享  
安



小寺祐職  
ノ猶子賢  
松病氣=

天龍寺等  
高

南禪寺東  
禪院禪長  
義向ノ命

出

廿七日、天氣半陰半晴、中瑞猷藏主字竹莊、携（祐職）小寺勘解由左衛門尉使出井新五郎來、惠以杉原十帖、野里五々、蓋勘解由猶子賢松字希仙、自去年七月不例、依之度僧事望之、當年十八載、留竹莊、出井、有小宴、

三月八日、自昨晚天降雨、齋罷謁東府、中就天龍寺御相伴給仕賢松喝食度僧事、瑞猷藏主一行并書立供台覽、御免之由被仰出、

四月十三日、天氣快晴、中謁東府、中天龍寺御相伴給仕等高喝食度僧事、自摠持寺殿以久昌庵一行、同喝食書立供台覽、摠持院殿御申由白之、相公曰、寺家義如何、愚白、自摠持院以內義被屈、寺家不可有子細之由、住持白之云云、相公曰、然者御免之由有尊命、中謁摠持院、等高喝食御點之書立渡之、

廿七日、不參、天半陰、中今日晡時於瑞春軒有宴、本房雲澤衆、蓋慈藤喝食爲鶴都寺取立之祝宴也、

五月十日、不參、天降小雨、中晚來自西府被召、以不例之故使悰子謁、今御乳人、傳台命曰、南禪寺東禪院禪長喝食度僧事、可命于寺家之由被仰出、

東福寺曹  
源院禮咸

天龍寺周  
高

勢長  
天龍寺等  
證

十二日、不參、天快晴、中南禪住持蘭坡和尚光降、東禪院禪長喝食度僧之事、有西府之命、直傳之、同侍藥之事命之、團扇一柄見惠之、

十三日、天氣快晴、中謁西府、禪長喝食度僧并侍者事、住持領掌之由、以今御乳人白之、中歸時往安東右馬助宅、仲先日來訪之謝、且報禪長喝食度僧并侍者事、住持領掌分、達上聞之由白之也、

六月廿二日、不參、天快晴、中自堀川殿東福寺曹源院禮咸喝食度僧事、有命、廿七日、不參、天快晴、中東福寺曹源院禮咸喝食度僧事、召看方丈白之、

廿九日、天快晴、此日立秋也、中東福曹源院禮咸喝食度僧事、以山中諸老評議、應台命之由、今朝有返答、

七月六日、天快晴、中晚來自妙嚴翁使景雪首座來曰、天龍寺御前給仕周高喝食度僧事、自廣福院被白、最初自我々方白之、只今自廣福直被白、依之我々方御屈誠本望也、然者以御機嫌被達台聽者、珍重之由、東瑛首座白云云、

十三日、天快晴、早且謁東府、中天龍寺御前給仕周高喝食度僧之事、自去年廣福院被白之、愚押之于今、不白、勢長年老、度僧之事可有御免、蓋廣福院之養子也、天龍寺御相伴給仕等證喝食、依不例度僧之事、自寶鏡寺殿賜御書御白



義軒政聯輝  
泰同宿周  
ツ度僧ニ  
フノキヤ寺家  
意ヲ問

寺家ノ意  
ニ依リテ  
許サズ

天龍寺相  
伴給仕

同御前給  
仕

之由白之、兩人御免之由被仰出、及歸召天龍侍衣傳台命、周高喝食之事、告于  
聯輝軒妙嚴庵、  
十一月十八日、不參、天快晴、略○中晚來自東府被召僧、柏首座參、以春日局有台  
命、聯輝軒同宿周泰喝食、度僧書立出之曰、寺家若領掌、直可報聯輝軒、若又寺  
家拒之、以其旨可達台聽云云、

十九日、天快晴、略○中齋了謁東府、方丈壁書案文供台覽云、御相伴給仕隨緣緣  
不時度僧之故、御成毎々給仕不足缺事耳、由是去年四月以評議定壁書、白御  
判如此、若壁書事有御失念、度僧事被仰出歟、又雖有壁書、依聯輝御白、別而被  
仰出歟、爲窮台慮未傳台命於方丈、答曰、壁書更無失念、不可破壁書、今所望喝  
食以理運之儀、白歟、然者可有御免、若又非順義壁書之旨、不可破之、愚又云、此  
仁非理運、位次此上尙有之云云、然者不可有御免之由有之、春日局白次也、

〔蔭涼軒日錄〕五月十三日、天氣快晴、齋了謁東府、略○中、天龍寺御相伴給仕慶  
芳喝食等榮喝食、壽恩喝食、眞燾喝食、永純喝食、以書立伺之、  
七月廿七日、天快晴、齋罷謁東府、略○中、天龍寺御前給仕周鶴喝食、御相伴給仕  
紹登喝食、周撰喝食、壽照喝食、以書立兩紙伺之、御領掌、皆左京大夫殿白之、

承宣喝食  
赤松氏ノ  
族宇野某

御人數ハ  
勝仁親王  
三條西實  
隆ノミ

三十日、丙連歌御會、

〔御湯殿上日記〕略○京都御所東山御文 二月卅日、略○中宮比御方、去、の  
中納言ハ、うりまて御きん、あり、

三月一日、

（讀書）昨日の御れん、の、こり御さ、とあり、

〔實隆公記〕九 二月卅日、丙午、晴、參内、略○中、入夜被遊御連歌、竹園御參之外

文明十八年二月三十日

二四七

十一月四日、天快晴、齋前紀綱壽昭首座、持御給仕書立來云、此内孰爲御前給  
仕可然哉、愚點檢之云、等善喝食、瑞朝喝食、此兩人者可然也、雖然尙幼少之故、  
不可適台慮乎、承宣喝食可然乎、紀綱含胡飯、遂書立承宣喝食、維那持之來、齋  
罷謁東府、略○中、承宣喝食書立供台覽、其族姓赤松一家、宇野越前守子云云、乃  
御領掌、略○中、及歸召紀綱、承宣喝食書立渡之、

五日、不參、天快晴、略○中、晚來春蘭庭來、仲承宣喝食御前給仕之謝、

八日、不參、天快晴、略○中、大龍塔主集雍西堂、明日有播陽之行、蓋可相見于太守

也、仍後藤藤左衛門尉方、江吹嘘之一行請之、乃調以遣之、彼書中言承宣喝食  
御前給仕御點出之事、可喻宇野越前守、同舍兄四郎方兵部公等之由也、

（赤松政則）



文明十八年二月三十日

二四八

無人予執筆□候、及深更二折面終功、明日可被終百韻之功、相構可參候之由、被仰下、畏奉之由申入了、○中略賦何路々

御發句

雪菟去年みしころうらめ花盛

あらしの松も春ふうき陰親王御方、

月出る霞のおくの山くれて實隆、

三月一日、丁未、天顔快晴、朔日幸甚々々、○中略小時參内、則夜前御連歌殘被遊

之、及夜景終百句功、親王御方御句等殊勝、御製卅五句、親王御方卅四句、下官

卅一句申之、

御製三十句  
親王三十句  
四句  
實隆三十句

〔後奈良天皇宸翰發句〕○山城曼殊院所藏

文十八二冊雪を去年みしてそうら花さうり

安藝國內ニ雜説アルニ依リ、大内政弘、久芳永清ヲシテ出兵セシメ、備

後鏡城ニ在番セシム、

〔萩藩閥閥録〕

百十七久芳五郎右衛門

就雜説風聞之儀、到東西條、早速令著郡、於鏡可遂在城之狀如件、

永清東西  
條ニ出兵  
ス

文明十八年二月卅日

大内政弘、判

久芳掃部助殿

爲鏡城衆令在城、諸篇奔走可爲神妙、然者神代安藝守無等閑、每事可相談之、〔雜説〕狀如件、

十月四日

大内政弘、判

久芳掃部助殿

文明十八年二月三十日

二四九



三月 小 未 朔

一日、御祝、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山所御文 庫記録甲二十七所收

三月一日、あさ御ちり月らり、まよ

ひの御いり持いつものとし、さう上らぬ御りいり、

〔實隆公記〕

九

三月一日、丁未、天顔快晴、

○今夜御祝祇候人々、源大納言、

下官民部卿、以量朝臣、賢房等也、初夜鐘報之後退出、

義尚、義政ヲ省ス、

〔親郷日記〕 三月一日、丁未、

一東山殿へ御所様御成、御伴衆大館彈正少弼殿、細川右馬助殿、細川淡路二

郎殿、貞陸、

三日、節供御祝、鬪雞アリ、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山所御文 庫記録甲二十七所收

三月三日、御さう月いつものとし、

御をつくはるいらそ、みん部卿よりくしうね、御くり色々、中御さる一

する、

〔十輪院内府記〕

中

三月三日、天明早朝通世當番早參之次、以青侍談合鬪

祇候ノ人々

白川忠富  
串柿栗等  
ヲ獻ズ

三條公治  
雞ヲ獻ゼ  
ズ  
中院通秀  
三羽獻上

甘露寺元  
上長一羽獻

北御所ニ  
猿樂アリ

山科言國  
詠進

山霞

柳

栽花

苗代

葵

鶏大臣家進上事如何之由民部卿了、先々三條家皆進上之云々、昨夕傳聞、三條大納言公治不進鶏、如此之雜役、大臣家不沙汰云々、進鶏之段難謂雜役、仍任民部卿命三羽進上、雜色男抱參入、渡御牛童了、六位藏人奉行殿上人進上之旨中古之事也、大臣家進否猶可決事也、

〔親長卿記〕

十七

三月三日、晴、鬪鶏可召進之由極藪催、頭辨一羽召進了、申

剋許參内、今日御禮也、每度入夜參内、被下天盃、勾當内、有故障之故也、侍酌、

〔實隆公記〕

九

三月三日、己酉、陰、桃花佳節幸甚々々、○中今日於北御所有

猿樂云々、予今日不出仕、

尊敦親王、日次著到和歌ヲ御張行アラセラル、

〔言國卿詠草〕

○圖書寮所藏

三月四日、二宮御方御著到番之時、

山霞 ささゆへ 山乃さうちまら雪よいまを春へとあは霞うさ

柳 吹風よ さちくる浪のうさるりと河邊みなひくさし乃青柳

栽花 軒ちうくう 流しうへり、以久春此色をさくらの花よみるへ

苗代 小山田 よ春の日なうくまめをへそまはうひるなく水やさくらん

葵 い うなまハ神のを山のいくときを二葉よおふるあふひなるらし







三條西實  
隆御諮  
問アラセ  
ラ

宮々御參

當座和歌  
御披講  
七條龜大  
夫諸フ  
能樂

大炊御門  
信長山  
院政長等  
モ召サセ  
ラル

甘露寺親  
長父子モ  
召サセラ  
ル  
歌題花有  
喜色信量  
讀師

文明十八年三月四日

朝臣等雜訴事被仰下旨在之不能記

四日<sup>庚戌</sup>宮門跡及ビ廷臣ヲ召シテ酒饌ヲ賜ヒ又當座和歌御會ヲ行ハ  
セラル

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫記録甲二十七所收

三月四日、冬ふハ御ちよよて御所

入<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>いらる、御ふと御所ふしと殿御むる、めう不<sup>レ</sup>院殿、あんきん寺殿御ふと所をう殿、きんき、萬松御ふいり、竹のうち殿ハ御ふいりなし、大しやう寺殿も御むし孝とて、御ふいりなし、まつハあうさわりて、御くまいしと<sup>レ</sup>りうさま<sup>レ</sup>られてひううあり、ハてしうめとゆふうとふのうをあま<sup>レ</sup>させらる、御うはらけの物よて御ちう月ら、く御もら、御ちう月のといよて、く御此御しやくなり、お母井のみくと、花山院、くまにしゆ寺、うの不<sup>レ</sup>ハ内々のおとことのこらすまこ、めてとし、藤中納言よりあり三<sup>レ</sup>う、御さる二うら、くまんま、うしより御うまらきの物二色一うら、  
〔親長卿記〕<sup>十七</sup> 三月三日、晴<sup>○</sup>申剋許參内<sup>○</sup>次明日可有花御覽、父子可參云々、可祇候之由申入退出、  
四日、朝間雨下、午後晴、參内、有一獻<sup>沙汰也</sup>先有和歌<sup>題花有喜色、有披講、讀師</sup>

講師元長

右大臣<sup>信量</sup>講師元長朝臣也、

各懷紙予取集居文臺<sup>御製在此内、俗中</sup>、女房、讀師著座、召講師、參進讀師、欲取出上臈懷紙、

自下臈可披講之由予入魂、臣下懷紙披講了、申出御製披講、次法中仁和寺宮已下、次女中歌披講之<sup>講讀師退入、後予取之</sup>、退入閑之、書年號月日了、依仰也、

〔實隆公記〕

<sup>九</sup> 三月四日、庚戌、雨降<sup>○</sup>、依兼日之仰、午後參内、有和歌御會、

當座一首懷帑也、題云花有喜色、於朝餉間披講之事之儀似嚴重、但反數、親王、大臣猶一反也、親王御方二反、御製三反也、先公卿殿上人懷帑至御製、次法中、次女房懷帑也、講頌散々計會者也、此後可有猿樂之逸興之<sup>□</sup>、以外被相念、其儀仍反數以下如此省略、勅定之不可爲後例哉、莫言々々、御人數御製親王御方、式部卿宮、右大臣<sup>讀師</sup>、内大臣<sup>時</sup>、源大納言、按察<sup>講俊量</sup>、兵部卿、新中納言<sup>懷帑不</sup>、下官、滋野井前宰相中將、民部卿<sup>不候</sup>、源宰相<sup>發聲</sup>、山科宰相<sup>不候</sup>、座、文地丸、元長朝臣<sup>講師</sup>、重經、賢房、在數、源富仲<sup>以上懷帑、不及講頌</sup>、法中仁和寺宮、妙法院宮、就山、宗山、女中、舊院上臈、勾當内侍、

勸修寺大納言、權中納言、依遲參不獻懷帑、事了地下歌舞、小兒盡其妙、言語道斷、無比類、諸人感慨無極、天酌及侍臣之後退出、于時初夜鐘動程也、

文明十八年三月四日

二五五

人數

發聲綾小路俊量



〔言國卿詠草〕○圖書寮所藏

山科言國和歌

同四、禁裏御當座懷帟  
花有喜色 かきりな花春をち發りて九重此花よ千とせ乃色やうふらん

勝仁親王、三條西實隆ヲシテ、十炷香ノ簡ヲ書カシメラル、

禁裏ノ分ヲモ書ク

〔實隆公記〕九 三月四日、庚戌、雨降、十炷香簡十具親王御方仰之、書之、同禁裏五具

染筆了、

○勝仁親王、實隆ヲシテ、御扇ニ和歌ヲ書カシメラル、コト、便宜左ニ合敘ス、

〔實隆公記〕九 五月四日、戊申、霽、入夜深雨、今朝自親王御方被下御扇、可書

勝仁親王戀歌ヲ書カシメラル

進白地戀歌之由也、則染筆花宴卷、深夜乃哀、拔知毛書之、

五日、亥、辛小弓アリ、

道永法親王覺胤法親王御人數

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記 三月五日、御むろ、めう、不う、ぬん殿入、い、らせられて、す、し、め、こ、ゆ、と、あ、そ、と、せ、

〔實隆公記〕九 三月五日、辛亥、晴、晚頭參内、於黒戸被遊小弓、

○コノ後、小弓ヲ行ハセラル、コト、便宜左ニ合敘ス、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記 四月一日、○中、せ、し、め、こ、ゆ、と、あ、そ、

四月一日

雨ふる、神ととなる、

ハセ、御さう月いつをのとし、

五日、○中、御せしめこゆとあそとせ、

六日、三の宮此御うとなる、すしめこゆとあそハセ、

十日、○中、御せしめこゆとあそハセ、

（前書）御さう月らら、

十二日、ふしと殿御むろ御り、すしめこゆとあそハセ、上らぬ、新せけ殿、

新大を御てうしとも、い、らせらる、

十八日、○中、ひるせしめこゆとあそハセ、

五月四日、すしめこゆとあそハセ、せんき、せんきう御り、源大納言、（教國）、

の井、源少將、まてのこうち、左衛門すけ御人、せ、なり、あふき御さうふよとせ、

くもちて、あ、こ、う、あ、り、い、つ、の、御、ま、け、り、さ、と、や、ら、ん、と、て、宮、の、御、う、と、せ、

い、ひ、し、く、と、ら、ら、

八日、（る、い、）、せんき、せんきう御り、すしめこゆとあそとせ、

十四日、○中、せしめこゆとあそハセ、宮の御り、二の宮、せんき、せんきう、

六月四日、すしめこゆとあそとせ、せんきう御り、頭辨權のせけもめ

文明十八年三月五日

二五七

第三皇子仁尊御參内

邦高親王道永法親王御參内  
宮女酒饌ヲ獻ズ

五月四日  
人數

六月四日  
人數



文明十八年三月六日

二五八

す、御ゆつけ御まへよてよふ、

六日、子前豐後守護大友政親、同國田北村ノ地ヲ、賀來八幡社ニ寄進ス、

〔柞原八幡宮文書〕五 ○豐後

奉寄進

賀來社八幡宮社

豐後國田北之村内惣領分駿河守親載天友跡之事、付社用事書并坪付別紙有之、

右意趣者、爲天下泰平國家安全也、至盡未來際、於吾子孫不可有轉變之儀條、仍狀如件、

文明十八年丙午三月六日

源朝臣豐前守政親天友花押

大友親載跡

社用事書  
初卯新供  
常燈明  
一心經會再興

- 田北之村内新寄進事書條々、
- 一 每年正月初卯新御供可奉備事、付初卯三ヶ日内有者、次卯日可用調備之趣、可爲舊規儘事、
- 一 三殿御寶前新常燈明之事、
- 一 一心經會再興執行之事、

〔花押〕

大仁王經會再興  
以上ノ殘  
ヲ修理料  
ニ宛ツ

寺社人足  
定夫

- 一 大仁王經會再興執行之事、
  - 一 造營料者、右之以殘可加修理事、
  - 一 彼寄進地之内、至寺社者、土貢以下大小任先例、某所可爲受用當社之事、可用檀方者也、彼寺社人足仕之事、當社御造營時計可雇之事、
  - 一 新寄進地之内住役百姓等定夫之事、
- 社内毎日無油斷可致掃除仕、至在陣之時、爲國役雇可申事、
- 右守寄進狀事書之旨、當社中以一味同心之儀、末代無懈怠可被抽丹誠者也、

文明十八年丙午三月六日

賀來社

七日、丑勝仁親王、和歌ヲ詠ゼラル、

〔柏玉集〕下 春逢戀

文明十八三七

これも又いづよわかれん折しもあきともにあそれむ春忠情ハ  
うらみ月のこしてうそむらん泪もあそれともよこるよを

義尚、三條西實隆ヲシテ、連歌發句ヲ撰進セシム、

〔實隆公記〕九 三月七日、癸丑、雨降、○中略、義尚、實隆ヲシテ、撰歌合ヲ書寫

文明十八年三月七日

二五九



文明十八年三月八日

二六〇

ノ條ニ入夜連歌小短冊被下之可勘發句之由被仰之、二階堂奉書也、不辨子細之間、如何之由問答、

○義尙、中院通秀ヲシテ、發句ヲ撰進セシメ、又題ヲ送リテ和歌ヲ詠進セシムルコト、便宜左ニ合致ス、

〔十輪院内府記〕

中

三月八日、猶陰、自室町殿給小短冊、連歌發句可撰進云々、

義尙中院  
通秀ニ連  
歌發句ヲ  
撰進セシ  
ム

九句撰出

々、付句計也、仍申入之由二階堂奉也、及晩重而可被用發句之句可撰出云々、

九日、晴、發句分九句撰出之、別包之、付進二階堂了、留守云々、

四月七日、入夜自大樹題到來、即進之了、御使伊勢、申次土岐小桓云々、

六月十日、自室町殿一首題、短尺也、對面、御使西郡也、以長氏進上之、

八月一日、略○中自武家題給、即詠進、以久任進上之、

八日、甲寅本願寺兼壽、如蓮河内出口ヲ出デ、紀伊ニ至ル、

〔鷺森舊事記〕 乾 二度蓮如上人御下向事

如斯志、冷水乃道場成就しけり、了賢上洛して、今一度の御下向を願奉ふよし申けりとも、蓮如上人文明九年の冬の頃より、山科御建立より月日を送り給ひきり、其事ともなく志、打過るるに、文明十五年まで、山科御

了賢ノ請  
依リ遊  
行ニ

和泉海生  
寺ニ宿ル

紀伊長尾

川邊

岩瀬

鳴神

堂成就しきり、了賢望み、満ちて、文明十八年の春、山科より思召立給ひて御遊行あり、

文明十八年三月八日、出口より境の濱へ出そなり、それより七里をり有和泉國海生寺といふ處に、境より船に乗そ一宿し、明くる九日といふ朝立そ、海生寺といふ池のあゝ宮あり、かきを一見志するは、是非なくおもしろさかきりなし、その池のそいを見そ、

和泉なゝ志、その池を見るからにこゝろすみぬ、海生寺の宮と打なうめ行ほと、紀伊國長尾といひし所へ立寄るさふ、あゝし不とよ、そのあゝり近き所よ、河なへとろやいひし河水遠く流き、れは、それを見そ、かくおをひ、けきり、

河なゝの瀬々の浪を、水高く遠く吹れてなりふなりきりとおをひ、此ら祿侍し、誠こゝろを、あうしくおをひ、なうら、は、き、然間長尾乃權守、いひし俗人乃在所へ立寄るすみそ、それより又岩瀬といふ所よ、一夜となり行そ、あくれ、十日降、いそき行不と、鳴神といふ山を見そ、そよより田志り濱をとをり、御かつら峠へ乃ほり、それを一見志、心

文明十八年三月八日

二六一



文明十八年三月八日

二六二

ようかふまゝ、

かけそ見む御かつら山の峠かな

こゝろ乃うちにおをひ、又その道すから装束松とて、松本宮たちふそ○蓮如上

人文帖外ニハ、松も、有るを見る、四五本立てトアリ、

きて見れハ装束松の御前かな

とおをひはしけ、それより歩ましに、不となくそや紀三井寺へまいり、

法施禮拜致しそ、下向道におをむき、ゆらまゝ、（九）をすらひ行不せふ、黒石

濱といふ處ハ出まきり、それより船に乗りて清水の浦をなうぬ、こきゆき

されハ、中々こゝろも詞もおよハきぬ、おをしろき事さハまりなし、されハ

餘り乃事ふかく（そ九）はら祿なり、

音ふさく清水の浦に船に乗りそ岩間かくれ見ゆ多嶋々

と詠しそ、まはらく船の内ふそなうめけきハ、やうく、時もうはりぬきハ

とて、それより坂十八町をかりあうり、藤白峠へそのほり、四方乃氣色を見

まさせハ、心のうちよかく（そ九）思ひはしきる、

藤白乃山や小嶋をなうむれをせ、布引乃まろき濱松

紀三井寺  
=参詣  
黒石濱  
清水浦

藤白峠

とかやうになうめ、暫あまそやそみさる不とこ、日をやうく、西乃山蒸間  
ちうく見へけきハ、○蓮如上人文帖外ニハ、さてしもある、思へとも、そや清  
水浦までまゝかへりくとりさる、思外此所一宿す、されハ其夜又如此はし  
けなり、

此嶋は名残をおしみまゝかへり月をろともあらず夜をから

さゑ不と十一日早旦に清水浦を出ぬれば、名残（はカ）な旅あゑこゝちよそ

思ひはしける、

まき出ぬ清水の浦を今朝ハそやなうめて歸ゑあとのこひしさ

と言せてし、そゑく見おく道すからををひ出まなり、然間やうく、

いそくまゝに、音こさく吹井乃浦といふ所は此き侍りき、それより一宿して、

其夜ハいまゝ八の鳥の音をさうぬさきより、祿ふりさめそ船に乃ゑ

へきこゝちにそあましほとふ、又すてかてらにうやうよそ、

和泉な多吹井乃浦の濱風ふ船こき出ぬ旅のあさたち

とうちなうめ、海上をるうに漕渡り、ほせなく境の濱は此さふなり、

文明十八年三月十四日記之、已上、此御眞筆、始ハ在洛陽順興寺、

文明十八年三月八日

二六三

堺ノ濱

吹井浦







淨德教寺 在于同鄉山田村 同宗同寺末開基始祖釋善慶、文明年中建之、本尊裡書云、方便法身尊形、大谷本願寺釋蓮如在判、文明十八年丙子十二月廿八日、飛驒國白川善俊門徒、同國大野郡山田願主釋善慶、

〔飛州志〕

七 寺院 吉城郡

憶念教寺

在于同鄉保村

東本願寺宗、同宗高山光

曜山照蓮寺末、開山始祖釋善性、文明年中建之、本尊裡書云、方便法身尊形、大谷本願寺釋蓮如在判、文明十八年丙午十二月、飛驒國白川善俊門徒、同國富安郡向小島保願主釋善性、按スルニ、當州ニ於テ富安郡無シ、是富安郷ヲ誤レル也、富安郷モ今向小島ハ此邊ノ舊稱也、同郷信包村ニ向小島ノ城跡ト稱スルアリ、古昔姊小路家ノ居城タリ、

十日、丙辰越後守護上杉房定ヲ相模守ニ任ズ、

〔御内書案〕

受領事任相模守候、可得其意候也、

文明十八年三月十日

上杉相模守殿

就口宣案之儀、太刀一腰、景則、馬一疋、鹿毛、鳥目貳萬匹到來、仍太刀一振、季次、金欄一端、淺黃、竹、盆一枚、堆紅、遣之候也、

十二月十一日

上杉相模守殿

就受領之儀、太刀一腰、國行、馬一匹、栗毛、鶯眼三萬匹到來、神妙候也、

十二月廿九日

上杉相模守殿

檮十荷、鵲三、菱喰十、海鼠老十、鮭十、鹽引十、波羅々子三桶、棗一箱、胡桃一箱、鳥目五千匹、蠟燭百挺到來了、目出思食候、猶貞宗可申候也、

同日

上杉相模守殿

〔後法興院政家記〕

十一

九月三日、乙晴陰、略、中自上杉相模守房定許有音

信、付書狀於筑後守長泰、鳥目貳千疋進之、勅許受領間、爲其禮遣處々云々、使僧來間令

文明十八年三月十日



文明十八年三月十日

二六八

房定近衛  
政家ニ用  
脚ヲ贈ル

政家書狀  
ヲ宗祇  
トス

對面、依爲上杉藤氏末流、自勸修寺家、就藤家嫡々令崇敬此家門之儀、依此儀  
先年余當職中、吉田神主兼俱卿任申請、彼社頭造營奉賀事、上杉許江遣愚狀  
訖、吉田兼俱、山城神樂岡ニ齋場所ヲ造營ス、其時萬疋進奉加、追又可進用  
途云々、愚狀返報去年二月到來、其時鵝眼三千疋進之、自此方遣盆香合了、  
八日、庚晴、略、中上杉相模守返事、今日書遣了、遣太刀、吉家、  
廿七日、己陰、朝間雨一滴、宗祇上杉知己間、以愚狀有仰遣旨、當時連歌師也、爲  
出家之身間遣直狀、カキタシ也、  
就上杉相模守受領之儀、不思懸音信芳志之至、悅思給候、兼又吉田社造營事、  
先度返報次可申下候之處、令忘却候、入眼候之様、連々可被加芳言候、神慮定  
可有感應候、彼是以便宜可然様傳達候者、可爲本意候也、

九月廿七日

御判

表書  
種玉庵へ

廿八日、庚午、晴、宗祇爲書狀之禮來、令對面、

○房定從四位下ニ敍セラル、コト、其時ヲ詳ニセズ、姑ク左ニ附收ス、  
〔宣胤卿記〕拔書 永正五年八月六日、義明、大内四品禮事、先年上杉四品之時、余

房定從四  
位下ニ敍  
セラル

上卿、馬代千疋太刀送之、自越後雜、其後赤松四品歟、上階歟、以其例歟、今度中  
納言上卿也、可入魂之由申遣右大丞、

〔兩上杉系圖〕

房朝

房定 兵庫頭、越後守、實清方一男、相模守、從四位下、  
號長松院、法名常泰、明應三年十月十七日卒、

○下毛野武弘ヲ越中守ニ任ズルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔田中教忠氏所藏文書〕四

上卿中御門中納言  
文明十八年八月一日 宣旨

下毛野武弘

宣任越中守、

藏人右少辨藤原家幸 奉

十一日、丁巳、御祓

〔御湯殿上日記〕

京都御所東山御文 三月十日、中、又の日此御せらへ

略

十一日、中、御やうのうみよハ、御よんきやうと御ちて物ろひていとさる

文明十八年三月十一日

二六九

下毛野武  
弘ヲ越中  
守ニ任ズ

人形及ビ  
撫門有宗



文明十八年三月十二日

、やうて返り、

十二日、戊午賀茂社祝重脩ヲ罷メ、同社權祝重則ヲ以テ之ニ更フ、

〔親長卿記〕三十 傳奏奉書案

權祝賀茂重則縣主宜轉正祝、可令宣下給之由、被仰下候也、謹言、

三月十二日

親長

藏人辨殿

重脩辭退

〔親長卿記〕十七 三月十二日、晴、賀茂祝重脩縣主連々辭退、仍權祝重則縣

主所存相尋之處、可存知云々、仍奏聞勅許、

○幕府ノ執奏ニ依リテ、賀茂社權祝重則ノ官職ヲ停ムルコト、十四年

九月十七日ノ條ニ見ユ、マタ賀茂貞久ヲ左京大夫ニ任ズルコト、便宜

左ニ合敘ス、

〔親長卿記〕三十 傳奏御教書案

正四位上賀茂貞久縣主宜任左京大夫、可令宣下給之由、被仰下候也、謹言、

五月廿三日

藏人辨殿

賀茂貞久  
左京大夫  
任ズ

幕府、本郷政泰ニ、若狹本郷及ビ越中米田保等ノ地ヲ返付ス、

〔本郷文書〕一

若狹國本郷、除本郷藏人知行分、越中國米田保等事、被返付訖、早如元可被領知之由、  
所被仰下也、仍執達如件、

文明十八年三月十二日

松田數秀 對馬 守(花押)  
飯尾重運 左衛門尉(花押)

(政泰) 本郷宮内少輔殿

〔本郷文書〕六

越中國米田保事、被返付本郷宮内少輔政泰訖、早可被沙汰付政泰代之由、被  
仰出候也、仍執達如件、

文明十八 三月十二日

數秀(花押)  
兼連(花押)

守護代

去渡狀

若狹國本郷、除知行分、越中國米田保事、被返付本郷宮内少輔政泰畢、可被去渡之

文明十八年三月十二日



文明十八年三月十二日

由被仰出候也、仍執達如件、

文明十八年三月十二日

數秀花押  
兼連花押

本郷藏人殿

若狹國本郷除本郷藏人行分事被返付本郷宮内少輔政泰訖、早年貢以下、如先々可致其沙汰之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十八年三月十二日

數秀花押  
兼連花押

當所名主沙汰人中

越中國米田保事、被返付本郷宮内少輔政泰畢、早年貢已下、如先々、可致其沙汰之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十八年三月十二日

數秀花押  
兼連花押

當所名主沙汰人中

〔本郷文書〕 三

從御本所様預御書候、畏而拜見仕候、仍就本郷宮内少輔知行分事、御懇蒙仰候、不存疎略申付候、此趣可然様御披露奉憑候、委細之旨、寺井伯耆守申候、恐々謹言、

文明十八年卯月四日

宗勳(武田國信)花押

吉田民部大輔殿進之候

○幕府重ネテ、政泰ニ本郷、米田保等ノ地ヲ返付スルコト、七月五日ノ條ニ見ユ、

義政、西芳寺指東庵建立奉加ノ爲メ、住持坐公文ヲ出ス、尋デ、同庵造立事始アリ、

〔蔭涼軒日録〕二月十日、自昨暮天降雨、曉來快晴、中堀川殿曰、昨日西芳寺出官、持向上關額謁此御所、其次曰、建立指東庵、安開山國師像者可然、雖然、寺家無力之故、不叶也、坐公文事御寄進有之者、建立之事可成云云、以此分達上聞、定自寺家可白愚、未否云云、愚云、未、

文明十八年三月十二日

二七三

武田國信書狀

指東庵ノ建像セント安石ヲ置ス

二七二



坐公文十通

十二日、不參、天氣快晴、○中西芳寺住持明岩和尚來云、爲指東庵建立坐公文事、以內義白東府、則御領掌、然者可白沙汰之由見督之、三月十二日、天晴、○中齋罷謁東相府、○中又西芳寺指東庵爲造立、公文十通御免之由有命、以此例雖有相望方不可許容、開山道場事者、不可准自餘在所云云、件々傳台命於鹿苑、十三日、不參、天晴、召西芳寺出官、奉加坐公文十通御免之由、昨日被仰出、傳其命、

四月十日 事始

等儀相國寺坐公文 梵舒建仁寺坐公文

四月十三日、天氣快晴、○中浴後謁東府、○中又西芳寺指東庵依御奉加、今月十日事始勤之、○中件々以堀河殿白之、十七日、天降雨、齋了謁東相府、○中指東庵御寄進、相國寺坐公文等儀西堂、同梵舒西堂建仁寺坐公文、○中以書立伺之、愚白、相國寺坐公文事、雖爲御停止、等持寺前住除相國寺、別之寺公帖拜領無其例、殊等儀西堂等持寺前住之頭云、西芳住持法眷之故、以一段之儀有御免者、住持可爲面目、不可爲以後之例之由白之、然者雖爲御停止、御免之由有台命、廿二日、天快晴、齋了謁東府、○中等儀西堂相國寺坐公文、西芳寺御寄進內、○中

義向得樾 坐建長寺 望公文ヲ

義政諸寺 院寄進ノ 外坐公 文ヲ出ス

略兩通御判事將伺之、依連日御痛飲御寢、女中衆亦皆醉臥、以故徒歸矣、廿三日、天快晴、以椋子白、○中西芳寺指東庵御奉加、相國寺坐公文等儀西堂、○中公帖御判事、堀川殿御白次也、兩條皆傳鹿苑院、廿四日、天快晴、○中謁東府、梵舒西堂建仁寺坐公文、指東庵御寄進內、○中御判白之、十一月廿四日、不參、天快晴、○中自室町殿得樾西堂建長寺坐公文事被仰出、蓋自大館彈正少弼殿召僧被渡其書立、廿五日、不參、天晴、○中遣椋子大館彈正少弼殿云、昨日真如得樾西堂建長寺坐公文事、以書立自室町殿被仰出、雖致披露、去八月廿四日、梵棟首座景德寺坐公文事、自室町殿御白東相府、其時東相公曰、諸寺院御寄進之外坐公文事、雖爲堅御禁法、此事者自室町殿始而御白之條、此一通許事者可有御免、於以後御白有之者不可有盡期、縱自何方白、不可有御許容之由、可自室町殿之命有之、乃謁室町殿、以今御乳人傳台命、則以後事委曲御心得之由有御返答、今又如此被仰出事如何、以前自東府被仰出之時宜御失念歟、不然者今御乳不被白達歟、於愚披露事難義之由、愚所白懇々御白可爲素望之由白之、少弼



公他適傳命於奏者

廿七日不參天快晴○中齋了遣椋子於大館彈正少弼殿宅云得樾西堂建長寺坐公文事一昨日奏者所白置被達上聞否少弼殿云未達之若重而被仰出子細有之者可白云云

慈廣圓覺寺坐公文

十二月廿日天快晴○中早且謁東府○中西芳寺御寄進內圓覺寺坐公文慈廣西堂書立以堀河殿白之

廿四日不參天氣朦々不晴不雪不雨○中慈廣西堂圓覺寺坐公文○中御判被遊

得樾建長寺坐公文

十二月廿八日天快晴○中齋罷謁東府○中建長寺坐公文得樾西堂西芳寺御寄進內○中御判被遊

周韶臨川寺坐公文

十九年四月五日天洒雨○中遂謁相府西芳寺御寄進臨川寺周韶西堂景德寺壽昭首座○中以書立伺之及歸以丹贈鹿苑院

壽昭景德寺坐公文

十六日天快晴○中齋了詣東府○中西芳寺御寄進臨川寺周韶西堂同景德寺壽昭首座○中各公文御判被遊

立柱上棟日取

廿四日天快晴○中晡時謁東府○中指東庵立柱上棟之日取來廿九日己亥

義政舊ノ如ク建テシム

辰刻在通擇之供台覽相公曰不違舊規可建立之命有之

廿七日不參天快晴○中略義政鹿苑院ニ愚亦白○中指東庵事不相違舊規可令建立之由白之有御歡喜色

守瑞真如寺坐公文

五月五日天快晴齋罷謁東府○中西芳寺御寄進真如寺守瑞西堂○中以書立供台覽

周派建長寺坐公文

十六日天快晴○中齋罷謁東府○中周派西堂建長寺坐公文西芳寺御寄進妙島首座景德寺坐公文○中書立供台覽

妙島景德寺坐公文

廿七日天洒小雨○中遂謁東府周派西堂建長寺坐公文妙島首座景德寺坐公文○中御判被遊上二通西芳寺御寄進

十通分ニテ尙不足ナリ集證ニ依リテ更ニ公帖ノ寄進ヲ請ハントス集證論シテ内儀ヲ以テ請ハシム

六月十三日不參天氣快晴○中齋前西芳寺住持明岩和尚來云指東庵御寄進公帖十通事行矣雖然不足造立料重而十通可白沙汰之由被白愚云坐公文事已前以伊勢守德雲院御奉加之事被白之相公曰雖爲御停止伊勢守白請之條有御免以後自何方白不可有御免之由被仰出其後自室町殿雖被仰出難披露白之由返答白之間只今重而白事不可叶已前以內儀被白條又以內儀被白之可然萬一有御尋之儀可心得白○中西芳云然者以內儀可致調







聖榮建長寺坐公文

聖福公帖事說破之、且云、鹿苑侍衣話云、檢公文帳、則聖福前往廿四五員有之云云、檢愚所記置公文帳、聖福公帖四通有之、

延德二年閏八月九日、天快晴、○中自院新住持書立有之、書立云、○中

西芳寺御寄進建長寺坐公文、聖榮西堂、○中

延德二年閏八月九日

景文判

鹿苑院

此書立供台覽、

十日、天快晴、○中又西芳寺御寄進公帖十通、終於聖榮西堂、自西芳寺所記之一番葉室公一見之、

廿七日、天快晴、○中聖榮西堂建長公文錢一緡、自西芳寺到來、茂叔取次之、

九月十六日、早旦、喫赤雲謁相府、天洒小雨、○中又西芳寺指東庵造畢、仍指東

庵、惜烟、湘南亭之三額、已前者開山國師御筆也、這回者相公被遊者、可然萬一

相公不被遊、命誰人可令書乎、近代之額大半橫川筆之、可爲上意云云、御返答

曰、彼三額皆可被遊、調番可有進上云云、

十三日、己未義尙、正親町三條公治ノ推舉ニ依リ、畠山義就ノ罪ヲ宥シ、同

指東庵造  
舉材指東  
義烟亭  
湘南亭  
額ヲ書

政長ニ内  
書ヲ下シ  
義就トシ  
和セシム

政長ト和セシム、政長及ビ細川政元、命ニ應ゼズ、尋デ、政元上洛シ、公治第ヲ襲ヒテ之ヲ火ク、

〔長興宿禰記〕三月十三日、己未晴、○中畠山右衛門佐義就有赦免、

於河内被下御内書、於○中政長朝臣、同日被下御内書、右衛門佐

和睦、可開陣之由被仰出、東山殿被申合、世上爲無事、被仰出云云、但管領無領

掌、可歎申之由、於細川九郎方遣書狀、可有披露被申上、依是細川與左衛門督

同意、不可應上意之由、有其沙汰者也、後日條々有其說、兩人和睦之儀、左衛門

督不被從上意、種々於東山殿、被申所存、細川九郎同心不可○中事

三條大納言公治卿○中ノ貞陸爲申沙汰、○中義就御芳○中

所行之由、左金吾細川九郎被申觸歎、仍誰々有雜說者哉、

廿日、丙寅晴、今日聞○中畠山右衛門佐御免、世間有雜說、○中國丹波攝

津四國群勢、被○中輩且上洛、三條亞相、伊勢兵庫助○中身之由、有其沙

汰、兩人於細川方、不存知之由、被陳云々、

四月三日、戊寅晴、今夜半更三條大納言○中卿第燒亡、夜打數百人亂入、放火、亭

主亞相被逃去、翌日坂本下向云々、誰人所行哉、不知之、畠山右衛門佐御免事

丹波攝津  
等ノ兵上  
洛

公治近江  
坂本ニ下  
向



義就義政  
及三萬足  
ヲ進ム

政元義就  
ノ上洛ヲ  
相支ヘン  
トノ風聞  
義尙義就  
上洛ノコ  
ニトヲ義  
執成ス

政元公治  
第ヲ火ク  
公治父子  
難ヲ逃ル  
伊勢貞陸  
義就ヲ執  
成ス家  
近衛政家  
使者ヲ以  
ビ三公治  
西及

文明十八年三月十三日

二八二

申沙汰之間、彼敵方輩所行歟、由其說如何、去月右衛門佐於東山殿并將軍御所爲御禮三萬足、腹卷一兩各進上候由、有其沙汰、

〔後法興院政家記〕

十一 三月十二日、戊午、晴、近日自河州畠山右衛門佐可上

洛之由、頻有世聞、與左衛門督和陸事、自大樹雖有計略、左致長、左金吾不應武命之間、

推而右衛門佐ヲ可被召上云々、改元、細河可相支之由、有其沙汰、抑右衛門佐上洛

事、就來七月大將御拜賀事、義尙、右大將拜賀ノコト、十七年八月二十八日ノ條ニ收ム、任先例、諸大名可

令供奉間、右衛門佐一揆東國大名等可召上之由、頻致訴訟間、大樹東山殿、江

被執申云々、河州之儀三條亞相内々申入大樹歟之由有風聞、

十六日、壬戌、晴、略、傳聞、去月晦日有幡雲云々、占文病事兵革云々、可恐々々、

四月一日、丙子、夜來雨時々下、未刻雷一聲、略、今日細河攝津國勢上洛云々、物

忿之儀可出來歟、巷說滿耳、

四日、己卯、晴、去夜丑刻許異方有火事、時聲兩三度揚之、今朝委細相尋之處、號夜

盜、自細河邊推寄三條宿所、令放火云々、亞相父子自閑所逃出云々、是彼卿依

右衛門佐赦免之儀、命之、申沙汰入夜打云々、伊勢兵庫同依爲申沙汰之人數、

今夜可發向之由、有雜說云々、就火事三條亞相竝侍從黃門許へ遣使者、

實隆第ヲ  
見舞フ

義尙實隆  
ヲ招ク  
實隆之  
重ネテ  
クモ應  
ズモ書  
下シテ  
テ問ハ  
セラル

公治ハ伊  
勢貞陸第  
ハ其子第  
實隆ヲ避  
クニハ難

實隆勸修  
寺宿文第  
書等預ク

五日、庚辰、晴、世上浮說滿耳、

〔實隆公記〕

九 三月廿二日、戊辰、晴、向東隣、世上巷說驚入之由也、不能勒筆

端、

廿四日、庚午、天晴、略、今夜巷說、仍向東隣、無殊事、珍重々々、

廿七日、癸酉、晴、齋藤兵衛尉、細川、一條亞相、師富朝臣等入來、世上雜說各所相

談也、只仰蒼天而已、及晚自室町殿有召、二階、雖然故障間不參、非無恐怖、

廿八日、甲戌、天晴、略、今夕又自室町殿有召、猶故障之由申入了、

廿九日、乙亥、晴、略、入夜女房奉書到來、東隣虎口事被尋下事也、則令傳達、畏

入之由申入了、

四月三日、戊寅、晴、陰不定、略、抑今夜丑下刻、東隣放火、猛勢襲來、揚時聲、言語

道斷、此間之次第不堪、勒筆端矣、亞相天明之後、向北白河伊勢許云々、自彼下

向坂本云々、少將女中等來予方、此亭遁火難之條、希有之冥加也、殊無凶賊之

難、每事無爲、神妙々々、諸篇難盡筆端、卷而懷之而已、

四日、己卯、晴、自早旦所々人々來臨門前成市、相訪憂喜之兩端、頗惘然、不辨東

西之式也、今夜猶依怖畏之儀、向勸修寺一宿、致國、滋野井同道之、室家兩兒等同向

文明十八年三月十三日

二八三



彼所、文書等頒預所々了、  
 五日、庚辰晴、早朝歸宅、佳例樽代遣勸修寺了、今夜當番參候、晝間不參、滋野井  
 同道、於御前種々有仰旨、於勾當局有盃酌事、  
 六日、辛巳晴、今夜又向勸修寺、  
 七日、壬午晴、略○中、今夜又向勸修寺、東向被送樽、  
 八日、癸未晴、宿勸修寺、  
 九日、甲申晴、同前、  
 十二日、丁亥晴、室家白地入來、及晚是心院、當陽院携樽來臨、各賞翫、入夜又向  
 勸修寺、  
 十三日、戊子晴、所勞無術之間平臥、服良藥、室家被歸來、今夜宿此亭、  
 十四日、己丑、寶林院入來、今夜宿此亭、  
 十五日、庚寅晴、當番、依所勞晝間不參、入夜參入、抑在通卿一荷兩種送之、謝遣  
 了、一樽遣、一樽左大臣許了、  
 十六日、辛卯晴、略○中、抑今日羽林爲遁暫時之厄、罷向北灘邊云々、遣送入了、  
 十八日、癸巳晴、略○中、及昏之間向勸修寺一宿、於左大臣方有一盞、

實隆公治  
訪坂本ニ

奉公衆武  
裝シテ幕  
府ニ參集ス

十九日、甲午晴、今朝瘧病氣出來、仍平臥、不及歸宅、寓勸修寺、元慶入來與良藥、  
 廿日、乙未、雨降、早朝歸宅、今日依所勞不參番、晚頭兩兒室家等自勸修寺歸來、  
 珍重々々、世上如今者不可有殊事歟、珍重々々、  
 五月十二日、丙辰晴、今日爲令下向坂本、先向上乘院誘引羽林、於彼坊被勸一  
 盞、午後刷鞋翼申下刻下著坂本、亞相對面、談世事等、頗如夢中者也、今夜彼旅  
 所之近邊寺中一宿了、羽林滋野井等合宿、月下盃酌等有興、  
 十三日、丁巳晴、於亞相旅亭朝飧請伴、甘露寺來會、午後趣歸路、晚刻歸畢、窮屈  
 過法者也、

〔十輪院內府記〕

中 三月十日、略○中、後聞、入夜武家奉公衆面々、帶兵具參大

樹云々、

四月一日、略○中、攝州勢盡員上洛、登矢倉見物了、  
 二日、雨降、略○中、攝州勢上洛云々、  
 三日、略○中、入夜有燒亡、三條大納言宅云々、押寄多勢放火云々、畠山沙汰歟、讀  
 人不知之體也、凡言語道斷也、  
 四日、早且以光任訪侍從黃門、彼宅雖近隣無爲也、訪四辻前中納言、滋野井前



相公不申通云々、訪中山藤中納言等、

〔親長卿記〕

十七

四月四日、晴、今曉押寄三條大納言

公治、許、誰、不知、放火、但、管

右衛門佐義就和睦之事申沙汰也、右衛門佐有御免、仍細川與管、辰刻許詣侍、領申通之故、和睦事難治之由申之云々、仍此故及此事、不便々々、

從中納言言脫許家也、無殊事云々、珍重々々、但猶無由斷云々、中棟久、諸平等縣主

來閑談、三條大納言亭事人々語之、

五月十三日、晴、詣三條大納言旅店、有朝飯、侍從中納言、滋野井前宰相中將等

〔御湯殿上日記〕

京御所東山御文、庫記錄甲二十七所收

四月四日、よへ夜中不とよ、三條大

納言去ゆく所へ、ぬしまらすようち入て火をつくる、風よくてあとりハヤ  
老老

〔蔭涼軒日録〕

四月四日、不參、天快晴、今曉三條殿第燒滅、

九日、不參、天快晴、中今朝鹿苑院主來曰、中又云、世上忽劇、昨夜屬無爲之

由有雜話、

〔大乘院日記目録〕

四

三月十三日、畠山右衛門佐義就御免之御書被出之、

同政長ニ和與早々被仰之、天下珍事出來云々、

伊勢貞宗  
要書ヲ構  
フ松軒等  
萬松軒等  
貴青蓮院  
ニ入ラル  
政長義就  
和睦ノ風  
聞

四月三日、夜三條公治卿亭夜打入之、細川九郎之沙汰、政長引汲之故也、公治  
義就進退申沙汰之隨一也、細川内安富物部存定之由申返事云々、伊勢守用  
害構之萬松軒者入御青蓮院殿云々、各三人物念也、

〔大乘院寺社雜事記〕

百二

正月十日、

一鞍馬圓樂坊牛玉一枚進之、參詣衆各下向、新左衛門下向、色々物語共也、畠  
山和與事、天下及其沙汰云々、第一珍重事也、

三月十四日、雨下、

一中去十日より室町殿御用心在之、近習者也、悉以參御番、如陣姿云々、  
來十九日畠山右衛門佐義就上洛、御免之故也、然者細川九郎又可在國之  
由、及用意歟云々、京都事重而亂可出來歟云々、如何珍事々々、此上者兩屋  
形和與儀雜說歟、

十六日、

一丸入道來、高野參詣下向之次云々、京都儀右衛門助御免必定、細川歎申入  
云々、公方御用心云々、細川方雜物共隱東西云々、左衛門督ト和與ハ一切  
不可計云々、京都珍事ニ成下云々、



文明十八年三月十三日

二八八

一自慈恩院返事到來、狛野庄事可申伊勢守云々、河內事時刻到來不思儀ニ成下、細川歎申入計也云々、

廿三日、

古市澄胤  
義就ノ救免  
禮謝ノ爲  
メ河内ニ  
下向ス

一傳聞、畠山右衛門佐義就御免事、兩御所御内書十三日云々、今日可拜見云々、畏入云々、明後日爲禮古市可下向云々、

廿五日、雨下、

一衛門佐御免事、爲禮古市今日下向河内畢、彼方悅無是非云々、衛門督方同御書十三日被遣之、御返事如何、

廿七日、

義政ノ内  
書ハ十八  
日書向ノ  
内書ハ二  
來十三日  
到ス

一斐舜昨日自河内歸參、古市同道云々、衛門佐御免御内書東山殿十八日到來、室町殿廿三日辰時拜見申云々、畏入、近日清來院長老可上洛云々、重而又具足可進上用意也、近日二兩分盛之云々、今度事悉皆伊勢守申沙汰也云々、御免御書到來以後、又自伊勢守方左衛門督令上洛者、則時ニ右衛門佐可罷上之由被仰出之云々、兩家和與事ハ不可成云々、左衛門督ハ可合戰歟、彼方女房共方々罷出云々、如何可成哉、凡希代不思儀、尙々武家者共

方大未練ニ可成、因緣不可

〔大乘院寺社雜事記〕

百三

四月一日、雨下、

一自慈恩院律師方申給之、攝州奥郡守護代藥師寺三郎左衛門尉昨日可上洛云々、丹波口三郡之衆悉以可上洛之由下知、今月二日三日比可京著云々、今度畠山右衛門佐義就御免事、申沙汰仁進退事云々、色々申事在之、京都ハ何ニ可破之由申、言語道斷儀共也、衛門佐代官八幡邊ニ上、今度御免御禮云々、一兩日中ニ可申入云々、實身上洛事ハ九郎方儀無爲之後云々、所詮此二十年前亥歲應之儀ニ不相替事也、御靈合戰之時事也、于時官領ハ畠山左衛門督也、右衛門佐御免ニより天下破了、

三日、

一越智昨日爲禮罷向河内國云々、岸田ハ不召具、椿井之事故云々、

四日、

一細川方勢共少々召上、則歸陣、京都無殊事、珍重々々、但夜前三條亭武者小路今出也、夜打入了、悉以燒失、自身無爲ニ遁云々、自細川方之所行云々、右衛門佐御免申沙汰之隨一之故歟、於于今者天下可破之由申云々、今日古市越智

文明十八年三月十三日

二八九

攝津守  
津左衛門  
代郎上洛  
門尉

越智家榮  
禮謝ノ爲  
メ河内ニ  
下向ス



文明十八年三月十三日

二九〇

俄下向河内、自右衛門佐方召下爲談合也云々、三條殿無心元之間、西室ニ音信了、如風聞也、

五日、

一東北院幽讚談義今日結願了、自去月十五日初之、自學侶申故云々、其後聞、興憲營尊兩人左衛門督方祈禱、晝夜之祈念也、依之右衛門佐祈禱之用ニ昌懷宗藝、慶英等申合、併學侶之儀令申東北院讀之云々、凡所爲皆以私之意趣有之、

一竹千代、寬明以下自京都下向、三條事巨細相語、長野被打云々、不便々々、是

心院殿ニ奉公故、近日自三乃罷上云々、去年此邊ニ下向了、

六日、夜大風也、

一契舜、良祐昨日自京都下向、三條殿ハ在北白川、令參東山殿了、伊勢兵庫在所矢倉以下溝在之、率爾不可成云々、京都色々沙汰也、今度左衛門佐御免事、意見三條公治卿、伊勢兵庫、萬松軒云々、

九日、

一京都無殊儀之由申、珍重々々、

興福寺學侶相就分レテ義就分メ長ノ爲メナニ祈ス

義就免陸ノ三ノ人等ノ説

十六日、

一慈恩院律師來、楯一双兩種持參之、今日自京都令下向云々、○中略京都無殊儀、○中略就高山事、伊勢守方物念ハ、今日可落居之由云々、細川方存披歎、萬松軒ハ此題目事無御綺、自細川方伺申事在之、不可有御存知之由返事云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

百六 十二月十二日、

一東大寺法花會講師事、權別當勲仕否事、并當寺僧ハ維摩會講師以前ニ此會講師參勲事、且如何、條々巨細可注給旨、彼寺へ申遣旨、慈恩院申、東室得業ハ豎義理運也、但越中國入善庄、自當年畠山左衛門督押領之間、不可成立之由申云々、左衛門督分國寺社本所領此間無爲之處、當年春夏比より右衛門佐御免事及其沙汰間、此上者背上意歎、然上者有道之儀無益也、如右衛門佐之ニ時分悉以不可沙汰旨、一家一同心故如此云々、寺社本所之不運迷惑事也、

〔政覺大僧正記〕

九 四月四日、己卯、

一昨夜三條殿放火云々、貳百人計ニテ押寄、即體等無爲ナリ、見濃國ヨリ罷

政元幕府ノ處置ニ據ラズ、其分國ノ寺社領ス

文明十八年三月十三日

二九一



上伊勢長野惣領體不思儀打過云々、不便事也、去年梅津是心院御下向之時、令御共在奈良之間、一段不便事也、

一古市河州ヨリ飛却御來テ罷越云々、定而京都儀談合歟、

五日、庚辰、

一寬明竹千代、宗禪下向、三條殿事色々沙汰云々、伊勢守、兵庫在所、毛物云ア

六日、辛巳、

一東門院、因幡寺主、順圓下向、京都事令物語、三條殿事、細川ヨリ沙汰歟、由風

聞ナリ、勢州ヨリ相尋處、不存知由返答云々、彼方勢攝州下郡々、代藥師寺

三郎左衛門罷上、其外丹波勢等罷上云々、今度右衛門佐御免事申沙汰間、

晚少三條大納言、伊勢兵庫云々、兵庫在所ニハ用害等構之、京都儀可爲如

何哉、珍事々々、

十六日、辛卯、

一大納言律師光慶、今日下向來臨、番役ノタメ也、京都儀色々物語、近日無殊

儀云々、

京都ノ風

〔蕉軒日録〕

地 二月十日、雨晴、略中大仙至云、京人告云、京中皆定河府兩家

和睦在近、可喜々々、

十五晴、略中大允韶狀至、京師河府兩家和議紛々、可祝々々、

十六日、晴、略中南京金剛院自正覺而至、求梅花、因知和議之事、其說紛々、

三月十二日、快晴、略中大慈鸚允皆有答書、略中點灯命董侍者揚讀諸答書云、

河府和議京中喧唱云、

十七、略中大仙至云、京師今月十一日新府君細川氏、其間流言紛々、

廿二日、晴快、旭日透窓、朝寒頓止、略中京師萬壽清淨和尚爲河府賀禮南□之

次見訪、府君入京之議已定無、今月細川家三度評定、去十六安富一人出父言、

一族□臣皆同之、雖難カ渠季之今日、猶吐此等言者在矣、吁可記而垂于后代者也、

廿六、略中廷齋說云、濃芟□河府君之貴息、今年廿一歲、有仁者之名、每夜唱念

彌陀號、六萬遍畢、則就寢、以爲近年四海戰死者無數、爲救渠於冥途如此云々、

吁古今豈有此哉、眞仁君之種也、

廿七日、晴、略中京師萬壽清軒和尚自河府歸洛之次、見訪焉、小話即辭去焉、

廿九、晴、略中銷翁早且至、今日赴齋、石屋齋之日也、因話云、細家一兩日召丹

義就入京ノ議定マ

義就ノ子ノ念佛ノ每夜唱念ノ六萬遍死シテ冥福ヲ得ス

政元ノ丹波ノ攝津ノ兵



文明十八年三月十三日

波接津之軍徒於京部

四月六日、略中慈祥至、話及京師忿劇之夏、

七日晴、略中慈祥至、話及京說紛々之儀、略中陳外郎一書至、及京說之夏云、

九日晴、略中同文首座、清淨禾上狀中、件々及此夏、京中忿劇如所聞、三條殿退

居于坂本、伊勢兵庫設城池、防身安危、奈何々々、

廿二日、略中允書記前后書記、索話書相投京中、近日靜謐云々、

〔親郷日記〕四月廿二日、丁酉、

一兵庫殿細川殿へ就物念無爲之儀、御禮御出、御太刀一腰、眞守、御馬一疋、黒

結、雀目

○政長、政元等、義就及ビ其與黨ヲ河内、攝津ニ擊タントシテ、京都ヲ發

スルコト、十四年三月八日ノ條ニ、政元、義就ト媾和シ、歸京スルコト、同

年七月十六日ノ條ニ、義就、政長ノ兵相戰フコト、十五年正月十九日、三

月十七日、八月十三日、九月十七日、十六年六月二十六日等ノ條ニ、義政

及ビ義尙、親ラ義就ヲ討タントスルコト、同年九月是月ノ條ニ、政長、義

就ノ部將等、山城ニ對陣シ、同國住民ノ求ニ依リ、各陣ヲ撤スルコト、十

貞陸城池ヲ設ク

貞陸政元ヲ物ヲ贈元ヲ賀ス

大神宮申文

二宮禰宜等請文

七年十二月十一日ノ條ニ見ユ、

十七日、<sup>亥</sup>大神宮、賀茂社及ビ南都七大寺等ヲシテ、變異ヲ祈禳セシム、

〔兩宮注進狀〕

一太神宮司解申進申文事、

言上任被仰下旨注進、就變異事、公武御祈一七ケ日奉抽精誠間事、

副進

二通 二宮禰宜等請文

右得今月九日御教書并祭主下知僞、自十七日至廿三日、公武御祈可抽精

誠之由事、謹所請如件、者任被仰下之旨、神宮一同奉致御祈禱精誠者也、仍

相副言上如件、以解、

文明十八年三月日

權主典  
主典

大司從四位下、

權大司

少司

大神宮神主

文明十八年三月十七日



文明十八年三月十八日

二九六

賀茂下上社

〔親長卿記〕三十傳奏奉書案  
就變異事、公武御祈、自來十七日至廿三日、一社一同殊可抽精誠之由、可被下知賀茂下上社給之由、被仰下候也、謹言、

三月十四日

藏人辨殿

〔賀茂史綱〕災異 後土御門天皇文明十八年三月十四日、庚申、令下上社行

御祈、依變異也、

廣田社

〔御湯殿上日記〕京都御所東山御文庫記 三月廿八日おふし、はるこ○中ひろとのやしろ

より、へんいの御さとう此御くまにしゆら、

南都七大寺

〔大乘院日記目錄〕四 三月十七日、變異御祈、七大寺等被仰出之、

〔大乘院寺社雜事記〕百二 三月十八日、雨下、

一變異御祈禱事、傳奏奉書到來、則給供目代并七大寺分成奉書了、自昨日至廿三日御祈云々、今日奉書到來了、

十八日、北野社法樂連歌御會、

〔御湯殿上日記〕京都御所東山御文庫記 三月十八日おふし、雨ふる、さとう此ならくよ御

人數

れん歌あり、御人そろち、藤中納言入あう、まゝうの中納言、中御うとの中納言、あまうこうち此宰相、さよくらぬ、さうそく、そうかう、

〔實隆公記〕九 三月十八日、甲子、雨降、依召參内、北野御法樂御連歌也、新王

御方、帥、藤中納言入道、中御門中納言、執筆、下官、姉小路宰相、宗巧、肖柏、源富仲、入夜事了、

御製

勝仁親王御脇

は、淡はしてみるを臺う、藤のさこ、松よりあ淡し春の池水、親王御方、遠山の霞、二月ハうつりきて、帥、

○コノ後ノ北野社法樂連歌御會ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔御湯殿上日記〕京都御所東山御文庫記 四月廿五日、北野、御法らくよ、十

百いんの御れん歌あり、御人そ宮の御うと、ふしみ殿御むる、きんき、萬松、西をんし、お海母のみうと、中の院、そむろ、くまにしゆ寺、ういちうきん、侍從中納言、中納言入道、大くら卿、みん部卿、あ糸うこうちの宰相、中山宰相、中將、新宰相、ふんち丸、まけさるのあそん、と花秋のあそん、うすさう、あまうそ、とこ中、ろうかう、あしたのく、よさしほりて、ひる不とよさる、くとさてさ

四月二十五日、千句連歌、人數

文明十八年三月十八日

二九七



平野社法  
樂百韻付  
行ハルヲ  
義政物ヲ  
獻ズ

執筆者  
各相對ス  
御製執筆  
隆三條西實

せおハしませ、御うゆとみさく、（山科言題）いりて、中不とよく御らる、さて、御てん  
しんよて、御ちう月ともらる、御てんしんハ女房しゆの御ふるま井也、く御、  
御所くハつ絲の御所よてらる、大臣さち三てうしきよてらる、日んくし  
のとうゐん殿よりも御下きやうあり、又日ら此、百いん御ささありて、夕  
うさはて、とびあいにしゆつあり、ひんくし山殿より二色らる、  
〔十輪院内府記〕中 四月廿三日、明後日發句、語宵柏、二句入見參了、端可然  
之由被仰、

春もみぬ花やちしほのふろと草

廿五日、早旦參内、直衣如例、今日一日御千句也、執筆一人、作者一人、各相對於  
黒戸沙汰也、御製執筆侍從中納言、親王御方基綱卿、伏見殿中山宰相中將、左  
大臣時顯朝臣、右大臣重治朝臣、合力民部卿、前内大臣文地丸、十四合力大藏  
卿、御室新宰相、合力宗巧、帥在數、中納言入道、凡如此也、手組等委不見及也、左  
府早速、親王御方聊遲引也、平社御法樂之時宗山、就山大臣之後、被書之云々、東岸西岸柳施而不論遲速也、余御前未終之間、由  
斷、然而西園海住山之後第三早速申之、予慥不覺也、六百韻計事終時分、平野御法樂始行、  
大略兩三句申之、余八句申之、過分也、然而前内府進執筆、傍可申句數之由、奉

御發句ヲ  
實隆ニ諮  
ラセラル

御會手組

勅定之間如此也、七過時分事終、入御之後、於御學問所有獻事、朝御粥午刻御  
飯也、三公於同所勸之了、御人衆廿五人、加御製也、

〔實隆公記〕

九 四月廿三日、戊戌晴、晚頭依召參内、明後日御連歌御發句被  
仰談、愚存分粗申入了退出、

廿五日、庚子、雨降、略中未明參内、今日千句御連歌也、於黒戸有此事、

御製 下官 執筆、一座、賦何船 夏はくを花とこましや遅櫻 實隆

親王御方 姉小路宰相 執筆、一座

式部卿宮 中山宰相中將 執筆、一座

仁和寺宮 新宰相 言國 執筆、宗巧 一座

左大臣 時顯朝臣 執筆、一座

右大臣 民部卿、重治朝臣 執筆、一座

前内大臣 大藏卿、文地丸 執筆、一座

權帥 藤中納言入道、在數 執筆、

勸修寺大納言 就山、和長 執筆、一座

海住山大納言 宗山、源富仲 執筆、一座



平野社百  
韻御製以  
下混合

甘露寺親  
依輕服不  
參

御製實隆  
兩吟  
賦何船連  
歌

文明十八年三月十八日

三〇〇

平野百韻發句藤中納言入道御製以下悉混合申、緋早速被終功、神感之至、御願之成就、珍重々々、

〔親長卿記〕

十七 四月廿五日、晴、傳聞、今日禁裏有御千句云々、予依輕服、前

典侍甘露寺親子卒スルコト、不參之由有沙汰御法樂之故也、

〔北野神社文書〕

三 山城

文明十八年卯月廿五日  
北野社御法樂

賦何船連歌

夏はくを花を見ましや遅櫻

實隆

志々終そ木々捲れもろはりそ

實隆

五月雨乃はるゝともなき軒布りそ

實隆

月うらときや山うけ此はと

實隆

暮ぬとて末野に出る鹿乃聲

實隆

眞萩見多ほ、道お一うと

吹あらし旅なる袖ようつりきて

實隆

雪う棹さすうらら乃友舟

願之成就、珍重々々、

〔親長卿記〕

十七 四月廿五日、晴、傳聞、今日禁裏有御千句云々、予依輕服、前

典侍甘露寺親子卒スルコト、不參之由有沙汰御法樂之故也、

〔北野神社文書〕

三 山城

文明十八年卯月廿五日  
北野社御法樂

賦何船連歌

夏はくを花を見ましや遅櫻

實隆

志々終そ木々捲れもろはりそ

實隆

五月雨乃はるゝともなき軒布りそ

實隆

月うらときや山うけ此はと

實隆

暮ぬとて末野に出る鹿乃聲

實隆

眞萩見多ほ、道お一うと

吹あらし旅なる袖ようつりきて

實隆

雪う棹さすうらら乃友舟

かもめ拵るあとり志はな波の上

實隆

朝日波ぬ忍み氷とけたり

實隆

かきなる岩は此庵も春去りそ

實隆

霞うたと菰苔乃かよひ路

實隆

捨人お袖乃志はくを思や終

猶たなし世ハ更すられもきほ

そえそ後うらまはなにしのおるらそ

實隆

月夜みるるる物ろろあしき

實隆

永夜乃寢覺此心は夢はてし

實隆

むしの音かまけ露霜乃なと

實隆

山風うあへぬうき海のひるあらそ

花の色香ろをふよかくれぬ

春ハあゝ林あおくを人のきて

志拵てもなくそとまよふ鳥

雨なる夕の雲乃をちあちよ

文明十八年三月十八日

三〇一



なうて夢尋ぬる冬此うそ雪

山はとのうたならハしと火を焼く

ぬる夜乃床ういとふ蚊の聲

以はう身此たもふまゝなほ夢もとん

人ころあらぬ月をあらはれめ

なとりなき野原ハ袖も露布らゝ

花をけ入る道乃行末

風の音嶺お松よりはとひきて

琴の志らへ乃あうたすのうち

をり水又軒のはし居もなとせし

なとるみとれ多秋ちう夢暮

文まぬふあよりと夜をやいそく覽

人しはめてぞ待りとるのと

尋へ夢杉夢いはくろ三輪此市

花を青葉り春ふり夢山

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

鳴乃かく川上遠くうちかすミ

鐘おほろなる月の夕暮

小雨布る空も心もまゆりよて

ををばを淫しと契りをく中

たもふより志のふ人めやわせるらん

明すきりたり志とふ衣く

郭公をまことおまくらとひすてゝ

あやめうとしく夜半のみしうき

舟をハふ淀のゝ末の朝不ら象

河音をさふ秋きりのうち

露をうる竹のさ枝のむらくよ

山の木すゑ色うハるころ

まし淫ちたれしき暮抜いうよきぞ

はむき月をは待人もれし

あら玉乃春抜ちきり此あのみよて

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆

實隆



わう水いとふ老のあらまし  
 かり乃世抜のとうよなとうたもふらん 實隆  
 ききは小篠乃風さそく聲 實隆  
 いうり猪の野へをもをのうすまうよて  
 おきもあししきも此しぬ乃道  
 やはらくは心を歌もあるなれや 實隆  
 いふこときけへうハる唐國  
 いうよしてたもふ思日を津さへまし 實隆  
 しのふそつらき戀乃くるしき  
 月みきは涙乃何とふるらん  
 夢ちゆるさぬ萩のさ夜うせ 實隆  
 秋の浪あらし濱へ乃船に縁そ 實隆  
 千里おそひ煮うたはうはらし  
 鴈比ゆくとおとの春よいうれらん 實隆  
 はそめはいま都都も来る

花う不り柳糸ひくうけ問そ 實隆  
 鞠みとあみを庭うかきつゝ  
 目よちる夢大宮人のう此すうと  
 行幸の路う所を記なる 實隆  
 日ろき野も心をいさむ駒をへま  
 いつき乃法うをこり満さらん  
 後前お世々の佛の數くう 實隆  
 逢みし身とも今ハ志らまは  
 むしあきのきとふそ舟よあふうれま  
 波も□そて抜しなる松風 實隆  
 たまるとれを露さへうは藤うつら  
 おしめ幾日をあらぬ春の日 實隆  
 歸りゆく鳥乃かさとと雲抜みて 實隆  
 布うた太山を道もわうます  
 すむ庵ハされうら雪乃底なれや 實隆



去る爰のしほをひそこり命を  
 墨染よを津を袖袂うらなとそ  
 おしろを塵を出ぬ日そを爰  
 うたなうらうふこり人の不さしなれ  
 むくひ乃不と袂身にかふてとや  
 別路うはやくもむうふ新枕  
 夢はうりなる月のあり明  
 おてふとぬ菊の一本うつろひそ  
 霜のまうきお秋をそくを爰  
 雲と袂き山をいほより時雨まし  
 昨日をふこり木うらしのこる  
 うり衣朝とけ道の袖はえそ  
 さくはなく野乃春あさ爰うけ  
 若草乃をふさる末は花もうけ  
 去りう待て袂初らひなれ

實隆  
 實隆  
 實隆  
 實隆  
 實隆  
 實隆  
 實隆  
 實隆

六月十七日

人数

御發句

脇勝仁親王

十一月二日

めくこある時夜あふうぬ方もなし  
 ま乃神うき此手向久しを  
 御製五十句、實隆五十、  
 〔御湯殿上日記〕庫記録甲二十七所收 六月十七日、北野の御法樂よ御き  
 んうあり、宮の御うと、内々とさほ、いつをのおとこち御人そ、あしとのく  
 御をそゑよてらる、

〔實隆公記〕九 六月十七日、辛卯、早朝參内、御法樂御連歌也、親王御方、帥、海  
 住山大納言、中御門中納言、下官、民部卿、姉小路宰相、重治朝臣、時顯朝臣、執筆  
 宗巧、源富仲等也、如法早速終事了、  
 程おしや夕とけ雲の下を、見  
 松のひくきも秋ちうき風、親王御方、  
 月をまゆかへの此鐘よ夜の深て、帥、  
 〔御湯殿上日記〕庫記録甲二十七所收 十一月二日、さく野をうらくの御  
 れんう、御こつけらる、

〔親長卿記〕十七 十一月二日、晴、早旦參内、依召也、北野御法樂御連歌也、參



人数

文明十八年三月十九日

三〇八

仕之人々、帥、予、中御門中納言、侍從中納言、民部卿、姉小路宰相、時顯朝臣等也、  
不被擇人、歟、

影おちて霜や天満神無月

有朝食、

〔實隆公記〕

十

十一月二日、癸卯、天晴、曉天驚寢、理鬢髮著直衣、夏、參内、今日

連歌一巡  
ノ後朝食

御法樂、御連歌也、參仕人々、親王御方、帥、按察、中御門中納言、下官、民部卿、姉小路宰、（相）時顯朝臣、執筆、在數等也、一巡了各行朝膳、日加以後、（相）之酉下刻終百韻功、各退出、

賦何路

御發句

御製、今の世も玉ハ猶ふるあられ哉

光りまつや豊年の雪、按察、

里いり春の隣、ようつりきて、親王御方、

かき海吹こそ梅の下風、實隆、

十九日、乙、義尚ノ請ニ依リ、御發句ヲ賜フ、

〔御湯殿上日記〕

庫○京都御所東山御文

三月十九日、（おかし、雨ふる）

第三  
勝仁親王

（頭き）むろまち殿より御なくといひいらさるゝ、やうてゐいらるゝ、うしこ  
まり申さるゝ、

○義尚、和歌ノ題ヲ獻ズルニ依リ、御製ヲ賜フコト、便宜左ニ合敘ス、

〔御湯殿上日記〕

庫○京都御所東山御文

五月一日、（中）むろまち殿より昨

日御とい三志ゆゑいらさられて、あうハしてゐいらさるゝ、

二十三日、（中）内侍所臨時御神樂、

〔御湯殿上日記〕

庫○京都御所東山御文

三月十五日、（中）志けあきひる不

とよらゝ、

廿日、（中）志け秋らゝ、

廿二日、志け秋らゝ、

廿三日、（中）御うくらふ行頭辨御きんのやくとむき中將、志そくとし名、の

ふひて、うむむね、御とも大志け殿、こうとうらゝ、てんきよし、めてとし、  
天下あいに持、御志よく見んしやう志ゆの御せいさうなり、猶々めてとし

〔親長卿記〕

十七

三月十六日、晴、依召參内、仰云、（中）次一兩年不被行内侍

一兩  
侍所  
行内  
神

奉行  
甘露  
寺元  
長露  
御治  
田向  
重治  
坊城  
脂名  
中坊  
俊名  
秀吉  
門宣  
致吉  
田兼

三首ノ題

文明十八年三月二十三日

三〇九



ズ御料所年  
依到來ニ  
レリ行ハス

土御門有  
進宗日次選

文明十八年三月二十三日

三一〇

所御神樂之間不可然、御料所御年貢少分御到來之間、可被行臨時御神樂、尋日次申沙汰事可仰頭辨、次源宰相俊量此間依申次、景兼事不許之時分也、雖然爲御神樂事之間所作事可仰、猶御訪者不可有下行、元長朝臣所作事同可仰、次陪從久時勲和琴所作、取歌方御訪云々、不可然、堅可加問答、人長事去々、年爲年少者不可然、可召進他人之由、可仰季繼、次笛御訪近年百疋分申之、篳篥御訪五十疋也、以其准五十疋可參勲之由、可仰景益山止云々、奉行各可下知事、歟、雖然被仰予之條、可傳奏分歟、不分明、日次事仰陰陽頭、廿三日、廿六日、廿七日奏聞、廿三日云々、各相觸了、

十七日、雨下、源宰相以書狀申送云、御神樂御訪事、尋長橋局之處、不可有下行、以奉行可申由被仰間、所詮三百疋無下行不可參云々、仍遣頭辨仰云、此間就景兼事不許折節也、如此被申者不可然、可爲如何哉、亦可申其子細、實以不可叶之由申之、即奏聞、以外逆鱗也、仍可被延引歟之由、及御沙汰云々、暫被下女房奉書云、御神樂事新宰相申子細之間、可被延引歟之由、雖被思食、余御無念之間、四辻中納言季經、令拜賀可參之由被仰、如形被領狀了、此上者可爲治定之由有仰、尤珍重之由申入之了、出納持來所司注進、有相違事見合可仰之由

御訪下行

仰了、

十八日、雨下、樂林軒來、源宰相事驚申、以書狀申之、可奏聞云々、即奏、十九日、雨下、綾小路中納言入道有種、樂軒、書狀今日不及叡覽被返下云々、女房事、入見參之處、定可爲御神樂、彌驚入者也、

庭燎

廿一日、晴、御神樂事條々有仰旨、可久時爲和琴所作、給歌方御訪之條了、廿二日、晴、庭燎事、釜殿出黒木、於干松者、自殿寮出之、近年薪不出之間、依難我九至沙汰、數年被付小分御訪致沙汰、雖然自主殿寮可沙汰之由可仰付云々、種々加問答、自主殿寮薪沙汰之事無先例、難治之由申之、其上釜殿於所々給黒木之間、有御糺明、誠不給黒木者、自主殿寮雖爲新儀可沙汰云々、奏聞、然者可尋釜殿云々、公景釜殿尋之、近年不給之、少々雖給之、每朝爲御湯料之由申之、奏聞、然者闕如之上者、爲主殿寮可沙汰云々、爲新儀之間難治也、所詮追猶可有御糺明、先今夜事御事闕之間、可沙汰之由可申付云々、仍遣一行令領狀了、釜殿事猶少糺明、伺於所々取薪之間、有虛言者、可被下彼在所於主殿寮之由申之處、及左様之御沙汰者、每朝御湯并明夜御湯等、定可及異儀之由、有仰之間、先予相計追可有御糺明、仍夜事可沙汰之由申含、拂前場了、不可說々々々、

文明十八年三月二十三日

三一



奉行參仕

出御

主殿大夫  
不參

甘露寺親  
長女房  
奉書ヲ下

廿三日晴、午尅許予下姿參内、記錄所渡殿(御方)以下打板等見廻了、不足之處召  
民部卿修理職也、仰含了、秉燭之時分、元長朝臣著束帶參内、予著衣冠同道、宣秀來  
同道、令尋諸司等參仕、漸事具申御湯之儀、次著御服、自刀自許申送云、御聽聞  
所御屏風并疊等可渡給云々、此事先々不知事也、不覺悟之由返答、重又申送  
之、尋申女中之處、先々者與御座被出端之間、別不及被遣御座、雖然近年無其  
疊之間、被渡御手水間、纏繩端疊御屏風等、今夜不可及被渡、御屏風疊許可渡  
云々、仍申付藏人大副兼致令渡了、事具之後出御、頭辨參進候御簾、重治朝臣  
參進、取御劔立簀子、藏人辨俊名持御草鞋參進、次俊名、宣秀、下部兼致取脂燭  
前行、下為先、令經御殿東面簀子并紫宸殿御後記錄所廊等給、入御殿内、此所庭  
敷布單、内之御中、山官、行沙、清、涼殿内、同庭道上敷布單、供御笏、藏人權辨宣秀持參、内豎可取次之處、在國云  
也、御拜之後即被返下、次入御劔於簾中、女房取之被、次所作人進庭火前、先笛  
元長、其外如例、歟、清涼殿柱御後柱、廊柱等打釘、折南、鹿、居常燈、之也、今度御神  
樂女房方二人不及沙汰、自女中被仰付也、主殿大夫於地下參仕、衣冠、今夜不  
參、無御訪之故也、

廿四日晴、自禁裏女房奉書到來、御神樂事無一事之違亂、此間令粉骨之故無

ヲシテ其勞  
ル嘉セラ

爲之由有叡感、畏入之由申入了、及晚雨下、

〔十輪院内府記〕

三月十八日、樂林兩廻來臨、中或談内侍所御神樂事

狀等、勸天目了、

廿三日、通世朝臣參番了、内侍所臨時御神樂、

大内政弘、周防善福寺ニ豐前仲津郡ノ地ヲ造營料トシテ寄進ス、

〔長防風土記〕

山口道場、十七街、山口宰判、周防國吉敷郡三十二

時宗壽持山善福

寺、山口道場是なり、よて所の

寄進 善福寺

豐前國仲津郡内拾貳町四段貳拾代地、道場事、

右爲造營料所、令寄附畢、者早云彼寺家、云寺領、可被全執務之狀如件、爰道場  
寺前住曉光事、其身者雖縱僧、尤其所行者如俗體、尋當宗法門之處、不知本末  
之旨云々、然者又何爲沙門之形不守戒法乎、如此之輩所准諸寺住持不可不  
誠、仍加下知者也、縑素宜承知、敢勿違越矣、

文明十八年三月廿三日

散位從四位下(大内政弘)良朝臣花押

二十五日、辛未ノ日御祝、

文明十八年三月二十五日

山口道場  
道場門前  
政弘寄進

曉光形ハ  
僧ニシテ  
行ハ俗體  
法門ノ本  
末ヲ知ラ  
ズ、僧ノ破  
戒ヲ誠ム



文明十八年三月二十五日

〔御湯殿上日記〕

庫○京都御所東山御文  
庫記録甲二十七所收

三月廿五日、雨ふる、○中御日つし、いよ殿  
よりらら。

三一四

○コノ後ノ未ノ日御祝ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔御湯殿上日記〕

庫○京都御所東山御文  
庫記録甲二十七所收

四月廿日、雨ふる、○中御日つし、す  
け殿よりらら。

五月三日、

御日つし、新大せけ殿、

廿七日、御日つし、御あちやくよりらら、

六月九日、御日つし、せけ殿よりらら、

廿一日、御日つし、新大せけ殿よりらら、

七月四日、

御日つし、新内侍殿、

十六日、御日つし、御ちの人、

八月十一日、御日つし、權をもしよりらら、

廿三日、御日つし、いよ殿、

文明十八年三月二十六日

〔御湯殿上日記〕

庫○京都御所東山御文  
庫記録甲二十七所收

九月十七日、御日つし、上らふよりらら、

廿九日、御日つし、權をもし、

十月十一日、御日つし、新内侍殿よりらら、

廿三日、御日つし、御ちの人、

十一月六日、御日つし、せけとのよりらら、

十八日、御日つし、新大せけよりらら、

二十六日、御日つし、義尙、紫宸殿ノ橘樹ヲ植ウ、

〔御湯殿上日記〕

南殿のそちをれうへさせらる、

〔後法興院政家記〕

樹被植進南庭之橘樹云々、

○徳大寺實淳、紫宸殿ノ櫻樹ヲ植エ換フルコト、十四年三月五日ノ條

ニ見ユ、又義尙植ウル橘樹ニ實結ビタルヲ、義尙ニ遣サル、コト、便宜

左ニ合致ス、

〔御湯殿上日記〕

庫○京都御所東山御文  
庫記録甲二十七所收

十一月十五日、

中むろまぢ殿ウ

文明十八年三月二十六日

三二五

義尙植  
ル橘樹  
結ビタル



實ヲ義尙ニ賜フ

文明十八年三月二十七日

三一六

へさせらるゝとち花よ、とまりてめてとさとて、一御ふとていらをらるゝ、  
伊豫河野通昭、二神式部丞ヲシテ、同道全跡目惣領職ヲ安堵セシム、

〔二神文書〕豫伊

二神道全入道跡目惣領職之事、右任由緒、任先々之旨、知行進退不可有相違者也、仍如件、

文明十八年三月廿六日

通昭花押

二神式部丞殿

二十七日、西山城貴布禰社、同社領由良莊ノ年貢無沙汰ニ依リ、祭祀ヲ行ハズ、是日、同社ヲシテ、神事ノ闕怠ナカラシム、

〔親長卿記〕三十傳奏奉書案

由良莊代官難澁ス年貢無沙汰ノ料足他ヲ以テ沙汰スベシ

貴布禰兩官申、就計會辭退當職之、神事已近々之處、可闕御祈禱之條、太以不可然、就中被定由良庄公用之處、代官難澁云々、年貢令無沙汰者、彌久縣主以他足、可致其沙汰歟、一社一同加談合、云神事、云御祈禱、不御事闕之様、可被致其沙汰之由、可申旨候、恐々謹言、

三月廿七日

賀茂神主殿

猶難澁ア官代改ムベシ

由良庄公用、就無沙汰之儀、貴布禰神事可闕怠之由、注進之趣、令奏聞、申候趣被驚思食候、于今如此闕怠事、實無先規候、猶有難澁者、可被改代官職之由、可被成御下知於社家之由、其沙汰候、重慥可有注進候由候也、恐々謹言、

三月廿七日

親繼

貴布禰兩官御中

競馬會

貴布禰司競馬會神事、依無足、辭申當職事、已無餘日事候間、可爲如何候哉、爲一社可被無爲之沙汰歟之由、可申旨候、恐々謹言、

五月二日

親繼判

賀茂神主殿

氏人中同可被仰遣候由候也、

二十八日、甲越中大光明寺勸進ヲ行フ、是日、義政室日野氏、之ニ奉加ス、

〔實隆公記〕

八文明十七年十一月十二日、己未晴、師富朝臣來、越州寶積山大

中原師富勸進帳草案

三二七



文明十八年三月二十八日

三一八

三條西賞  
隆清書ス  
大光明寺  
ノ僧實隆  
ニ茶ヲ贈ル

奉加帳

義政

義尙

富子盆香  
箱ヲ奉加  
ス

禁裏御奉  
加

光明寺勸進帳草持來、喜入之由謝遣了、

十三日、庚晴、略中寶積山大光明寺勸進帳清書之、

〔實隆公記〕

九

四月三日、戊寅、晴陰不定、寶積山大光明寺五穀法師茶三十

袋惠之、自愛、則十袋分頒東隣、（正頼町三條公治宅）

〔安達喜三郎氏所藏文書〕

中〇越

寶積山大光明寺奉加帳

准三宮（義政）花押

征夷大將軍（義尙）花押

〔附箋〕きんしく此不ん、おなしくかふそこ

御ミとひさぬより御不うら、文明十八年三月廿八日

從一位富子（義政室日野氏）

左衛門督（畠山政長）花押

伊勢守（貞守）花押

伊勢兵庫助（貞隆）花押

禁裏御奉加

一位富子

文明十八年三月廿八日



大光明寺奉加帳

富山縣彌波郡鏡波村

安達喜三郎氏所藏

原寸

紙

准三官落

任表人將軍家

從一位富子

大光明寺奉加帳  
富山縣彌波郡鏡波村  
安達喜三郎氏所藏  
原寸  
紙  
三月廿六日



大光明寺奉加帳

富山縣瀨波郡波敷村 安達喜三郎氏所藏

原寸  
一〇二  
一七

准三官卷

征夷大将軍

後一位富子

大光明寺奉加帳  
富山縣瀨波郡波敷村  
安達喜三郎氏所藏  
三月廿二日



大光明寺奉加帳

富山縣礪波郡鼓波村

安達喜三郎氏所藏

原寸

縦 〇・三二七  
横 〇・四二七

准三官券

征夷大將軍券

後一位富子

きんしんれんぎんきんきん

清きんしんれんぎんきんきん

安達喜三郎氏







四十三歲  
甘露寺親  
長嫡女

親長除服  
後花園天  
皇典侍大  
尼納言比  
丘

世系

(關白政宅)  
關白(花押)

前典侍甘露寺親子<sup>慶</sup>卒ス、

〔親長卿記〕<sup>十七</sup>三月廿八日晴、自安禪寺殿有召參仕、有一獻、景聰庵比丘

尼慶祐<sup>四</sup>今日他界、自去年六月腹所勞也、仍自御馬早歸了、予輕服<sup>十日、三</sup>

四月二日、雨下、輕服暇中間、當番不參、

七日、晴、依輕服暇中、當番不參、

九日、晴、申除服參内、於御三間種々有御閑談、

〔實隆公記〕<sup>九</sup>三月廿八日、甲戌、天晴、<sup>○中</sup>抑故院大納言比丘尼親長卿嫡

女也、今年四十三歲、今日逝去、長病之間、兼以雖存内事、猶以驚歎之、親昵彼□

心中不能□

〔尊卑分脈〕<sup>藤原氏</sup> 高藤孫

親長

〔典侍〕  
女子<sup>親子、後遁世、後花園</sup>

〔御湯殿上日記〕<sup>○京都御所、東山御文</sup> 四月九日、<sup>○中</sup>かんろしちよふく  
せん下申してしこう、

文明十八年三月二十八日



文明十八年三月二十九日

三二〇

一周忌

〔親長卿記〕 十八 文明十九年三月廿八日、晴、今日予息女慶祐比丘尼一周忌也、請佛陀寺僧三人、有小作善事、此外於兩三ヶ所如形佛事、

二十九日、乙亥、三月盡連歌御會、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫記録甲二十七所收

三月廿九日、御まじりあり、ふしと殿御まいり、そのるゝのるゝいづもの人をさうく、まこう、むて、十しゆちや御

十種茶ア

うきあり、

〔實隆公記〕

九 三月廿九日、乙亥、晴、今日三月盡御連歌、可參内之由被仰下、

依歡樂之氣不參、

〔新撰菟玖波集〕

賀連歌

文明十八年三月盡百韻連歌こ、

草葉の露をうせにみされぬ

あとし野やされをさこそと袖ぬれて

御製

〔新撰菟玖波集〕

雜連歌五

文明十八年三月盡百韻の連歌よ、

おもへとしまうせてやすね身比ならひ

かきりあるみそ世袂をなくさむ

(勝仁親王) 三品親王

勝仁親王御製

周防長門豊前筑前守護大内政弘、評定式日ニ奉行衆參仕ノ掟ヲ定ム、

〔大内殿掟書〕

御評定式日、奉行衆悉食後早々可有參候也、若不參候時者、早朝對當番奉行、可有言上子細之由被仰出候畢、仍壁書如件、

文明十八年三月廿九日

○政弘門役關番、奉書案文等ニツキ掟ヲ定ムルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔大内殿掟書〕

一 御門役關番事、奉行當番中事者、爲當番役申合、可定入體、本番參上之時ハ、如元可勤也、

文明十八年六月九日

一 奉書案文事、爲奉行當番役可備上覽之由被仰出候處、近日無其沙汰於自

今以後ハ、就毎月奉書案文事、可備上覽之由所被仰出也、仍而壁書如件、

文明十八年七月六日

武親奉

一 奉書衆并他家御使、次評定衆式日人數急々之時者、假雖爲御休息之時節

文明十八年三月二十九日

三二一

不參ノ時ハ當番奉行ニ届出ヅベシ

門役關番

奉書案文

他家御使等ノ披露



文明十八年三月二十九日

不例御氣色、早速可有披露之由被仰出畢、

文明十八年七月十日

中務丞 奉

三二二

奉行衆退出時ノ掟

一 每朝奉行衆退出之時、可被案内之由候也、

文明十八年八月二日

弘途 奉

他出扈從者ノ定

一 被仰出候條々、他家之人、同使者參上之時披露事、申次當番役事者勿論也、自然無祇候者、近習當番可有披露、無祇候者、奉行當番可有披露也、

一 何方にも御出之時供奉之衆、次御中間御小者、御輿舁已下可相觸之由、對當役人、奉行當番より申へし、持さらる可き御禮物以下事、同當番役と志て相調、隨御氣色、供奉衆こ可渡之由壁書如件、

文明十八年十一月四日

在山口衆在住宅ノ名ヲ注シム者ハ召放

諸人在山口衆、假雖爲一日、以密々之儀在宅之輩、有達上聞事者、注置其人數、御暇言上之時各不可申次也、因茲重而御内々於令在郷族者、永可被放御家

タシム

人之由所被仰出也、仍壁書如件、

文明十八年十二月十二日

是月、義尙、梅枝ニ和歌ヲ添へテ、勝仁親王ニ獻ズ、親王、返歌ヲ賜フ、

〔常徳院集〕 三月、宮御方へ梅枝をまいらせとてむすひ侍し、

おもひさや春去らぬ身此宿に咲軒を此花ハ君ウよめとも

御返し

花もさう我をまちえてうれしきハ君ウことはの色をそへ律記

轉法輪三條公敦、大内政弘ノ子龜童丸義興ニ孝經ヲ贈ル、

〔孝經〕○帝室御物

後小松院御讀書之始、吾高祖父後押小路内府公忠、奉書進之本也、先考後三條實忠、後小松院禪空、不慮相傳、以所付予也、今與龜童公、以令知孝者徳之本也、

文明十八姑洗下浣日

桑門祥空

此本龍翔院右府防州下向之日被隨身之、予記往事、以便風求之、則書寫畢、於本者返送彼國者也、

享祿辛卯後五月下浣

茲芻堯空三條西實隆

文明十八年三月是月

三二三

義尙和歌

勝仁親王御返歌

後小松院御讀書之始、吾高祖父後押小路内府公忠、奉書進之本也、先考後三條實忠、後小松院禪空、不慮相傳、以所付予也、今與龜童公、以令知孝者徳之本也、

三條西實隆借リテ書寫ス



文明十八年三月是月

右件本端一兩枚有點、予覓他本、加朱墨兩點了、

申恩  
師元與書本也、

于時天文第三六月十六日凌晨炎蒸終功了、

都督郎公條

(三條西)



為之宗廟以鬼享之春秋祭祀以時思

之 立廟祔宗祖之後則以鬼礼享之寒暑變移以時祭祀展其孝思之也

生事愛敬死事哀感生民之本盡矣

死生之儀備矣孝子之事親終矣 愛敬哀感

孝行之始終也備陳死生之義以盡孝子之情也

### 御注孝經

後小松院御讀書之始吾高祖父

後押小踏内府 云忠 奉書進之本也

先考後三條入道左府 禪室 不慮



為之宗廟以鬼享之春秋祭祀以時思

之 立廟祔宗祖之後則以鬼礼享之寒暑變移以時祭祀展其孝思之也

生事愛敬死事哀感生民之本盡矣

死生之儀備矣孝子之事親終矣 愛敬 哀感

考行之始終也備陳死生之義以盡孝子之情也

### 御注孝經

後小松院御讀書之始吾高祖父

後押小踏内府 忠 奉書進之本也

先考後三條入道左府 禪空 不慮



後押小疏內府 云忠 奉書進之本也

先考後三條入道左府 禪空 不慮

相傳以所付予也今与龜童云以

令知孝者德之本也

文明十八姑洗下浣日 業門祥空

此本龍翔院右府防州下向一日

被隨身予記江事以便風求

之別書寫畢於本主返送皮

國者也

享祿辛卯夏月不漸忘留素空

右件本端一兩枚有点予不負他本加朱墨兩点丁  
丁時天文第三六月十六日凌矣並終印) 都督印公條



後押小疏內府忠奉書進之本也

先考後三條入道左府禪空不慮

相傳以所付予也今与龜童云以

令知孝者德之本也

文明十八姑洗下院日 栗門祥空

此本龍翔院右府防州下向日

被隨身予記江事以便風求

之別書寫畢於本上送送皮

國者也

享祿享卯後月个漸忘留書空

右件本端一兩枚有点予不實他本加朱墨四點丁  
于時天文第三六月十六日凌矣並給印 都督印公條



是春、武藏太田道灌、建長、圓覺兩寺ノ學僧等ヲ請ジ、隅田河ニ船ヲ浮ベテ、詩歌ノ會ヲ催ス、

〔梅花無盡藏〕

二 丙午、武藏所作 篇岐陽之拾遺、

江上春望

道灌靜勝公招福鹿兩山諸尊宿并少年、浮畫船數艘於隅田河、詩歌鼓吹、一時之壯觀、

十里行舟浪自花、春遊不覺在天涯、隅田鷗亦應都鳥、鼓吹晚來聲入霞、隅田在武藏下

總兩國之間、路傍小塚有柳、道灌公爲攻下總之千葉、構長橋三條、○道灌、千葉ヲ攻ムルコト、十年十二月八日ノ千葉、構長橋、三

花塢夕陽

福鹿兩山之諸老來、

鴉背馱殘斜照纔、老年眼力被花催、細看尙淡於春霧、一塢餘痕欲染苔、

留春々不駐、福鹿兩山諸老并年少、有詩歌之宴、道灌靜勝公唱詠中之句爲題、

老尙逢春雖可歡、來遲易去奈無端、鶯聲一枕夢醒後、綠樹煙肥昨雨殘、

○集九、道灌ノ招キニ應ジテ、江戸城ニ抵ルコト、十七年十月二日ノ條

ニ見ユ、

朗詠中ノ句ヲ題トシテ詩歌ム

道灌ノ架長橋三條

畫船數艘



文明十八年四月一日 二日

四月丙子朔 盡

一日、丙子御祝、氷ヲ供ス、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫記 庫記 甲二十七所收

四月一日、雨ふる、あさ御ちり月らり、○中

あさうれ井あり、まの月よ翌一日さむく、まいらをへさよし、（讀也）さよやを申せ、

〔親長卿記〕

十七

四月一日雨下、雷鳴、氷物自主水司清三位宗賢、送之、自内裏又被下之、

周防長門豊前筑前守護大内政弘、分國內相伴衆著座ノ數ヲ定ム、

〔大内家壁書〕

御相伴衆著座人數之事、

定

御相伴衆事、著座不可過十人也、兼日勘人數、可爲十餘人、非衆除之、時者、自末座衆可斟酌、依別仰出被召加者、非制限、

文明十八年四月朔日

二日、丁丑貝覆ノ御遊アリ、

著座ノ數  
十人ヲ過  
ズベカラ

甘露寺親  
長ニ氷ヲ  
賜フ

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫記 庫記 甲二十七所收

四月二日、雨ふる、御ういおしい二そんあ

り、御所さぬまもあるをすめてとしく、

三日、戊寅太白、月ヲ侵ス、

〔親長卿記〕

十七

四月三日、陰、入夜晴、有月行變也、

四日、晴、○中陰陽頭有宗朝臣來、閑談、尋月行變事、爲其分之由返答、月與金曜

〔大乘院寺社雜事記〕

百三

四月三日、一西方大星出、去月事間六寸也、光合事希有見事也、天下之沙汰也云々、

〔附録〕

〔對州編年略〕

○中筑前

文明十八年丙午五月十二日夜、星入月中、

四日、卯巳稻荷祭ヲ停メ、尋テ、之ヲ追行ス、

〔東寺百合文書〕

○山城

廿一口方評定引付文明十八年

同廿九日、

寶緣 教濟 覺永 融壽 慶清 嚴信 宗承 圓忠 祐源 榮舜  
公遍

一來月七日、中稻荷法樂、已刻、可被執行之、申刻之時分者、會中講可差合之

文明十八年四月三日 四日



故也云々、

同十五日、

教濟 覺永 融壽 慶清 嚴信 圓忠 祐源 榮舜 俊雄 融晃

公遍

十六日追  
行ス

執行來云、

明日<sup>日</sup>六稻荷祭禮、御酒座<sup>江、壘</sup>大工三十疋可出之處、一方大工自去年<sup>元</sup>月十二賜補任之爾者各十五疋宛可沙汰之由申候間、新補之大工<sup>元</sup>申付之處、彼申上通者、去年分給田一圓ニ已前之大工給之上、當年夏堂壘一向不被仰付之間、旁以御酒代十五疋可致沙汰事、不便之至極之由、不可致沙汰之由、申分執行方來被申候間、披露之處、新大工申趣尤歟、於當年者、夏堂并放生會壘新補大工可調進之處、造營方<sup>乘圓</sup>ヨリ不申付之事、越度也、雖然至今日者、無力次第也、所詮當年放生會ヨリ、<sup>來年</sup>堂マテ、相續而新補大工可調進之分、堅可申付乘圓之由、衆議治定了、則以定春申付了、次御酒代十五疋之事、以前大工一圓<sup>冊</sup>疋、可致沙汰之由、自執行方被下知之間、則畏領狀申通被返答了、自放生會之壘、來年之夏堂マテ可沙汰之由、

〔東寺長者補任〕

五 同十八年、中 稻荷祭有之、

五日、<sup>庚辰</sup>御不豫、

〔御湯殿上日記〕

○京都御所東山御文庫記録甲二十七所收

四月五日、

○中

志け ちり御とやく

丹波重長  
拜診  
御蚊觸

竹田周防  
拜診

御平癒  
宮女等御  
平癒御祝  
=酒儀ヲ  
獻ズ  
邦高親王  
道永法親  
内等御參

夜ニ入り  
テ御連歌  
アリ

ころまろさよし申て、御くそりまいらざる、

六日、○中 五郎さへもんよ御うしろの物ミさるる、

七日、せむうめして御うふきみさるる、

十四日、御うふれよ御ゆるけ御ささなきにより、御せいけさよりある、御さう月らり、せけ殿、ちうハし御てうしともまいらる、御うふれせやくとよくからせおハしまし、うとくめてささとて、ミちく上らぬ、こんせけ殿、新せけ殿、のころせ御てうし御うはらけの物ともらり、ミん部卿、さへもんせけ、さよくら入もまいらさるる、ちう殿もまいらさるる、ふしミ殿、御むろならしませ、もまるとえ、うけとし、うなとつ、うのなううとい物まいりてうさふ、おもしろく御ひしくめてさし、どのなうミを御えいあり、御くしもあり、せえの物御さるなとまいらさる、いゝわう宮の御うさある、さて、夜よ入て御きんう御ささ、



文明十八年四月六日

三三〇

義尚出題

六日、辛巳萬松軒等貴、二十首和歌ヲ勸進セラル、仍リテ、義尚モ之ヲ詠ズ、

〔常德院集〕四月六日、宗山より予出題して、廿首歌を、めと望し、窓柳十春

首秋  
同之、

これも又窓の螢乃光うれ柳よぬけ紅花ゆ此しらさま

野徑葦

そ里衣君の袖ふたをる雨み紫此程きすまれつゝてん

松藤

石とし紅瀧な花山乃松うえにおち來る水や春此藤浪

庭萩

いつ乃よ此秋のあはれ乃うせよりうのたその萩の音つれぬらん

見萩

袖の露ハ人此心をそめそて、萩乃下葉此色ううつろふ

秋竹

志く紅とも色ハかそらしくれ竹の園生此秋乃代々のしとる夢

○義尚、結城尚隆勸進ノ和歌ヲ詠ズルコト、便宜左ニ合敘ス、

義尚結城  
尚隆勸進  
ノ和歌ヲ  
詠ズ

〔常德院集〕七月十五日、結城藤原尚隆十首歌人々よす、め侍し、峯霞

又よし乃、青糸うき手ハうすめともこけ此衣ハとつとしもなし

鷹

御う里野や木居きぬたう此振舞み兎うひしてす、やと花てむ

楊貴妃

宮乃内ハ露のうてなとを望そて、消家む人の跡をかきし花

八月十日、藤原尚隆を、め侍し歌合す、山家月

岡のへや松ぬくうせよ夢さめて此き端の山乃月を見るうさ

依戀祈身

此まゝにうけそなれそは志糸繩のちう花を人の契とおもそん

○義尚、尚隆ト和歌贈答ノコト及ビ屢和歌ヲ詠ズルコト、便宜左ニ合

敘ス、

〔常德院集〕三月白藤につ家て、藤原尚隆よつうをしけ紅、

君う心をそなれ此松山こさはころこ此藤浪のうけてうらえお

返し

文明十八年四月六日

三三一

義尚尚隆  
トノ和歌  
贈答

尚隆勸進  
ノ和歌合